

繪本  
忠臣藏

164  
970





程訓序為永先生著

續本志臣藏



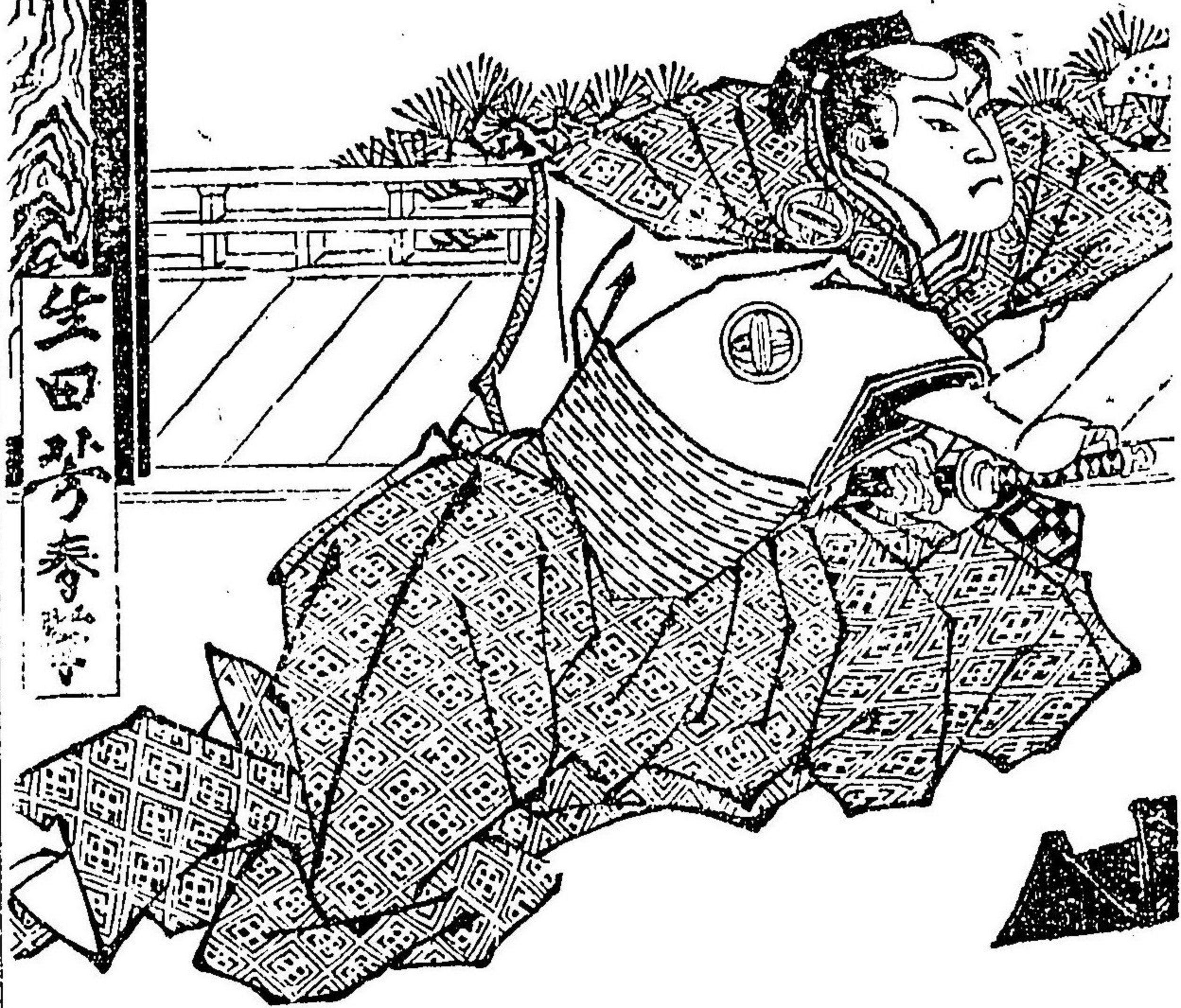
駿々堂本店藏



高野師直



鹽谷判官高貞



生田方春



繪本忠臣蔵

第一回

東郷 狂 亭 主人 著  
小山田庄左衛門並直助權兵衛の傳



朝香 徳 芳 春 忠

商人の志一敵討ちの次第を御覽じろく古今稀なる敵討の次第是は此度鹽谷家の浪人  
因十七騎高の家へ夜討をいたし主君の敵を打取たる次第を御覽じろ上下にては解明細商人一  
邊は之のたが光と御評判の敵討の次第ト呼立歩商人の聲を聞より此所の軒彼處の家より立  
出ても商人は更に競ひつゝ我勝にこり求めけれ忠臣義士も幸不幸適れ人に劣とらじと思ひ詰た  
る金儲の心を勝ちける色欲のたゝらぞするとなりけら一爰に小山田庄左衛門の父重兵衛と聞  
けしは既に歸ひし頃むきて八十一才の老衰と成けるのみか病氣も急連判状には漏たれ共心は  
猶も忠義の魂我子庄左衛門の勝氣にも頼かひある勇烈の義心不撓會盟の中をともへば勇  
まもく其身の病氣も打忘れいま賣来り一夜討の次第義士の姓名記したる判附買て歸のうへ幾  
歳もなく練返し始終を讀下せと我子の名前あらざればさても不思議と獨言(重)ニ、埒もない  
農相な物を仰山に買歩行を大星氏も一方の手當と頼のみ一庄左衛門其名などを書漏す様  
を不詮察これがないで解明細卒の名目を書落す位ひでは當にはならぬ反古同前と喧やく門の  
周知あげて入来る隣りの小間物屋これも齡は六十の上をこして隠居の合口とも遠慮もせず  
立作ら(小)モノ重兵衛さんお断の一件を最板行にして賣に來ましたイヤ御不自由のお身  
でもそれをば早速買ッーやひましたか(重)ヲ、小兵衛さんお出被成たか今之を呼込で買ま  
たが紛らばしい様に思はれますテ(小)成程左様で御座ませうなんを云ても一昨日イヤ則一昨  
日の事を今日買に來るのじやからどうで送つた事計で御座ませう夫をばまだ見ませぬか降れ



小三郎が出入するお屋敷から寫して参つた此書附一かも二軒のお大名でお書留に成たるを  
 寫して持て来ましたといふを聞くより重兵衛は我子の名前非るを心に掛たる連名書周章眼に手  
 を差出し(重)イヤ夫は忝ないドレ引合して見ませうト三枚並て人数を算へ略きて託せし  
 御座次第を讀と小山田とも庄左衛門とも記るゝて無ば若老眼の見損じかと眼鏡の曇りを拭袖  
 も涙の濕に猶霞む文字も幻と成にけり小兵衛も胸を措寄せて(小)モン重兵衛さんおまへの  
 漸性を知ませねば御子息さんの本名も未録々に聞ませぬが一日始て敵討ちの噂と共に承  
 れば御子息様も同意の忠義とお明し成た大事の本望近所の衆へも咄しやして影乍御前の喜  
 び囃かきと譽も致は御老年の御心細さをお察し申して種々お囃致ます此連名のいつれが  
 御子息様のお名で御座ますを免てもの事に御賞名を(重)去ばサ私もコレ是かとお咄もをす  
 樂み故縁度と無縁返して見れ共見へぬ我子の姓名(小)ナニク無事は御座ますまいなにと記  
 して御座やら若旦那の御本名を(重)サア賞名は小山田庄左衛門(小)エイアノ小山田庄左衛  
 門殿と(重)ハテ仰山な御挨拶の名称が何と致しやうは是には漏て居けれど若討死の沙汰  
 でも御座ますか(小)イヤ左様では御座ませぬが(重)イヤノ何か譯ある御様子若や悴の  
 其噂をお聞成れた事も御座らば善惡共にコレ此親父へ(小)イヤ何も取留た事を聞はしませ  
 ぬがトいふ折節に裏口を餘々開て貽賣商人以前は重兵衛親子の爲めに仕はれたり仲間五助  
 (五)旦那さま今日は御病氣は如何御座ます(重)ヲ、五助か寒いのに精か能出るなノカ  
 慮さと思ふ様に渡世も出来まいイヤ夫は左様と此度の一件世間の噂を聞やうたかトいうに五  
 助は生得が足ぬ御師の正直物前後遠慮も有ばこそ(五)恰も其身が用事の歸り義士の引揚に  
 存合せ様て見知の太監に庄左衛門のことを聞くと十二日の日に連中へ割付配る三百兩圓覺寺

一納むべき亡君の御遺物そ  
 の二品を受とつて心機か  
 共儘出奔さす命は惜もの  
 重兵衛殿が聞れたら無念  
 と思はれうと言捨行たる一  
 伍一什を少しも餘す物語れ  
 ば聞て驚く重兵衛忠久面色  
 赤くまた青く齒莖をかみし  
 め拳を握り暫く言葉も無り  
 一が小兵衛も何とあいたつ  
 の成ねば其座の氣の毒さ之  
 も者さへ云はざりしが漸々  
 に(小)イヤノ斯云時には  
 種々な説を云者又宜御沙汰  
 が御座ませうと無詮方の藥  
 言葉狐藏にこそ歸り行跡に  
 重兵衛溜息を熱々思ひ廻す  
 に我子の變心相違有まじ左  
 も無事なら三方四方で寫留





られし連名は一字も違はぬ四十七騎小山田とも庄左衛門とも記さるは欲に心が亂れてより出奔せしに疑なく左様知らずして仇討の隙を聞き自慢して我から明せし我子の名氏云甲斐も無恥かし今をも知れぬ老の身も存命られぬ面目を死なすは言譯有まじと思ひ詰たる重兵衛が心の裏を哀れなる五助は白痴男故云事云て立歸る隣りは例の小間物屋寄集一人々の隙も同じ敵討區々咄す其中に兼て聞たる小山田の咄しを狐鼠く耳口て思はず隣の壁の方を見返る時しも壁越にぐさ貫く白刃の切刃是はと大勢立騒ぎ驚中にも此家の小兵衛重兵衛方へ馳行て見れば斯は抑何事を彼重兵衛は床の上に腹切掛て切ざりしや壁に寄れて眼を貫き其切先が小兵衛の方へ突抜たるにて有ける也小兵衛は馳寄見たれ共流石は武士の心掛ある老人病の爲に弱れども經穴を突たる事なれば苦痛もなさで死したるは壯年剛氣の勇士にもさらに劣ぬ最期なり側に残す書置有

君の御爲に仇を報じ死を致候事珍しからず候へども老蓮候心より愚息庄左衛門の個人簡問敷御吹聴申上候處今日に至り畜類にもおとり候贈亡君へ對し恐入候のみか各々へ無面目せめては片時の死を差急候老病の心外壽命の程よろしく御見察被下死後の御厄介何卒願上候

十二月廿日

近隣の御方々様

小山田重兵衛

ある一書を留めしければ小兵衛をはじめ近所の人々その心根を不便に思ひまた庄左衛門が不慮不幸をかたりつたへてはくみつ、此事を公朝へ訴へたてまつりてそれくの街さしこにかせ跡念頃に吊ひけるまぞかゝる忠義の子と生れし庄左衛門が變心はいかざる由へそのことは次の條下を讀得て知るべし

第二一回

近頃小山田庄左衛門は大星の下知に随ひ御菩提所圓岳寺にいたりそれより同意の諸士へ金子を配當し買物借財の拂ひ又妻子等の扶助にさせんと三百兩を渡されこれを懐中して大佛堂町といふ所まで往か、りしが雲氣催す嚴寒の身にしみしと冷とふる寒き凌ぎの酒樽嫌棄はて、身はなきものと明日はなる覺悟の眼にも世の中の塵は曲者惡業に落いる時節か行先へ十七八の島山騎姿も意氣な處女の出立敷つゝ雲より猶白き塵に湯巻の紅縮纏熱る心中か戀風の驟徒素足に駒下駄や心の手綱庄左衛門被も因果惡縁か放れて同路筋を三丁斗り歩行し所に此所なる町家の中は頃立派と云には有ね共また常ならぬ家ありて三間々口を二間の黒堀一間の間に潜に格子戸四尺の踏脱二尺の箱段堀の内なる小庭には見越の松の根もろく掘出し二階に二方椽手習に竹の細工有二方の障子を閉たれば内の造作主人の心その善悪は不明ぬと俗眼を以て見る時は先羨しき住居なり娘は茲の格子戸を明て宅にぞ入りける慕ひ來りし庄左衛門は手に持し物を取れし如く忙然として、イば折しも二階に糸竹の音色如き合奏たか妻琴か調子よく調の間に、鶯の啼音にまざる女の物こそ惚々として聞ゆれば心亂る庄左衛門胸に勝手を思接して、騒く門口格子戸を開て内より立出るは三十歳計の女房の色白くして艶容なるが



浴衣を下女に抱させ合出頭にて庄左衛門と顔見合て(女房)ヲヤ庄さんと呼掛られて庄左衛門  
 (庄)イヤ此は珍らしい先其後は(女)アレマア此處へと云乍ら椅子戸より奥の方へ向ひて(女)モ  
 レエ〜一寸と(亭主)キヤ〜何だ(女)アノ小山田の庄さんが見へなさい升たト云聲聞て立  
 出る此屋の主も鹽谷の浪人以前は鎌倉屋敷の金役に御家の變を幸に紛らかりたる多分の  
 金子夫を手元に遊藝の女を抱へて料理屋の酌取女に通はして其花代を取せ業となま又内く  
 金を貸て利分は重く〜今は豊に暮〜つ、實名玉虫辨左衛門を玉村榮次と假名して此所には隠  
 れ〜なり(榮)イヤとりや珍らしい庄公如何のだコレサマア此方へ(庄)此は此は玉虫氏一別以來  
 先御健勝で(女)アレマア法正いね〜(榮)サア〜マア此方へ上なせ〜と何だ草鞋か胸背脚半  
 抱袋丸で飛脚と云形だのと音聲ら奥の方へ壁を掛る(小)イヤ〜左様致して居られせん今  
 日はチト急用で諸方へ廻らねば成ませんから(榮)ハチサ野暮な事を言ふせ此寒いのにと無理  
 に勘めて足を洗はせ願て主人が按内して奥の座敷に差向ひ(榮)サアヨ雖ぞ火を澤山に持て來  
 かなそ〜直に燭を掛て鍋焼か平でも拵なサア〜火鉢の際〜此は〜たり遠慮いらね〜サア  
 爰へヤレ〜〜久〜く面會だ子時に嚴重な形て何處へ出かける心組だ(庄)〜イヤチト遠方〜無據  
 ト言所へ酒肴出る(庄)此は〜存じ掛ない御馳走を誠に此では(榮)マア其様に法正〜ね〜  
 で平坐でもかきなせ〜と是より盃の數も重なり二人共機嫌に成て(榮)ヲイ〜お安や〜と  
 い〜ばかりのむすめ返(榮)ヲイ手前は庄さんに酌をして難(不安)ハオ今迄取物持て来りてか  
 らと勝手へ行(榮)如何なるの女を女房にしてやる氣はね〜か直に相談が出来るせ(庄)それは  
 難ても不及ね〜事だが貴下の身の土屋に養ひの事だ子失禮乍ら何が御商業で此様に賑かに  
 暮〜成るか(榮)コウ〜夫が狭ひ了簡といふものだと談話の中女房お言も湯より回りに

供々に指つ押へつ酒宴時刻移れ  
 庄左衛門武士が血判同利の誓  
 涙漏る恥じる思へば形容を正し  
 て(庄)イヤ存外の御馳走千方の  
 庄公失禮乍らお暇申て(榮)此サ  
 庄公假令何の用が有にもし  
 ろ今つから何處へ往れるものか  
 と言つ、立て縁頼の障子を明  
 (榮)夫や此景色を御覽じろ唯一  
 箇の銀世界此真白な家根を見た  
 ら腰を落階ても宜むアね〜ホ  
 (庄)イヤア何時間にか大雪に  
 ちま〜たね〜か〜今夜は平間村  
 まで(榮)コウ〜其用向も大略  
 承知だが餘程悪い了簡だ(庄)  
 モ、何が(榮)コレ高くは言ね〜  
 が貴公の用と言は一味の者へ  
 七い(庄)エ、(榮)如何だ驚愕するか  
 成程夫ア主従の中じヤア忠義と云様なもの、君の心と家來の心と違ては不能成功ね〜



あま〜し  
 あま〜し  
 持た〜し  
 死〜し  
 死〜し



八い  
レ能考へて見な亡君の高の氏を切て棄んと思ひ込は天下の爲に極々の忠義他に難義を懸さ  
せて權威を振ふ師直を滅亡んとせらるゝ始から家をも身をも棄てなされて鎌倉殿へ敵義の眞  
忠打損じても自から高野も近頃不首尾の暇此ぞ亡君の御本意と申もの法に背ひて浪人の仇打  
なんどと徒黨を催し一味を盟ひ打も仕保が上への恐縮亡君へ却て不忠夫より面々が時節を待  
て何卒浪人の活業にも利分を考へ金銀を貯それを執權の方々へ手向して亡君の御舎弟様を再  
度お召出しに成様に願ふが忠義の極意じやア有まいか勘辨被成と解つけられ元來心の亂れた  
小口佐辨奸智の得手勝手を尤らしく聞せしめて亦益を重ねる時しも早入相の鐘の音の陰々とし  
を響きけれ斯る所へ彼お安は一際美しく化粧をなす庄左衛門が側へ坐し心を附て雲應は終  
に鐵石の心も砕け酒に本意を失ひて彌々陽て居たりける嗚呼悲ひ哉世の人情暫時の興に魂を  
奪はれて穢なる名を百年の後に流してそしらるゝ元この災ひは何よりぞた、お安が色香に起  
れり去ば壯年の中は血氣未だ定まらず是を誠むる事好色に有と故人の金言録を讀

第三回

うた一心で留て歸す夜は幼君お方の爲にも成と泣いて別れて又御げんもじ猪牙の蒲團と夜露に  
濡て跡は物憂獨寝爲も茲が苦界の真中かいナト互に泣ふ三味線の音も晴渡望の夜や彼辨左  
衛門の扱りに前後を忘し酒の咎庄左衛門は唯一り二階に止て床の上思案に暮れたる其處へ此  
家の女房お冬とて戰慄する程美醜き年増の醫者微醉の機嫌に連て入來り姿も最ど艶妓かき  
咄の中に倒のお安は上喜撰を表花に拵へ甘露梅へわさびを振掛た落橋の菓子鉢を持來り(安)  
庄さんお茶をお飲ませいませと云つゝ又お冬に向ひ(安)お細君さんモウお床を敷きました(冬)  
ヲヤ左様かへ失ちやア私はモウ罪よふやあ安さん其方は氣の毒だが此所へ寐て庄さんお介抱

して進てお奥なト云ばお安も惡縁に纏がる前世の宿業なりけん否には有ぬ稻舟の梶とるお冬  
が媒介に嬌し想なる笑ひ顔に紅葉の照も美麗く庄左衛門と聞ぬ振見ぬ振すれど胸ドキ、酒  
色の二ツ一ツ夜着寐よとの鐘に氣を利せお冬が座をたち行跡には於安 赤面 對面お安は床  
の側へ寄り(安)庄さんモウお寝のかへナツト揉で進ませうと夜着の積より手を差入れ臆  
に斯は庄左衛門其手を離かり引寄て(庄)コレお安様其方達は狐ぢやアねへか過分辯しくつて  
氣味の悪い様だ(安)如何で御座ます(庄)エ如何と云て其方の様を能娘に側へ斯して來ると  
言は如何も不測だ(安)お否で御座ませうが(庄)ナニ、勿休ねへ否の何のと言譯はねへが全  
体其方はどう云身分だ(安)實に馴々しい仕方だとお思召ませうが此方のお宅は貴君のお友  
達何にも御氣の置る様な譯では御座せんヨ私はこのお宅へ唄女の目見に來て居ますので御  
座ます爺様が不都合で母様は煩つて許り居ますから何かに附て不自由勝寧そお酌にでも出た  
ら宜らうと他も勘まいた故親達の爲にもと存て是へ來て居ますので御座ますヨ(庄)噫、左様  
愼然に夫では茲の家から金でも借て有のか(安)ハイナニ左様だけれど誠に寵愛被下升はト咄  
の中に浸々と寒氣ハ肌を刺如くお安は思はず身を振はし(安)ヲと寒く成て來と手あぶり火鉢  
を引寄る(庄)實に身に浸る程寒成て來る様だ風でも煩るとお冬殿の前へ脅濟ねへからサア  
く此方へと手を取とお安は洒落た氣にも似ずまだ肌知ぬ男の側仕一想起に振身と恍惚子に見  
へて欲敷く庄左衛門は心も浮れ終に金鏡の誓詞を忘て茲に情欲を遂たるより彼三百兩の金は  
あり身を修むる事安樂と不義の群にぞ陥りける同じ色香を翫遊と忠義を胸に情も厚く實と極  
九い  
未だ城下に在ける中に金右衛門は病死して遺訓を守る三十郎大星の士を怒み孤獨を懸む慈仁



を感じ彌々極る忠と孝とさて鎌倉へ先達て衆より早く下りつゝ、敵高野の屋敷の案内精知る可  
其爲に屋敷の前に住居を設太物荒物乾物など諸色を大略購へて世に調法なる萬見世主人三春  
屋兵衛と號姿の商人は本名杉谷半之丞手代は全馬三郎兵衛岡野三十郎矢藤右衛門七何も總  
義の雁々の名を改へ形を改めて武家とは見へぬ立形容別て岡野は若年四十余人の中にては第  
一番の美男也へ道が厭しき敵方の多き人目を忍びつゝ、何時の間か語らひ寄けむ高野の家老堀  
井理右衛門の小兒の守女お静といふは十六歳の處女をすかゝ馴染へて籍かじ情をそ運ける此  
又守女も年行ぬ殿の女に似りやらで美目も心も伶俐真に岡野も喜びて氣長く信切を離ける  
もへ今は深くも思ひ互情とは言と玉阪に遇も逢目の關越もて今日潜來る約束は神子山町の叔  
父の家豫て叔父にもお一づが許より明して置し事なれば遠慮も有て門目から(お一づ)伯父様  
また三様は來ませんか(叔父)ヲ、お一づサアア此方先刻一寸と來なすつたが手前が來ね  
へものだから亦用を辨てかち後に來ませうと言て出で往たそしてお飯の下物調てあるサア  
く奥へ往てお晝でもたべて來なされるのを待て居やおらア今出入場から呼に來た也へ一寸と  
往て來る程に留守してくれと氣輕者お一づを置いて出て行く

第四回

神子山町なるお静が伯父は大工平兵衛と言者にて近年株を弟子に譲り跡は隱居の我儘仕事遊  
び仕事も人の知る古き番匠給圖方にて聞取割方上手の棟梁出入場より飯り來て何か入用有と  
見へ多くの繪圖を取出し彼は見合す其所へ二階より下り來る三十郎は半兵衛に向ひ(三三)  
ヤレ、く、ク、イ得圖と録入ましたか静は最早何時の間にか(平)オ、今先刻回り乍ら貴下は熟眼  
てじや故跡で起して呉と申て俄々驛早と出行ました何卒彼様を分別無始終愛想が否ませうが

城丈氣長に面割を見て遣て被下度と頼むも親の亡子とて黙然に思ふ伯父の慈悲世二十郎は氣安  
めに承知し乍ら番圖を見(三三)ハ、アお屋敷の半分ございます子(平)吾様サ武家方のは町の  
を遊つて種々お注文の異敷の御有ますで、いふうち見留る一枚の繪圖を手に取る三十郎(三三)  
コリヤ是高野師直の(平)今の屋敷が出來る節中間の頼みで引た下給サ(三三)扱は天より授る賜  
物(平)エ何が(三三)アハ、これは芝居の演劇の真似さき云紛せて思案を成し(三三)モシ伯父さ  
んこの繪圖二三枚私に下與給か(平)随分進上から何圖も持をさし併し此繪圖は残して置被  
下せへ是は他に出しては濟ね(番圖)面實は焼給た表向で他に見せては不許のサ(三三)エイ是か  
子是ア正が私共の向屋敷の高野さまの(平)されは何も憚は無いけれど盤谷家の浪人衆が御主  
の仇と付狙ひ仇討にでも來手といふ用心で屋敷の案内を世間へ知らせ無と厭し口留めして有  
故(三三)へエイヤ併し其様を事も御座升まい面とてこの名前を切取たら何處の番圖たか知  
れり致ますまい(平)如命ね高野師直といふ所を切取ア云分は無(三三)ハテ相違なく切去升(平)  
其お心むらお静の縁や頼の陸に貴下に贈る俣引出(三三)エイ(平)ハテサ左様仰天り爲事ハ無盤  
谷の忠義な浪人衆へでも賣たら金に成想か(三三)ハテ變た伯父様の(平)アハ、商人を聲に  
たら職人氣が去て百も錢に爲心ツイ申處に云たのじや毎も氣に留る譯はない人の見ぬ間に  
持て行れ(三三)ハ有難し推戴く其顔能くも平兵衛は打込め(平)ヤレ、くハヤお若の御氣篤  
な併去静は夢にも不知(三三)何をお静が夢にも不知と(平)ハテマア今日日被降成ま(三三)左様  
ならは又近日ト乞暇して立歸る心の中に三十郎が半は悦び半は疑夫より彌々お一づに親睦契  
りしが頼て此圖を山科なる大星の許へ遣しければ其真之朋大に歡滿是より東へ下るを急ぎ夜  
討の時の手配りは此圖を携て爲とぞ斯て大星は東に下り諸方の手都合を下知しけるか或日岡



野三十郎に向ひたつての事を問  
 二十い 尋ね末は夫婦と約束を誓ひ  
 疑は君の爲深き罪とは云難と女  
 心に思結必所を其人切腹行か  
 討死か二ツ一ツ命を定め夫共  
 不知其期に期は喚か周章する  
 成人人の眞を金盡で可成就事  
 は繁其決心て女子の身の落著ト  
 二十兩の金を渡しければ岡野も  
 大に悦びて是を静に遣はし夜討  
 の以前に左様と無高野の屋敷の  
 観を取て伯父平兵衛の許へ預け  
 置けるが間も無夜討の陣判高三  
 十郎の事をさへ聞て驚くお一ツ  
 が心伯父平兵衛は縁より悟て居  
 ても斯様とは明で姪の心の内不  
 便細増取財をかかせしと爲共  
 聞お一ツ胸苦悲しきは世間の  
 人の動物に成る男と深き中永立程に想焦しも遂に不達成行を如何と接し居苦の世界とは云々



と世に十ヲを六ツ七ツ越て無果娘氣にも疑がる壘谷の難討か身の悲痛と成ぞとは不知契り  
 昨日今日猶懸一さを増ける伯父平兵衛はお一ツに向(平)コレお一ツ手前マア毎日くそんな  
 顔計して居るが世の中の事と云者は何も夜約束事だと思道中々三十郎様が義實の深い人成ば  
 故其身は覺悟の敵討跡は野山當坐の花と知らず顔して果ても如何も詮方か無等々莫大の金  
 を態届れ始終阿子が安堵の手當此程迄にして被下りやア怒みも泣も出来無譯だぜ(一ツ)サア  
 其様に跡々迄思召しての御信切時に世間の人様を知るも不知も賞譽すお方を何で不忘萬一不  
 遵様に果成生ておませぬ私が覺悟と涙を眼へ散々鼻紙で顔を拭作(しつ)伯父様何卒其時は先  
 達不孝の罪咎を堪忍してト咽入涙の乾向はせかりける

第五回

抑大星の君子の智能衆人を精育成其人々の氣風に因りて此を教訓中にも大慈文吾と聞え  
 は忠直云方無程と生れ賢の危忽者心氣峻き生立成しが由良之助は文吾を勸めて心氣を修る  
 とを可見習付ては俳諧を學ばれよとて教ける去ば文吾は其日より師を求て學んと思けれ共道  
 吾は初心の恥しく人には問で己が宅に熟々接し居たりしが折算庭に鶯の初音想垂啼ける故  
 茲ぞ風流と申の發明可成と首を傾け漸々其心をぞ連ける  
 斯認竊に大星に見せければ由良之助は是を見て大に歎び文字の敷き(桐)ね始て思ひ起  
 いさし者か是風流を案じ得て何ぞ集言を作らん惜ひ哉手爾葉繼不満足のみ今少心を用ひ候へど  
 陳述ゆゑ大慈文吾は雀躍げに歡滿回るを聞傳へて嘲笑不爲人無おと愚なる人なりとて笑ひの  
 種と成けるが又二十日程過後後初音きく耳は別なる武士かな一また十四五日過して彼武士の



「さきいて立にけり」と三度に至て自然此秀逸を得りしかば大星は手を打て歡び嗚呼可感此名時賢に文武の兩道を兼たる者とは此人成と賞たりけるが果して後には俳諧者流の達人と成四其頃の寶井音子など、肩を並べ湖月堂子葉と雅名一照谷家斷絶の後は専ら風流を遊び一代の雅吟も不少愛に其一二を擧て雅なる文走を兒女に示すこは水間沾徳と云俳諧の宗匠へ臨討の節に送りし手翰なり

其後は彼是御無音背本意候何れも様御堅勝に彼成御座候哉年來御懇意に罷仕候故一通り相傳へ申候扱者拙事所存の筋難默止今晩存立申候趣御座候御厚情彼是以生々世々に及候事に御座候  
山を裂ちからも折てまつのもき  
猶々春帆竹平も同じ道にて候精泉は御存じの如くにて候御恩借の蒲團申受候て其儘打捨置申候一句御引導奉願候  
十二月十五日  
沾徳先師元  
子  
案

右は警討の節に臨んで認めたるものと見ゆ實に風流洒落大丈夫の士と云べし又忠義の功ほ一にて最々難有事になんされど身を落し姿を賤しうて敵の様子を窺ひ實に貧困の姿容一は沾徳に蒲團を借て覆ける一條にては可知のみ又警討の前々日十三日の朝の事なり一文吾は所用有て本所へ行けるが途中にて煤拂ひの竹を賣男に往還て心の中に師直の屋敷を窺ふ手段とは

是屈竟と思ひつ、先吾竹を買取て姿を替る際物師竹屋くと呼ながら頼て文吾は師直の屋敷の前を賣歩折しも家中の窓の内より呼入られて文吾は歡び他の竹賣には不及にまねもたらざる大賣無錢如乘に商なへば些少の事も欲の世や格外安き直に惚て抱訝疑念も非れば思ひの儘に足場を置り漸て屋敷を出たりけるが婦多川方へ赴く所に向ふよりして大驚が姿を見付て呼止る人ば則ち寶井其角(其)イヤア似たと思たら湖月堂が師走の文字に違ぬ姿アハ、其でも俳諧の神仙とい(文)イヤイヤ面目無此仕業風雅も出ぬ今日の辛苦(其)何さよ定めぬ浮世の盛衰寒さ凌に傾一盃一處に來給と打廻て其角が形と大驚と不合雅俗寶井に優る子葉の文武兩道時に忠義の



此は師直の屋敷に賣歩する文吾の姿を窺ふ寶井其角の事なり



心より異客と不知寶齋その貧困を憐れ思へども世捨人に等しき其角は陰方なく居酒屋にぞ入りける因にいふ或諸侯の御秘藏に反古の一軸と言物有て晋子其角が名譽とす其を如何と尋ぬるに月と萩とを畫さし表具なり其書上に蕉翁を招かれて句を需給ふ翁この書上に「白露をこぼさぬ萩のうねりかな」と詠せしが其後其角之を看て忽ち筆を取白露をと言首の五文字に墨を引其傍を「月かげを」と書添ゆへ人々狂人なりとして其儘に怒されけるが重て蕉翁の参り時此事を語られしに蕉翁是を見て晋子を心に賞て申様弟子には候へ共拙翁の造事のみ候と言つゝまた筆をとり「月かげを」其の初五文字は晋子其角が名吟なりと書たり翁は露を踏と讀其角は露に月の光りの移と云心にて月陰をとほ直せしなりとぞ

第六回

節に晋子は湖月堂と酒を把りて興しけるが如何も世の盛衰を觀念し文吾が涙々の姿を悲れに思ければ腰の墨耐の筆とりて「年の潮や水の流れも人の身も」と吟して子葉に興ければ子葉も又筆を借て一句を附たり「あいたまたる、其たから松」其角は是を見るよりも甚だ不興の体にて其處より遂に立別れしが其翌夜の復仇五日の朝御菩提所へ引往義士の後より追走大驚文吾に走り付一昨日の句の心は今日の事にて在けるの負借を思辨め不風流と人に賤別れし事の恥しければ後悔しつゝ、圓岳寺まで送りとぞ猶この風流に劣ぬ雅にて忠義の人有ども二の目を謀て隠忍を盡死して其名を盛さる者あり此人俳號をかしく坊と稱へ文祿十四年の頃江戸に出たる俳號の師にて其角が友成しが十四年十二月十六日其角の許へ一紙を贈て影を隠し東海道在々に乞食して送りを法靈院の裏門に示せしがこれ四十余人の其一人鳴野十次兵衛が舍弟にて小山進藤與野等の連判を返て影を隠方に一ツ大星が仇を打ち事あらば二度の討手を心懸

二十余人の列にて有ける去は光りを藏し義を存す二君に仕へぬ忠臣を陰に知つて法靈院の方丈が藏光院存義居士とは號られしとぞ又余曾川勘平宗則と云は鹽谷家没落の後毛利美作守の藩手余曾川佐衛門方に同居してありけるか伯母なる者勘平をいとよみ不便を加へ給るに勘平は仕官の手便有とて毎日く外行或日大雪の降にも不屈出行とせしが伯母は種々に引留め果は腹さへ立たる程に遊の勘平持餘し當惑なりたるその處へ出入の町人堺屋喜兵衛と云者入來り様子を聞て中に入勘平が涙人の心配ひ察しは金百疋を合力して酒にても呑み今日は他へもく事を休まれよと諫言別れしが是十二月十二日の事にして勘平は猶伯母を詐語喜兵衛が奥へ金にて玉子酒を調へ傾杯て出行しが夫より十五日まで音信なく十五日の朝鹽谷浪人藤耐の噂はらにて毛里家の門前を引揚て行義士の行列眺も凍りく其中に勘平は兜頭巾を腰に帯白被折合で鉢さきし手負し容も勇ましく鎧を被にて歩行けり毛里家の人々走出これを見物爲ければ勘平は會釋して引行を見送る伯父は涙の歡ひ折から堺屋喜兵衛も來り余曾川の門口より喜新造様勘平様も高野のお屋敷へ歸討の御連中今御門前引て御座勇々誠に見物で御座ます(伯母)ヲ、喜兵衛殿が賞て被下若年此方の甥忠義の體健氣事を致候はひの云も涙の眼よりとて心付たる悲れ物に勘平が残りた錢と手紙が有と取出て喜兵衛に渡せば乍開封見るに御厚情の鳥目酒と卵子の代料に請候残り御精取可被下候打割てそれといわれ玉子酒厚き恩みの恩にこたへんと落首をこそはしるせしとぞ

第七回

爰に鹽谷の御後室美顔御前と聞えしは判官切腹められし後安保山なる御屋敷に隠居被爲有て兼仙院と法名付て後室の範谷切腹も自然なる愁の窓に閉籠りてのみ在せしが久し振にて國



家老の大星由良之助参上と申上れば後室は雀籠敷善御顔色急ぎ其坐へ召せられ御盃を賜りて(後)ノウ由良之助御國を退去の其後は山科とやらに隠居爲と聞及が今度鎌倉へ下つたは何事所存が有てか(由)ハ、亡君御繁昌の御代には何ごとも遠慮の身の上鎌倉見物も自由に不能浪々の身と相成り果も亡君の御恩に仍て何不足も無御座は山科の樂隠居部の地は不殘遊び盡しまりて又此度御當地の名所も大略見物を仕果ました(由)今晩用事の埒明まりて明日は是非出立の心得なれば最早暫らくの御名殘氣機嫌宜ふ御繁昌をト町撃に言上終は後室は思案の外相違成たるが大星が所存に慮外て興覽願は亡君の御恨みを報じ師直を打取思接も無不忠なもの立腹た、しく思召たる御涙忍へ兼てや札に置り文紙探て由良之助に打付給へば推戴右手に交たる手練の風情(由)お心に懸られ優たる馬の鼻向急度頂戴致まりて冥土の君人に御言傳(後)エ、何とエ(由)アイヤ亡君同前の御賜難有存候時刻を早き候得者は眼御暇を恐御機嫌よろしく(後)ヲ、最下らる、か随分無事でト言葉下げなれば後室は奥の間差て入たまふ跡には大星餘々と立て此方へ下りつ、松島といふ女中に托し旅中の日記と言爲して一個の書状を預け置き稍々として歸る時に其夜も浸々とお夜詰引番様々に早事済て長廊下鉄行燈の光りさへ薄くなりゆく折しもあれ彼松島は只一人部屋の内にて物接じ女乍らもお主の無念なる中立頼とせし由良之助が來し故後室様の御立腹夫共知らでや旅の記をお慰みたと遊長らしく置て行れた大星殿今と成ては最外に殿様の修羅の御無念後室様の御無念師直殿を打事か不叶事か口惜しいと忠義の魂氣も勞れ彼道の記を傍におきて戀々轉寐の途を伺ふあやの曲者餘々と部屋を明て靜に忍足居寝むる局松島の前に在ける封じの状を目かけて寄を松島は見えて見ぬ容の空宿居り竊に見れば部屋方へ此夏ごろより勤る女阿房の様に贈せし十七

八の娘なればこは仇の願者其所願など立懸り聲を揚れば部屋の人々馳せて入來り謝て縛て籠口へ知らせに驚き役人方押へて一之間に押込ける其間に局は封状を開て讀掛傳仰天(松)ハ、然即今宵忠義の人々高野の屋敷へ打ち入とか夫共知らず余所々敷暇乞ひさへ鹿略な仕方向は共有御前へト衣類を改め立出る折柄告る鶴の聲松島は後室へお目懸申上まする中に東は紫の雲ささ消て晴日の雪の景色も善お庭連の椽側を御殿へ急々其所へ表役人聞續直に御庭の切戸より爰に馳來る御注進は彼の大星の下知を受仇の場所より其姿に喜ひ勇て早使局は之を迄度見て(松)貴下は誰か寺岡殿(平)ハ、お局様で御座ますが大星氏も此早打(松)レテ、首尾能高野の館へ(平)さん候、用心嚴重高野師直中々容島打入事の叶所を千辛万苦(松)ヲ、勇、其注進一とも早御前様へと見願所へ後室は早くも之を開給ひて立出給を見るよりも局は庭を見やりつと(松)ノウ平右衛門殿今の様子を懸一に(平)ハ、奉、畏、御座ます切同盟四十九人裏表より二手に別れ各自仰る所存も無御門を破り押入て用意崩し御殿を攻て高名功蹟期量す深くも潜し少將の御首取て精烈の忠臣只今花水橋の東廣小路に屯を張り休足致候と云も息あひ苦しく暫時此處に息懸さも健勝にぞ思はれける

第八回

殿も寺岡平右衛門は夜討の次第細々と言上すれば後室より介抱仰せ付られて暫し休足なすける所へ早刻限も辰の時表方より坂次て此も庭の切戸より爰へ入來る忠義の侍寺西彌太夫矢藤長助皆々も血汐の薄手疵働き見へて潔よ一兩人は遙に後室を拜して庭に平伏なす其跡より九て足輕六人仲間小者十余人一 小櫃 三荷 右は錠前を下して漏圍を掛たり 一 帳面入札を張り一箱一荷 一文箱 一ツ 一 金九千兩 御様側に荷ひ入れ寺西矢藤にわたし



霞みなく、出でさりにけり  
 撰者曰斯の如く至は夜討か手配り前後の手當容易四十余人のおと、は不思議次第に詰り打  
 入の風情を讀て察し給へ  
 仰々只今後室の許へ送り一品々は被大星が去年以來城明渡一の時よりは万事の入用義士への  
 手當夜討の裝束後々の取纏運謀ひし金子を差引九千兩其勘定に厘毛も違はぬ事明細書そへて  
 御前へ送りなり夫より寺岡寺西矢藤の三人足を洗はせ衣類を與へ改めて與へ召れける  
 撰者云寺西彌太夫は元大星の家來成が後直參に取立られ組足輕の小頭を勤めし者にて今度  
 又大星の推舉に依り三百石にて當家土佐守の御元に止められしが二年目に至り暇を乞ひ上  
 京して山科に至り大星の石碑を建て勲德に勸吊ひ其翌日保榮元年三月行年六十三才大星の  
 石碑の前にて美事に腹を切て終りしとぞ嗚呼大星が一人の忠萬人を勵す寺西が忠死始終全  
 一人を云べし  
 夫は去置後室は三人の義士を御前に召御料理を賜れて念頃にも首棄あり斯て寺西は但馬國置  
 岡に急の用有逆お暇願ひ走せ去れば又長助は由良之助が今朝別に罷れし書狀を岡の取次にて  
 後室の御前に指出すを取る手廻しと封じを切せ松島是を讀覽くる

御津れりの御御役にも相なり候はんと御なじみの矢藤長助  
 四十余人の  
 名代にさし上置候かぬてござんじのまふり幼年より御奥に被召し  
 ものまは過越わたのか物附り申しあげませ候はるるなごさみにせ

御御のもの御をも申上候はんに忠死のもの、うへをもおはし  
 出し被下候事と若者をさし上候ははく右衛門七と改名甲付候へ  
 はよろしく御こんぬい願上候

松島どの

大 星

後室は此を明召れ心細さの將來迄頼に爲と長助を四十余人の人々の遺物に殘す志ざし何嘗ん  
 ものも無只鬱々と泣たまへば御前に在揃女中達泣じとすれや眼涙雪は晴ても猶濡袖や袂の露  
 平哀れ催す御座敷へ又お表より技内につれて由良之助が再度の注進片岡新六年若儀に十二才  
 四十九人の外なれど勇士の子とて逞しく營の首級御檢使を少しも早く願ふと申上れば後室は  
 其の使者を松島の局へ仰せ付られて常にはあらず急たもふ心は同一局の喜び直に極込御物  
 の看板さへも花立花巻の檢使圓覺寺へ早打同前一走に西の山より南の海邊を指て急ぎ行  
 緒此編續は曉て本の終に至り明細誌都て忠臣藏の始より順に綴らず後前にしるしいたすは  
 例の狂訓亭が筆癖にて看官を早佳境に誘ん爲なり其意にて讀給はねば紛らは散葉下も有可  
 1

第九回

二願以至功德島も得とらず荒廢の餌飼く日に日が暮てとつけ申てより大地とは成に御堂の繁  
 昌は尊き君のお恵み千代も不動尊体へ貴賤の参詣絶間なく往來を當に開店たる酒食の家が多  
 一十中に稻毛屋と家號せし見世は取分け賑はひしが饗食時刻のことなれば参詣人や旅人の此家



に饗て食事を調へ休足なして在り入来る人に出る客種々様々真中に七才計の白髪しらかみの老父十七歳計の美うつくき娘と共に食事をしながら共に悲あはれな身の果はを噛かき合あて潜ひそくと酸鼻あざなたる共折まり表うらの方より土足つちあと入来る者は何者なにもの運はりげなる二人連一人は商人今一人は奉公人の口入とも言ふ可き出立で立た懸かげな男老父と娘が側わきへ來きて○ヲイ左衛門さん能所よこで出合いやうたト云ば老人はぎよつとせし風情ふうじやう娘も此れはと當惑あやま顔かほ來きり一男は得たり顔かほに白眼はくげん付け○コレサ祖父おじい様さまイヤ其方そのかたも見掛みかけに不似ふにへ大膽だいだん人ひとだノキ、コレサ惣もねへで能聞よ者もの日ひ其方そのかたの心持こころもちとは魚子うなぎこの借かりた金かねは知らねへ娘は我が孫まごがから勝手勝手に連つれて立退たふと云たらふが左様さやうは不為ふへせ○イヤ榮次えいじとマア靜しづにして娘さへ連つれ歸かへれば勘定かんじやうは如何いか様やうなると口敷くちを利きずとも五兩ごらうの形かたちに此娘このむすめを○榮えい●左様さやうサ氣きを能よして居ゐては婿むこは明あねへ何なにでも何も此娘このむすめを預あづかるサアくく立たたり詮方せんかたが無な位ばいでも笑わらつても用捨もちは不致ふヲイ強情けつじやう等らだアト云つ、お住すまの手を取とりて行いくと争あふ其機そのはしみ榮えい次じは已いが力ちからに頼たのみ對立たいりつ一重隔いちじやうたる隣席りんせきの客きやくの膳ぜんを蹴お飛とり踏ふ直ちさんと在あるく足の急所いそを取とりて扱あ出で去さ刀やいばを持もつて立た揚あがるは歳齡さいにん廿四五歳にじゅうごさいにて色極いろ白しろく鼻筋はな通とり眼まなこは清涼せいりやうに唇くちびるは紅べにを染ぞる如ごとくなる威い有あり猛もうく徐じゆ々じやうじやうなる出立で立た派はの侍さむらいなり○侍さむらいイヤ此處このところ外ほか者ものめが何程いかに貴賤きけんの差別さべつ無な茶屋ちや小家せうかの儀ぎにも致いたせ食事しょくじの中なかへ足踏あしふ込こめは言語げんごを絶たする不届ふと奴やつと言いは二人は顔色かほいろ變かり侍さむらいの前まへに手てを下くだげて初はじめの勢いきほひ何所なんどころへやら侍さむらいの盤ばんの意い々いと種々しゆしゆ詫入ちやいは侍さむらいも漸しだ々じだじだ面おもてを和やわらけて○侍さむらい然しからば申まを聞きる近頃きんきやう差圖さしづがままい事ことだか只今ただいま承うる老人らうじんと娘むすめの難關なんかん其方そのかた共とも勘辨かんべん致いたし併ひ少すくの金子かねこは我等われらが老人らうじんに成代なりかたて其方そのかた違ちがへ返かへして遣まり金かね高たか高たかは負入まかり能よく非ひとも娘むすめを連行れんぎやうと強情けつじやうは此方このかたも不致ふ其方そのかた等らか慮外りょがいサア前まへ人ひとども何なにと爲なすを月つきを受うるか金子かねこを請まるか何なにれに任まかせ身みに入いり金勝手かねかたの力ちからを返事かへし致いたす言いつ、附布つけふを取とり出でして小判せうぱん一枚まい紙し紙しに數かず侍さむらい此金子このかねこが老人らうじんへ皆濟みなの証文ていぶんを渡わたし相濟あひかたす

かど極ごく付つられて無道むどう金貨かねわ手代てだいと請人まが榮次えいじ内心こころ氣味きみ悪わるく動退どうたいり以前いぜんの勢いきほひ引替ひきかて金を請取まが後日ごじつ迄いた異論いごん無な之証文しやうぶんを渡わたし狐藏こくざう逃回にがへる後ごには此所このところに休やすみたる衆人しゆじん武家ぶけの行所ゆきところと仁心にんしん厚あきを感あじ合あ時とき高たか々じ歸かへり行ゆ其時そのとき例れいの侍さむらいは老人らうじんに打向うちむかひ○侍さむらいイヤモシと老人らうじん嘸な御ご心配しんぱいで御座ごつたらうが私わたくしの寸志すんしが居ゐきままりて少すくしは御安堵ごあんた被お成なれふ若わかい女中にやうちゆうを連つられては猶なほ此上このかたに御用心ごしんしん急いそいで此所このところを立たたなされ○老人らうじん寔まことに不思議ふしぎの事ことで御厚恩ごこうおんに預あづかるコトお住すまい、お禮れいを申まをさぬか○すみアオ眞まことにモウ難有なんあり存ぞんます○侍さむらいイヤニ無禮むれいだとは存ぞんじたが指首さしゆびつての御難義ごなんぎを見請まが申まをして致いたした事ことイヤ私わたくしは是こゝから遠方とんぱうへ參まゐる者もの御縁ごゑんも在あらば又重またあてト言いを聞きより娘むすめは熱々あつあつ男振おとこから心こゝろたてて飽あき風情ふうじやうは有あり途中ちゆうちゆうで始めて逢あはれる他人たにんに三兩さんらうと言い大金おほかねを出でして救すくふて借氣かも無な直ちに別わかれて去さんと爲なる氣性きせうの大おほび成なる女心によこゝろに慕こは敬言けいげん寄度きども端近はなぢかなる茶屋ちやにて何なにと詮方せんかたも無なれど祖父おじいに耳口みみぐちは實まことと心の付つたる櫻子おうし○老父らうふ「ア若わか々じ日ひ那な者ものマア少すくしお待まち被お成なて被お下くだまし實まことは私共わたくしどもは只今ただいまの者もの共に責せ立たられて詮方せんかた無な在あらへ引込ひきこめとも存ぞんじましたが貴君あなたのお影かげで此難このなんを預あづかしましては急に田舎いんかへ參まゐるにも不ふ及あが貴君あなたは此こゝから何所なんどころへお出被いで成なますか○侍さむらい然しかば私わたくしは内用うちよう有ありて本庄ほんぢやうと申まをし申まをして參まゐるのぢやが夫おとこを聞きれて何なにに被お成なるか○老人らうじんイヤサ恩返おんかへトの致方いたと娘むすめと相談さうだん致いたすも此處このところはならぬ貴君あなたの御急ごいそぎ○すみ離度りど無な生なれた土地ちのち可成かたなら元もとの所ところへ○侍さむらい如ごとく陳夫ちんぷが宜想いしやう元世げんせい話わだか左様さやう被お成なる鬼角おにかく侍さむらい馴なれた所ところが能よくさるテ○老父らうふ浮うたる様やうで御座ごますか最も一度いちど彌陀やだ川がわへ戻かへりませう○すみ然しかばは貴君あなたと御同道ごどうだいにト雀躍さくあつしたる娘氣むすめの浮薄うはくにあらで縁えん糸いと結むすぶの神かみの業わざなるか打連うちづてこり立出たける

三十二い 第十回

抑々おさ不動尊ふどうそんの門前かどまへなる茶漬ちやく見世みよにて老人らうじんと娘むすめを哀あはれみ侍さむらいと何人なんにんなるぞと尋たずねるに此こゝも忠義ちゆうぎの



一人にして大星の内意を承未城内を明退て日も非ぬその日敵に東の義士に内應の大事を告て  
 其後に此方に止る約束にて下りつ、根黒の在の平間村より今日ハ鐵部彌兵衛の方へ行安蘇貝  
 十郎左衛門と言人も斯る人も不知してお住は切に暮しく想て宿世の縁や深かりけん安蘇貝  
 も不憎思ふ心の強しが頼て打解合所合彌陀川町へ歸り比は早大陽は西に入る夕暮にこそ至  
 につれ扱安蘇貝も夜に入ては鐵部氏を尋る事も如何なりと止らる、儘お住の家に終に其夜は  
 其家より貸夜具借て休みしが曉方より大雨の車軸を流す如様は門口へ出る事もならず今少小  
 降に至までと祖父と孫女とが舉動に心とも無一日を此裏家に暮す内情家内の体を見れば貧困  
 可云味も無今日は口腹を養ふ其明日は如何と思ひ遣る悲れさに十郎は又金子二両を取出して  
 娘お住に此を與へ且この身許を尋ぬるに元是藥合の藩士にて今も十平程以前鎌倉説法洲の上  
 屋敷に勤めを成一人故國勝手十郎左衛門は十四五才の節なれば一向に佐右衛門の顔杯は不  
 知只其名字を覺へ居て其因縁を感じつ、終日過越方の物語を教て在けるか此句は五月雨の頃  
 とは云乍今朝より大雨瀧々強降來て中々戸の外へ顔も出されぬ程成ハ是非無其日も暮たり  
 一が又一事の難儀お住の身に出來たり夫を何そと云は其夜に入て祖父の佐右衛門即中風とか  
 云病ひ發り忽ちに臨終けり茲に於て安蘇貝十郎左衛門はお住が歎を云頼み薄き老人の死去を  
 見棄難く葬式万事身に引受け殘る方なく計つ第五日目の事なりけん明朝は本庄へ赴く山を告  
 ればお住は其夜初夜過て世間も常に物語に裏家と云と明地の多く草生る窓の元に二ツ三ツ四  
 ヲ飛ぶ螢亡魂お其思ひ遣り世に無南朝昨日今日別て祖父の墓想又その身をも熱々扶く煩此末  
 は誰に頼て世を果ん何と成てか日を遇と胸を痛め難つ、心に思ふ人は信身も不及實情の世話  
 を致は只下聊も體を不失若向にて三夜が経同一鼓に乍伏只一言の願も云ぬ男の行儀に

恥出言儀も非て今夜不眠は明朝は早別れて再度逢事も不能お方を近所ては歎きの中の悦ぞぢ  
 やの羨しいの似合たる夫體中のと輝いいとを云れて戀しい一面悔の道理を不知人は縁が出  
 來ても此私が拙むひ故に嫌れて出て往れたと云たら世間へ何と言脚が假令雖有も深敷と思ひ  
 染たる此お方に所詮思不徹事ならば寧ろ死なせしめて有と練返したる心の難き思ひ請てぞ其儘  
 に蕭々立し泣顔を水にて洗ふ下木上口を濯て元の座へ來るより早安蘇貝の脇取て我を我咽  
 を突んと爲手を捕(十)ア、非常事を何と爲のだ(すみ)放して殺して秋下まゝとふも生ては居  
 られませんト云中刀物を取納め(十)氣が遠たがお住さん何程年の若娘心じやと云て餘りな  
 仕方夫とも私の計ひが行届ぬ故面醫に夫て死ぬと云のか(すみ)アレ勿体ないどふして其儘  
 な事を存じます者か私が死ふと存じ詰たのはお前様か明朝は最う家には居なひと被仰かお別  
 れ申お悲しひ故(十)イヤアそりやア無爲な了願だ元來兄弟か夫婦じやア無約一風と爲事から  
 此様に心易く爲さへ世間へ對して濟ぬ仕義ト云顔お住は情と見れば思へば憑母しく抱付く程  
 體々と思とも流石吐しく眼には左様と知らせても言失時纏れ髪亂れ一對をかき上る櫛さへ憂  
 を根兼組の背と喰違ふ心の頼ひ難絶又耻かき惚恍氣の男の方へ脊中を向け髪より白き襟  
 元を見せて俯伏愛らしさ居住座崩す膝の上に置手を逆に乍組向ふ一曲す細き指爬紅染しに非  
 ども其色艶なる生質は燈火の影にも透通肌の花にも増るべし  
 春情の乙女好男の慈仁此末何様成説をお出儀を重し節を貞すの弱談次の巻を開て知るへし

(すみ)十様お前様今日も本庄へお出被成のか(十)左様サ毎日遊んで居ても世間へ有故何そ  
 商賈でも仕へちやア末が不治ぬへ然私か頼死でもして見ねへを其日から御前苦敷はナ夫や



六十二

ア日子が立ば又亭主も出来るから如何其當座直にまことつくり掃子か不善用心をして置て過ぬ  
 一と怒然至(住)ヲヤかせ共其氣懸事を云被成んたエ其上私に今の身か彌左様だと猶心細ふ  
 御在升ハ子ト少眼を濡せて泣聲の様になる(十)ヲヤ妙な事を云ノウ今身か彌左様とは何  
 のとだと聞れて顔を赤らぬて耻か一想に向快(十)かせ發し悪の語が有るかエコレサ隠さず  
 云きよ(すみ)ナアエハ未何たか知れやア不致(十)何だか不知とは何の事だ(すみ)アノウ先  
 月より未細水を見から(十)エ妊身に成たのかサア大變だノウト差當りたる事の當座大義  
 を抱へ一身の上なれば千々に思を惱す共不知は住は難堪又悲し余るもの思ひ實しき此身の  
 難堪を救ふて呉し情は難有不用事を未始終女房にもつて暮さんとは思はぬ中へ妊身に成すと  
 聞て當座教故に口籠言やらんと思ひ過して涙の顔を眼に押付け歎きに果しもなかり(す  
 み)十さんお前様私が身妊になつたらうと申たのね嘸お否だ難堪も未確乎知れ内申から其様  
 に氣に不成と能はぬ余りお前様か子持に成て外聞か悪いとお思ひなれば最少ト月が重つてか  
 ち何様でもして仕舞から左様思つて下さいまゝと其時に至は私は死ても不厭ヨ左様故ア邪  
 門な事にも不掛に居て給なさるなねと云れて思はず十郎も堪兼てや散々を落る涙を袖に  
 隠し夫とは云はず外ながら卒と云時未練なく別る爲に種々と因果を告る苦さは忠義に痛心死  
 て迷ひの道に入乍溺れて約達じと鐵石心の勝氣なる柳十郎左衛門は今年二十四才なり彼小  
 山田の乱れたる風情に例へて戀情を捨々の時を感すべし又其心は男子にも儼ち住の才智難有  
 實家に生立乙女なれば命に及の節操は致兼る事可成を其白潔の果勇氣四十余人の義士に優る  
 斯で月日を過すけるに翌年の月可喜安産して且も男子成れば住は此れを喜びて夫の心も自  
 然血筋の愛に引されて末の松山浪越ぬ夫婦の中と終かと思ふ安堵に十郎も暫時其儘陸路く其

七十三

年の十月末まで何事も無て過せしが何故其期にも至ば我に未練の心も發りお住も當座なすに  
 一と極る然は其以前にうすくも別れておもひ切らせんと種々に工夫を凝しつゝ或時お住に打  
 問ひ意に在所へ歸ねばならぬ用事出来たれば暫の問別れて呉と云つゝ兼て時へ圓し金子の  
 外に大星か手當に渡し用意金を合せて凡三十兩別に當座の食料計一二月三月の分量を並へ  
 (十)サア此結渡して置から随分候か居ないでも一年位は暮して居られ様では無かと云ばお住は其  
 金を祝向も不致抱きたる小兒を頼に對覽し(すみ)ノウ職坊ヤコレ其様なに寐んぬして居ない  
 目を見して親父様に能く告暇を下さい是さ小兒や目を覺まヨト云乍寝むる小兒の顔の上に  
 泪の眼敷くく咽涙つゝ抱き歎けは母の聲聞付泣出す我子に乳房を含め(すみ)今更いふ  
 のも愚痴ながら筆を根黒のお茶漬屋でお前さんに違ない此悲みは有間敷に邪見にも致被下  
 なら思ひ切る、事も在ませうが白痴者と思召て朝夕何かを不柔和して足事や片言を云のを一  
 々聞られ取おのど嬉しいが重々て子送出来ては何ら放れ様と思お前を引留る綱縁やらにも成  
 ふかと氣を丈夫にしておれたものをお前様にお別申して何して生てゐられ在うとて別るお氣  
 なれば私も小兒も主の手て殺して置てお出被下ト云も涙に聲振はせ幾度となく操返てお住  
 の歎きに安蘇貝は腸を斷苦さに齒を鳴ひゆる男泣親子の別れと辨へ無小兒も虫の知らせやら  
 乳房を放て母の顔じつと睨て泣出す聲も哀れを添増る涙の雨の時雨月いと深々に更流鐘も淋  
 しい物悲ひ一言しては咽返一言云ては幼子を泣じものも麻も寝囀子守唄山を越て里へと夫が  
 一と立と云縁歸疎しと侍居果は親子が川の字に並枕の泣とは後に思ひしられける

第十二回

人の心の種々有安蘇貝夫婦の如忠貞と功績ある古人今人類に無き末終を齋説後輯に至りて



く烈の感情を可憐同じ忠義の其中に杉谷半之丞と云人有十年余り瀧人して町家に住まひ居たりも醫主の恩を忘れむとて戦士の徒黨に入けるが如く忠義の人成に何故瀧人して有暉と細柳由を尋れば主君の徳仁を蒙りて不首尾に不有陰に我から影を匿せしにて其身元來瀧子なるに如何なる前世の宿業にや養母お艶と云る者夫半左衛門老人なるを嫌ひ養子半之丞の美男にして性質柔に心を轉て折々此を離しつ初成時の事なりしが半左衛門は餅倉へ主用にて下り母と半之丞のみ家に在り時冬の中旬にて寒さも例より増りしかはお艶は巨燧にありてて調り何やら物の本を操開て在るか斯云首尾は又あるまじと思ふに付て彌増る戀慕の情に堪兼てや半之丞を密に呼寄せ今は恥をも打忘れて思ひの丈を口説きつ、摘り付いたる姫鳥の温和風情は有乍心の曲り不機の色情半之丞は果然と興吐と思ひか義理ある母に面目を亡失せんも何如なり斯る心の有故にか最も氣難き養父の無理此身の迷惑爲節は毎度其座を取替ひ朝夕共に念比に世話を被下し思も氣を持直してお艶の側に離れ座して溜息吹(半)モ人根費頼はお氣が狂被成か申所を申升發其艶お姿を誰も剛に賞賈しに似合ぬ縁を結んで居る可憐だの惜しいの他人の目にも留る貴娘夫に年中私は側に居て明暮に柔和お世話に成在者何種々數存一被參勿休無が阿母様様を柔和美麗女房を持つて暮たら男を生れた甲斐も有と思に付て折節は非違を愚知も私乍口へ出されぬ其苦さ貴娘と母子て無たらばと胸に出る日も幾度か(是ん)エ、願ひ其様ならお前も此私を、頼付んと爲所を半之丞は飛退(半)サア何の因果か私養母も其氣が合と云と畜生道に墮落した宿業にても有ふか(是ん)イ、エお前が其氣なら畜生道へ乍生落て往ど苦が此身獨に來此サアトモ不厭私が心何卒叶てお呉なわエ一恥も禮義も却却ひ奇のを被編て(半)マア、お待被成ま一成程阿娘と私は心の合た事故に畜生道も

因果成と得心上互の念も思儘か義理有親御主人へ有れぬ恥を與へる道理爰の所を聞分て此世の契は思ひ切り未來と申は昔から俗言事て在升が其迄二人が忘れずば急度夫婦に可成哉其代りに私は此世て一生女房を不持に死で仕まひ升夫が貴娘への心中立左衛門思召て被下まいと申上願半之丞の心中を不便たとお察し被成て被下まいと言つ、お艶の惚々せし顔を涙の目に詠順て其座を外しけり

これより半之丞は養母お艶を別て敬ひ實意を盡していたはりしがお艶は我が情慾の迷難きより却て僻み心を起し終に半左衛門の歸國にいたりていろく讒言しければ半左衛門は以ての外に立服して養子半之丞の不孝を書面にし訴へんと計りけるを鹽谷殿には早くもその沙汰を傳へ聞て半之丞の難を憐れみひそかに半之丞へ御納戸金をたまはり御殿より亡命をさせて其災を除く被下けるこ、におひて半之丞も舊恩を忘難く此の列にくは、らんとは願ひいとぞ

第十三回

諸説を聞いて復讐の初發を探るに一休の筆の一軸照月の二字古歌の論より師直深く鹽谷を憤むと云又判官の奥方齋代御前の未だ鹽谷判官に縁付て給以前子息の嫁に爲んとて判官に媒約を頼れし所却て其身の内室と爲れし爲なりと言と早執も道理に不叶然らば何故諸候多き中にして鹽谷氏を師直も憎しは是其頃の風義男色の意恨より發ると云然も有し事が爰に鹽谷判官の寵愛深き小姓に比々谷右近と云古今無類の美男有て此を惡想不爲者ば無との噂也しが彼師直是に戀慕して判官へ貰ひ度由を言入しが鹽谷の家に山結の者にて他へ出難き家來也と答へられしは是非無其儘に過せし後此右近を執事の家に送りしが尤も止事を不得事にて判官



も物憂く思はれたれ共時の勢ひ難勝右近を他に遣したる然共師直は其身を粗略に斷り大家へ  
は容易遣はしたると言を恨み憎む心の裏りて終に恥辱を與へたりと言へり然ば其時判官が  
能く堪忍を守られなば家の滅亡には至まじと後世論ずる者あれば又歴々の武家の御身には只  
堪忍と計は思し召れぬ事も有可然ば近き頃道二と呼ぶ、心學者が或諸侯の召呼び給ひて心學  
を講じ彼成りが其節道二は鹽治氏の短慮を引て講じられれば其館の主君立上りて道二翁の  
面を扇子にて手強く打給ふ道二は其國人々の敵ふ心學者なり至は自然と心に威光も有様に思  
び居たる事なれば大名の主君の所爲と云其痛みと不法を少し心中に憤はる氣色有けり其節主  
君は正然と成給ひて君コリヤ道二其方は長袖同様の者ゆへ諸侯の側近く出るとおも免さる、  
は幸ひと申す者じや其賤しい身でさい此方が面を打ば心にいかり氣色を損我を無禮也と思ふ  
では無かコレ鹽谷判官は由緒正しき大名だに師直の惡言無禮共坐に動乗んと致たは尤の事  
は無かと御叱の上道二翁を其儘退去し卒實も貴人高位の尊嚴善惡を評せん事は後世暇き筆者  
の及可事には非じ然鹽谷判官へ師直の惡言失禮は他人の見聞にも堪忍難き旨趣に察せられ  
たる所爲と推量られたり既に判官の御懇意深き佐藤遠州君は彼騷動の以前十二日の夜に入判  
官の御許へ見舞として御出遊ばし判官御大功の御役に氣鬱も在る可其氣を慰め申度推参せり  
と談仰て御土産の品を爲持られければ判官にも信友の御實意を悦び給ひ遠州の君に御酒を進  
められ互に御睦じき中なりければ隔無談話慰興を催し給ひしが其折を以て遠州君は判官の  
御傍に人々を窺れ彼師直の無禮有し度毎の様子を察し在由言出られ思心と御異見に及ばれし  
が其一條と御次の間にて聞傳へたる神崎與五郎去は主君の御大事万一君の御心にこらへ難も  
思し召事にて有は君の手を下不給其以前に我師直を打棄て初死爲か腹を切るか至ねば君の家  
國に拘る難は可無かと然ば思へ其容易には斗ひ難く扣へしとぞ

第十四回

漢土晉の豫讓を以て我朝の大星氏と並び稱する者ありと豈同日同論ならんや彼は祿の爲に死  
し是は義の爲に命を棄る大星氏は棄置て四十余人の義士殿原の忠義も豫讓遙に上也且豫讓義  
黨の其中に立林唯七 聞へたる人の母親於園と云は鹽谷判官に乳を上たる乳母也しが鎌倉の  
營中にて判官の御身の大變御切腹の後翌日は説法洲の御屋敷を召上らるゝと定りし其前の日  
の事とかや判官の奥方兼代御前の御殿にて鹽谷の君の御幼年の節の事を語り出し愁傷云ん  
方も無難き悲しみ狂氣の如く與方始め御傍の女中も嘆きに數を添涙に疊も深く計悲しみの聲  
は隣家に聴へてあるの限りを尽せしが余りにお園の狂走は兼代御前も氣の毒に思し召てや御  
歎を止められ其子唯七を呼出しお園を介抱被仰付慰めて其家へ歸されしが唯七は母の風情を  
氣遣ひ万一亂心も爲たるかと案じて家に伴ひ歸り種々心を慰めれば思ひの外に氣も静りてか  
例に替らず機嫌能其夜は御屋敷に住居し名殘也とて母子盃を汲かはし晝の難に引替て笑顔を  
催し唯七には翌日立退の用意杯細やかに相談し頼て臥戸に入りけるが其翌朝は一家中はや起  
出て家財を片付各々屋敷を引拂ふ支度も既に調ふ頃迄お園は例の氣性に似合ずさも緩々と寐  
入りしが更に目覺し様子も無寝間の方の静なれば唯七は堪へ兼母の伏戸に走り入幾度となく  
呼起せど答無れば驚き呆れ邊り近く立寄りて寝たる所を能く見ればこはそも如何浦團より枕  
元の疊へ流れて朱に染たる血汐の色唯七は恟りして(唯)ヤ、ヲ、是は母人様氣がお狂ひ被  
成のか如何マア御自害とは情なひ事を被成ましたト云ふ涙に聲振抱き起せど死してより時刻  
も移り過しと思れ身中は陽氣の所も無咽をえり元氣貫きたる兼て用意の九寸五分手元も狂は



強健の最期勇士の母と曰言乍最目覺一き臨終も孝子の身には悲しくて狼狽廻も無廻ならず  
三見ても不叶母の亡體介抱の詮も不有は是非無死後の姿を繕ひ邊を見れば一封に書置と筆一上  
二十書を見るも悲れな母の記念と手に取封を開つ、涙に翳目を拭ひ心周章讀見る文言

一筆申候も一も一も今日願さまの御身のうへ思ひもよらぬ御事  
也へ途方をういなひ驚き入り申候馴させ給はぬ冥途の御旅只御一  
人にて何ほどか御便りなくあらせられ候はんと死出の山路の御は  
こびを御察ま申上候てははや惜しからぬ老の身をせめては御供に  
いたがひまいらせ候咄しの御伽ともなりらぬはんとおもひ詰斯こ  
そなり果るゝ其方の事も心にかゝり候へと細やかに申をきま  
らせず候母のこゝろを思ひやり候て 御君々さまの御意恨をよく  
くわきまへ申上覺悟あるへ候たとへ他の御方々の存念はいか  
にとも御手前一人なりと心をつゝ可被申候事御葉の陰にて見も  
一聞も一候はんと申候るゝ  
一織部矢兵衛殿御内方より借貫申候曾我物語三冊紫のふくさにつ  
み袋戸に入有之候早々お返し御禮頼み入るゝ小うで一ッ帯一筋

はりん女へかたみに遣はし度候りん女は下其身の本意を達し候ま  
てはすいぶん堅固にいと申さるべく候し

只七との

撰者春水伏申此文の文章雅と云ふ可者には有ねと長女ならで意味ふかく我子に復讐の異見  
自然と察せられて想登又文の末に借本爲たる曾我物語の事迄も心深く行届れたる文句と察  
し給へ

然ば只七は君と親とに俄に放れ懸傷 譬る者も無唯忙然として在けるが亦奮然と氣を勵ま  
斯る有様も誰なす業そ是皆高野師直が君を與 恥辱たる御存念より發り一條おのれ師直其  
儘に可置者かと勇士の一念頓て夜討の一番乗功名職の具魁は此只七に在けるとか斯て屋敷  
を引拂ふ時刻に近きとされば心に急共只七は法の如くに重役向へ届けて母の野邊送りを漸  
く假に追善が多くの家中種々に散行先の心當もな掛たる難儀の混雑上を下へと交せしに  
織部矢兵衛と聞へ老人據て萬事に心得あれば早くも船を用意して皆一同に乘移らせ外開  
らふ當坐の働き屋敷を請取立合の諸御役も感心ま賞美の事も不少別て織部の家時には奇觀  
に片付床の間に花を挿又掛物の拙なからざるを飾り付け煎茶の道具を備へ置菓子簞笥を並  
使の役の休足さらる、様に謀ひ其外諸事の取適一抜目の非る引渡さる奥深敷退立の跡を借  
推量れば覺不宜師直の行末安穩難致と今浪人爲人々の行状よりそ思ひ遠る御役人の有け

三十三



るとぞ

第十五回

人毎に一癖は有者を我には有せ敷島の道と詠せし古歌に引鏡云には無れと義黨の中にも行状に似合ぬ酒癖の最可笑濟有て後世の奇談と成人有其名を仲垣玄藏と云元來は秋津嘉家の藩中に芝多伊左衛門と呼ぶ、人の方弟にて芝多の部家住なれば媒人する者有て鹽谷の家仲垣氏の養子に成て其家を續て相續し仲垣玄藏と名號判官に仕へしが餘りに酒を好むより瓜瓞する者もあれど鹽谷の君を始め重役の人々は是を咎て却て玄藏の能有事を賞したりとそ夫を奈何と云に如何程酷罰の時にて事も事に此は少くも亂す別て御使者の役杯は只一言にて難き口上を得心能く其用を返はなり斯て浪人せし後も好る酒は止事無零落困窮の中にても酔ぬ日は無放蕩に寒者を凌手皆も無餘方無は實家の兄の芝多氏へ合力を乞も一乞すも實の兄伊左衛門は仁義の侍殊には父の遺言を思ひ忘れず舍弟を愛し不便を加へて幾度か玄造の貧窮を救ひ遣はし衣類も度々著せて遣せと忽ち此を古着買紙屑買に賣代を酒の價と代故に芝多の内儀下までも此を贖りて見輕けるか玄藏は物の數共思不酒をだに吞せらるれば例も機嫌の上戸にて下女賤にも挨拶能禮を云つ、足元も願々然可笑げな風俗か濟なる酒の咎後には兄の伊左衛門も苦々しくと思はれける然るに極月十三日今日は朝より雪降出一寒さ颯く北風は皮膚に石の針を刺如に覺ゆる厚氷軒の雪釘に袖冷る其夕暮の事也しが玄藏は例の如く酒に寒さを防ても防難たる肌濡を姿に着たる赤合羽銀頭笠も白替か焼びて糸の解しを首に頂く主君の恩義忘れぬ人とは容易に視へぬ足元障覆を蹴立る酒機嫌秋津嘉家の御屋敷内兄の芝多の門の口蹴込たる勝手口裏所の上り端腰をドンサリ刺る、様に至を背後へ手を支舌も不廻問言下

女は夫と看るよりも傍輩の女と顔見合一女は奥へひとり立て上口(●)玄造様被爲入まし今日は暖か寒ふ御在ましたらふ(玄)フイ(●)深切に掛い併此身は此通り好物の酒で寒氣を何供不思がお兄上様は何様ぢや雪の御無厭か(●)イ、エお寒のお病も無今日はお上のお客様で先程から御殿に御在遊升(玄)ハア、左様か夫では先宜とエ、然らばお姉上様は(△)アノ氣で寝臥お在被成升ト奥より出来る下女が言は玄藏は合點乍(玄)ムウ、此寒さては雪四方の御持病も發る譯た何卒早くお快氣お成爲遊能が夫ではお逢を願ふも御面倒だらふから目にも不懸に歸らふト云ひつ、茶碗を借受て股の下より穢汚き古徳利を取出一手酌に引請續け呑み舌打鳴し高笑ひ(玄)アハ、此酒はお兄上様の所へ御産に持て來たのだか御留守たからお毒味を仕過したぜイヤ未少しは残つて有併最早奥へは上難其方達でも吞て呉りやれト徳利を下女に差出せばさも否さ下に下女は請取置土の際にさし置たり玄藏は身繕ひして(玄)イヤコレお冬今此身か言口上を不失念儀にお兄上様の御節申上吳急度ぢやと(●)ハイ、(●)ハ(玄)昨年三月派人致ての後段々と御厄介御世話に相成まして千万難有存升殊には酒癖の不宜余計に御苦勞も懸まして添存升が此度漸々時節到來致て西國の諸侯へ主取仕つて國元の供を申付られまして明朝出立致升お暇乞に罷出ました所御留守にてお目に懸り不申残念にぞんと升方一此後お目に懸事無拙者死去致共も御高恩の程は忘不申ト云つ、少し愁泣を催せ共お冬は聊か氣も付ず(玄)猶此後はお兄上様にもお姉上様にも御繁昌被成升様にと乍蔭ら祈念致升ト言終り立上り脱捨たり一菅笠を手に取上と來し時結ばる紐も引割輪も細紐も放しかば今更に迷惑し(玄)イヤ此ア行を以事を爲ト笠を投捨古し手拭頼冠り出行んと爲ば下女は呼止

五十三い



め壁に掛たる背笠を採下し(●)ア、モレ君是でも召ておいで被成まゝト指出せば(玄)イヤ是は心付添をいどりヤ急いで行ずば至期其方違ふじて春を迎やれと云捨駈出す兄の家此今生の見終と思へば引る、後髪血脈の兄に對面も不致急ぐは約定の夜討の用意着到の時刻に運れまじ者と勇む心に愛ひを拂ひ積る雪路踏散跡より塞白雪に影も止す立去りしが兄なる芝多伊左衛門は其夜の子半刻に御殿を下り歸りしかば内義は頼て用意せし例の晩酌を進めながら今日玄藏が来りし事を語る傍より下女達も隠れし徳利へ酒を入れ持来りしより手酌にて呑つ、歸りし可笑さまで時の興にと物語れば伊左衛門は苦笑ひ(伊)今始た事でも無が酒に飲と實に人間の情は無様だが真に年中彼通ならは鹽谷家で奉公も勤まる道理は無譯成共酒興と本心とは少く相違も有様だテ又此身が了簡ては見察の有行状と云ふは弟の放蕩を他見に繕ふ様ぢやが先達も酒に酔て臺所に倒れて正跡無に眠つて居たが此身が他所から歸りし眼前者た者と思ひ乍能々看れと大小を前へ引付て柄の所へ右手を掛自然用心の躰に察た故所爲と此身が足音を高くしたれば忽ち眼を開て鋤口四五寸抜掛しが此身の顔を見て恥たる顔色其儘に俯て又正跡無風情然共落破し藤まき柄の刀心に似合ゆ刃の真精氷の如き腫は武士の本意を忘れぬ覺悟を察して置たが違ひも不致何卒立身させ度ものじやト語る間に時轉り早丑滿の鐘の音の聲を告げ渡る此時刻には彼玄藏同意の人々打連て主君の仇と高野家の屋敷に推入合言葉山持河竹の應對して烈しく戦ふ最中なるべし

第十六回

雪の翌朝に清朗に朝陽過せし其中に極月も春も陽か無は武家の屋敷の町方とも風情も違ふ巴の所前後芝多伊左衛門は夜を更して家内中が渡入込たる今朝の事最初の程は知らざりしが

渡る人聲の耳に止りて目を覺し何事やらんと驚きつ、麻衣の儘に大小帯夾み窓の戸更りと押開けば貴賤を不論鹽路を蹴散しつ、走行大勢常業ならすと伊左衛門家内の者を呼立て何の故ぞと尋問折しも又窓下にて往來の人聲△ヲヤお前は些も知ら無のオアソレ鹽谷家の浪人衆がナ高師直の歸りきへ夜討に行て敵を討て今酒繩の圓覺寺と云寺へお引上るのだとヨ此身も何だか知らなんだがノ今委しく其利害を知つた人に出合て聞たのだア早く往て見を鎗の先へ首を突貫て五十人許行列で前後を用心乍爲押て行が寔に立派だぜ○ヲヤノ然か戰栗忠義な手合たナアドレノ早く往て見様△早く往な此身も未見て居たかつた然其家内に急用か有故歸るのだと行合人の辻話しを聞よりいと芝多が胸に答ゆる舎弟の身の上昨夜来りし暇乞佛家へ奉公濟せしと言しは誠か偽か若や噂の儀討の浪人仲間に入有て死ぬる覺悟の暇乞に夫と言ず来りしか又其仲間には入さるかと案じ乍も他人の思はく自出て行れもせず奈何爲と氣を採しが家内に舊來召使ひし逸助と云男を呼出し只買物に行躰にて様子を見せにぞ遣しける然ば彼逸助は承知仕て御在升ト勝手に至小買物の手籠を提て豆腐屋か八百屋へ走る赴にて秋津嘉侯の常用の御門を出るより一足に走りて群衆を押分行其跡にても芝多は取ッ附つの胸の中腹に弟が西國へ仕官に有附發足なさば今更不及事乍何卒奉公濟せしと云しは全く偽りにて義士の仲間に加はつて今引上たる人々の人数に加盟して居て呉れオノ南無春日大明神當所神明宮の靈驗感得適れ武運の有様と衣類を改め袴を付玄藏に立出居間に坐し又立上り窓を覗き内義を呼て何用と言付んとし言もせず鹽所の方へ走り行き取て返して縁庭より側へ下りて又玄藏へ走り出口の内にて獨言(伊)エ、エ、エ、埃の明ぬ逸助めだ何所迄行居か早く歸つて舎弟の有無を告れば能ひのに居るか居ら無かは一目見れば知れる事を何を致して居るかエ、エ、エ、可怪イ



ハ是は自身て出掛候か夫も他人の見る目の憚りじやサテ何様したら宜らふぞト氣を揉ども詮  
方無逸助男が注進今を遅いと待掛たり斯又逸助は主人の云付尤も走出したる行先は人立多  
き壯小路思儘にハ歩行れず心を怒立つ、人を押分く乍行向ふより夥多の見物ソリヤ最来  
八十三人波打ち騒ぎ立てぞ見えにける

第十七回

再脱芝多の小者逸助は往來の群集を押分て行向ふより義士の人々皆一様の出立裝束四十餘人  
を三組に備へ行列正して引上來る其真先には辻々の見物役合圖を兼對して柄の付たる手大鼓  
を用意なせし嘉津田貞左衛門杉の谷半之丞の二八衆人に先立こと半町ばかり四辻に至左右の  
小路を見渡し敵の縁者の追手加勢等の有や否やを見届け何事も無ば立止りて彼合圖の太鼓を  
取直し家滿賀流の押か、りを打ならす尤小太鼓成と雖表裏の皮陰陽の定め皮留の鉄の齒を  
正して天の二十八宿地の三十六宮を象て三十六鎮二十八鎮其形を不違裏と表に打たるを陽氣  
を含て嚴重にドンリ、くと九度三返一打て後陣に知らずれば先手中備後陣の三隊整々とし  
歩行をなす其形相聊も油斷無小勢成と雖も容易此を打破る事は難成と被察ける其備立の一番  
には

立林唯七隆重

風間十次郎光興

右の二人は袖印の白布を以て包たる鋒を引提たり其次には白無垢を用て包みたる首を鋒の柄  
に結びて是を荷ふ尤も六丁の丁敷にて手代りに持事を定められたり前後に並人々は壯年成を  
撰み中備には老人達を圍ふ如く又近夏國六余曾川勘平は重瓶を腦みければ籃輿に乗て後に從  
ふ其外淺手の者は皆歩行にて勇々しくも足並を揃へたり然ば逸助は玄造のと覺束無那方此方

を見廻すうち後より來る行列の先へ進みし仲垣玄造行年茲に二十八歳常の醉狂に引繼て最も  
勇まき其出立兜頭巾を脱てゑりに掛白布を以て鉢まきとし鋒を引提來しが早も逸助を見留て  
聲を掛る(玄)コリヤ、く逸助く(逸)ハイ、く、くヤア玄藏様て御座升か私はモウ、く欠出  
しテ参じ來たが見物の大勢に押倒されて歩行れ升んで漸々只今お目に掛り升ヤレ、く意にお  
目出度う存升無ぞお草臥なさい升て御座ませうと揉手を一つ、近付けば(玄)イヤ差て勞れも  
致ぬが昨夜は折角お暇をひに上り一處折腰くお目に掛らす夫より直樹牛島新田へ推参して只  
今引取のじや其方向を用ても在て参つたのか(逸)ハイ、くイヤ外の事でもござんせんか且  
那樣の被仰付にて貴君の御様子を見に参じ升たのでござん(玄)アハ、ノ此玄藏か常々酒狂亂  
醉のみにて在し故敵討の連中には加はるまいとの御心配も御座たらうト云て玄藏は所持せし  
小笛と短冊を兄伊左衛門への記念とし逸助へは金子を遣し(玄)行列に後れる故心急ぐ此品を  
兄上へ差上て呉れ又申上る口上ハナ(逸)ハイ、く有難存升(玄)先に申通りお目に懸すにお別  
れ申か残念に存升と扱浪人中種十御厄介を懸ましてはござん昨夜師直公のお屋しきへ推参致  
して亡君の御無念を晴し敵の首を申受け只今より御菩提所圓覺寺へ罷り越し一同切腹の覺悟  
に罷在上は最早今生にてお目に懸る事も有間じく存し升ば兄上姉上御揃ひ御機嫌克御榮相成  
る様にと致しく申上て呉し其方も無事にて奉公致せイヤ遙に後れた是はは、たりイヤ然ばぞト  
言捨て行過たりけるが人々に走付んと欠出一行く逸助は主人の喜ひ思ひ遣れて其身も嬉しく  
宙を遊んで馳歸り有し次第を見る如く具に伊左衛門へ物語たり切腹の記念の二ツ品と其身が賞  
九十三ひ、金子をも残らず其所へ差出せば兄伊左衛門は肉身の舍弟の名譽其の身まで面目となる武  
士の冥加に叶ふ悦び泣小躍をして立上り(伊)逸助大儀ぢや休足致ト契へたら入る折柄に内儀



も是を開付て共に悦ぶ玄藏の昨日に變一忠義の敵末代迄の家の譽と高く詞家内中此迄影にて  
 勝りたる下女も呆る、侍ひの本  
 鎌倉と云時に誠の魂ひ顯る、與  
 床一さを今ぞ知る贈り物ちお屋  
 敷中へ取沙汰をして柴田の家へ  
 馳來り合弟子の御忠誠當秋津嘉  
 家の御名前にも自然からなる武  
 士道の手本とならる、御働きの  
 様にも御満足に思召る、所を  
 りと賞美をせざる人もなく果は  
 忠義を慕ふの余り何ぞ記念を賜  
 り度と云人あれば當りたしと彼  
 玄藏が脱捨一萬頭笠の古きを拜  
 る戴く侍ひ質氣名残に持參の古  
 徳利の底に染たる酒造も好んで  
 買ひ頭上に塗りて禮いふ人も有  
 一とかや珍寶云るれば伊左衛門  
 冠鹿略に成ぬと徳利を記念の品  
 と紫の帛紗に包む其の重寶是ぞ



赤垣玄藏が徳利の傳記と後の世迄語り傳へ一譽れなり

此條は予が友人耕舌者なる文車か常に述る所を縮文に綴て婦女の覽に備る者なり

第十八回

爰に義黨の身を變して仇討の時節を待ち飯住をせし住所を替名の大略を尋ね後の世迄でも其  
 辛苦を察し思はる、語り種とすれば古書を正して違ざる者を記す

鎌倉の町の内にて徳町三丁目小山彌兵衛方の貸坐敷宿に借主となりしは

- 垣見左内 實は 大星力彌
- 又四郎 實は 杉野半之丞
- 同五兵衛 全 由良之助
- 原田弁右衛門 全 潮田政之丞
- 専谷仲庵 全 青寺十内
- 森 清助 全 近松 勘六
- 三田村次郎市 全 天村次郎左衛門

外に大星の若黨一人近夏が江州の在所より運來り一僕一人都合十人貸し坐しきに在りしとぞ  
 新孟子町六丁目庄屋吉右衛門店

- 神道者 田口一直 實は 葎田忠左衛門
- 同 居 全 左内 全 全 澤右衛門
- 和田先典 全 原 惣右衛門

猶此外に變名爲義黨の人々主と成家來共成昨日今日住所を轉じ活業を替姿を變じて艱難辛苦  
 一敵の内外を密び窺ふ忠義計略種々様ば必如斯とのみは思ふべからず住居も諸所も變りしを  
 悉くは記さじと察し玉へ

今更不能云共四十余人の忠臣義士を容易く思ふ人々の爲に又々評す可後世にも忠義孝道を賞



人多けれど忠孝全くして法に背くと云切腹して公道を立ねば即ち亂臣と成故兼て以成は死刑に成を覺悟の警對前代にも又後世にも有がたかるべき人傑なるべし

○不破勝右衛門

舊年以前の浪人なり

○風間新六

十四年春二月の浪人なり

○風間新六は風間喜兵衛が次男にて叔父の里村伴右衛門が養子と成養父と共に浪人す東に下りて龍元但州侯の藩中中堂又助と云人の許に食客と成て有ければ鹽谷の祿を請たるにも非其實の父喜兵衛と兄十次郎が義黨成に依て大星へ種々と説て盟の連中に加はり英勇なり

○岡野九十郎

追盟の人改めて二代の

金右衛門

○佐藤長助

同 改めて二代の

右衛門七

右の如き義心の人々に引變て連盟の者六十七人有但この名目の中には不義不忠共定め難き異説の士十有人餘又約束を違て盟を破り者六十七人に又悉く異説有殊義士の中也ける千崎彌五郎か這不義の人々を論じ注したる者有夫は編の卷に寫しぬ

第十九回

千崎彌五郎則休が書殘せりと云慎注絶跡自解とか題號したる書に曰

奥野將監は逞義して其家の祖なり山城平左衛門と云者の武功を貴ぶ然れ共何故か鐵石心忽ち瓦礫の如く碎けて空しく不義に落入者なり川村傳兵衛佐藤伊右衛門進藤源四郎小源源五右衛門は共に忠義を抱く事金石の如くと雖節に臨んで其意を忘れたる事雪霜の朝日向ふと同じ

右の文を初に出し衆士の評を悉く載たれ共此小本を綴る本意は童蒙の伽なれば理屈を厭びて悉く寫さず只引用の旨趣を知る人にこそと思ふのみなり去ば後の世に至りて先哲の穿鑿種々あれど多くは推量の説にして其頃風情を深く測知る事難かるべし彼大星氏の仇に心を充さする偽の放蕩淫樂と云事は當世になりてこり諸人も知るなれども復讐を不成以前は義士の連中にてさへも謀斗とは思はず實に大星も淫欲色情になづみ溺る者と了簡せしは宜也と云味方の者にも然思はる程ならぬは敵の親族の然も忠勇名臣の間者を欺くことを得らる可か又實に義士の面々の僅の月日の間乍婦女子の爲に樂しみをなせし者少不但復仇の際に至つて其恩愛を速に思ひ切て死を善道に潔よくしたるのみ浪人の最初より悉く禪宗大悟の出家人の如くならんや色は色として樂み忠義の大志は別に命のあるに等しく守り可成殊に大星が酒色に遊び放逸なる淫欲を慎むといふは其忠信の節を最負する人情より出て賞譽するの過たるなり全美女を愛して狂人のごとく本心更に他の念はなかりとぞ其愛せし婦女の多き中に別て心に叶ひしは山城國伏見の里撞木町のやう女屋笹屋清右衛門が抱の全盛浮橋と云い美女後に夕霧と名を改たるやう女に心を移し晝夜の境もなく醉倒れ金銀を費して寛活の酒興大壯なれば今も猶彼地の口碑に載る然ば伏見の撞木町も安永の末迄僅に昔の面影を残り笹屋と云は殊に大家にて其比も夕霧の三味線大星の文杯を秘藏して有りしが彼家の座敷鴨居の上に大星の好みか欄間を細工人に説へ山科より伏見迄の景色を彫て透しにしたり又階子も大星の好みて巾一丈に拵へさせ天井の板も奇らしき木を擇みて張せしか或時醉狂の餘り天井の板に大文字を落書きしたり此類ひの珍らしき跡跡多かりしが其他火災に由て跡痕も無成行人往ぬ草原と變り又寛政の初つ方二三軒の遊女屋も再舊せしとぞ然るに彼笹屋の天井の板は奈如



にして火難を凌ぎ残りたるにや後年大星の自筆の戯れ書とて見せ物に出たり實に紛なき正筆なりしかば好子の雅人星を求めて屏風に造りしとは天明年中の事と、かや又云大星が遊里に遊び隠し名をば(ウキ)様と呼せしとぞ北窓瑣談に委く記されたれば其細やか成を讀給へ實に大星が浮れ遊びの甚だしきを淫慾深きと察してや或時小山近藤等は頻に大星へ取持て二條通り寺町の二字文屋次郎左衛門の娘お輕といふを終に妾と定めけり是も宿世の縁にたりけんお輕は金のもへに身を任せるといふにはあらで由良之助の年の其身と遙に遊ひたるを厭はずその情濃に契りを籠て束の間も放れ方なき風情のみかは心の臓を盡す事釋迦も孔子も斯までに慕はれたらば中々に迷ひもすべし愛慕も深からんと他人に噂を爲ける斯ては小山近藤がお輕を大星に引合せし様なれども早其以前に由良之助は此娘を馴染てありしと云夫を如何にと尋るに彼二文字屋の前に於て酩酊の際取落せし刀をお輕が拾あげ憐れと知せし後も亦同様の事ありければ見覺ぬある儘仕舞置を其後表を通し時目早く認て呼止め(かる)モレノ且那樣貴家は又此間の様にお腰の物をお落し被成は被成ませぬかと問れて門に立留るは立派な妻のお侍(侍)イヤ是は面目ない事ト四邊を見廻し(侍)實に落したに違ひ無が他人の噂に成ては外聞が悪い萬一拾つて有ば内々で何卒渡して貰ひ度ト小聲に言ばお輕は莞爾(かる)然様をらばマア此方へお通り被成ましト家内へ伴ひ入ければ頼て主人にも面會し落せし刀を請取て厚く禮をば陳たる上奥庭もなく語ひしが互ひにふかき縁と成て段々心易く出入を一元茶過分の金銀を遣ひ二文字屋へも多くの徳分を付て交附しかば家内中の者共が大星を大事に敬ひ酒食の馳走毎度にて大星氏も其度毎に金銀反物を土産に持参し厚く恩意に盡せし内に何時お輕と馴染みふかき中と爲て在とも知らで小山近藤がお輕を媒ちせしこそ笑可とならずや此一

備を押測ても反問苦肉の遠計中々に容易く察らる、所爲には非りけり

古人の善惡忠不忠の傳にも是非の沙汰一概には評す不可惡に似たる體あり不忠の機なる忠臣あり亦其人々幸不幸嗚呼歎す可し

夫主君を諫言して争ふは戰場一番鎗を勦るよりも遙かに勝る忠臣なれども多くは其功空しくして君に惡まれ難を蒙りて用ひらる、事最稀なり且宜しからぬ評判を承て主の下に立家來は忠義を盡して命を捨てても他人是を賞る事なく主と共に世間の憎みを請て勝らる、は若箇か口惜き思ひなるべし愛に師直の家老職小林平八郎と聞へし人は情ふかく仁義の士にて其忠臣たる心は四十余人の輩に勝り亦武勇力盡古今に秀たり大事に臨みて魂騒かず夜討の人々と戦ひ死を潔白せられしを聞傳へ還歸の余り聊外傳の奇事を記て依怙負最願不有若官一覽に備ふ

○野末も當時は花柳解語若の娘なんどが往ふ街となる所東に珍らしからざれば昔を言ど夫うとは思はぬ人の多りけり愛に野中の井と呼は谷中三崎の邊なるが夜も更渡りて月影交水に映も物淋しき井桁に依て手を合せ涙に咽ぶ娘の風情傍に付添ふ若き男も同じく涙に咽ひつ、互に手と手を採交し既に井中へ飛入らんとする者あり折しも柏木塚の木影より走出たる一個の武士忽ち男女の帯背を採て後邊の方へ引留けり

仰此男女は奈何なる者ぞと尋るに男は鎗倉なる本總町にて明石屋此次郎と呼ばる、町人なり女子はその養生を委しく知らねと廊に名高き三浦屋の遊君琴浦と呼ばれし全盛なりしが互にふかく馴染て通ひ詰たる其果が廊の金には詰るの習ひ杜絶て逢れぬ身となれば愈々思ひに堪兼てや二人密に隠し合せ廊を頼て出て三崎なる菩提所へ参詣し彼野中の井戸へ身を投沈めて死なんとはなせしなり退時柏木塚の木陰より走り出て兩個の命を助けしは高野家の英勇にて



義士の夜討の折柄大丈夫の勇戦をなせし小林平八郎といふ豪傑の侍なりさて此小林が兩人を命助て後夜討の時に頼みになる一奇談と浮世繪師の老先生高師前北齋爲一小林氏の子孫にて六は恥かからぬ實録有夫は十二の巻を讀みて知るへし

第二十一回

森々たる老樹四面を囲み颯々たる惠風煩悩の夢を覺し霧は自ら不歸の香を焚月常住の燈火を統とて四十余人の義士の爲に殘せし墓碑の在所を哀れ共思ひ又魂を清涼たらしむ心より聯ねし同志の筆すさみ凡其頃の世に在し人は日毎に噂せぬ間もなく詩歌連俳の名家の人々遺傳の歌吟絶さりしとぞ又その傳記を珍重して本傳拾遺名々傳數々多きなかにして彫刻にせしもの三四種に及びしが今は絶板となり残れる製本も最稀なり此頃書林文藻堂にて書入の一本を開せしが其書の奥書には

花落盡工 吉川半次盛信

享保二年正月吉日

養屋治兵衛板行

此如に記してあり外題は近士忠義太平記といふ其採集詳細なる物語はあらねど今天保十一庚子の年よりは百二十四年以前の板行にて瀟瀟の落着より續に十八年ほど過て發行せし冊子すれば眼前の人に見せし物故多く實事を記せるならんか併乍ら其説も世に流布せる書に大同

小島のみ只そが中に岡林奎之助の自書と片岡源吾の下部助助が傳最珍敷聞也亦堺の町人天野屋利兵衛か鎗屋孫六に逃へし武器故訴人せられし事諸書にいふ旨趣と相違せり夫は連々に摺はして告まふさん都て此處に記す所は例の詞書ならず讀て後に咄しなどしたまふ節の辨舌なれば其心にて讀給ふべし

○大星が定めたる手配夜討内試の書面

一相音を違ふ可らず是射入の肝要なり

是山鹿流の陣太鼓九度三返の打切を合圖とて追手搦手一同に合圖の笛を吹鳴す 長さ

一合詞第一用心をり聊かも失念すへからず

是を射入て戦ひ最中の一大事古今夜討の秘要なり

○山と問をば其答に

○漲 ○激 ○淡 ○溝 ○泥 ○清 ○濁

如斯 水に縁ある詞にて承答互に心せくへからず

○河かと問は其時は

○岩屈 ○古水 ○嶮 ○麓 ○坂 ○峰 ○谷

如斯 心を得て山に縁ある詞を用ひ問も答も速やかに必同士對有べからず

七十 亦大星の下知して曰

一弓鎗の用を斷べし

是玄關ひろ間に用意して在弓の強を初録の體を捨る事なり



一 師方の燈火を消して爐の中へ水を打入るへー  
 是は最初に味方の体を敵に見せず爐中へ打込むその水には灰が烟りと立上り敵を驚  
 かす方便にて味方は火打の道具あり  
 一 淺黄の服紗を一ツつ、各々懐中すべき事  
 これは臨時に入用あるべし  
 一 薬罎に焼酎を入れて持参の事  
 是は手疵を蒙り一時の薬ともなり焼酎火を諸所にかけけて異變を見せ敵の氣をとる  
 一 計也  
 一 竹を以て糸を採縛紡錘の如きものを百本計拵へ持べし  
 是は壁に突さして燐燭を點又燈にも突立用ゆるものとすへし  
 猶此外前後の手當手配最嚴重なりとぞ

こ、に仇討の日の事とかや高野師直の邸近所に注輪船屋久兵衛と言者あり其家へ十四日の晝  
 過頃に常々心易くせし刻み烟草賣の入來りて言けるに今度古朋輩の好みに依て昔の武士に取  
 立られ今夜夫等の人々と夜道を掛て國元へ是非とも出立するに付き我家は甚手狭ゆる當家  
 で支度を調へ度と頼めば久兵衛異議に及ばず委細承知と請合ける  
 因に依て云昔は町々に賣食物の店當時の百分一も無とぞ温船蕎麥を製し賣初しは寛文四長年  
 より町方にてはたを飯賣屋の半商賣に始めたるものにて武家方拵には減多に喰ものも無り  
 とぞ天保十一庚子年よりは九十一年以前寛延年間記されし新見正朝入道のむかしく物附

今より七十年前以前は武家方にては町方にて拵へ賣蕎麥温船の類ひを調へ喰ふ者なり近年は武  
 身歴々迄もうどんを喰ふト記してありしうごんとは當時の常体の蕎麥屋の事と云然らば  
 蕎麥切の世上に一統して食類の一家をなせしは九十年來の事にて未だ元祿の頃以ては  
 思はれる元祿十五年は今より天保十一年百三十九年になる但寛文四年に蕎麥を賣初しより天保  
 十一年迄の月日を弄ふれば百七十六年となりぬ斯れば其頃は僅に二八の蕎麥もへも自由には  
 食し難し當時は蕎麥賣家と饅頭の蒲焼を賣家の一町に二三軒宛は有ぬべし蕎麥賣家の餘地を  
 古代の質素を思ひやりて奢の事をなし給ふなど童幼衆に告げらすのみ  
 冗話は先指置て彼長右衛門は義黨の面々とうち連立久兵衛の方へ入來り互に睦まじく  
 及びしが主の久兵衛も硯函をとり持して心よく挨拶挨拶しければ士の人々は互に睦まじく  
 笑ける時彼の主人久兵衛は豫て好る俳諧の勝句に得たる景物の大層な物を出し其物言を物言  
 りて座の中央へ差出せば各々互ひに顔見合せ敵討の門出に、顔見合せもなむ古事の新古事最目出  
 度と心の中に悦び勇む義士の面々一番勝とは否といや、今人ぞはじめられよと男いさ中  
 に大星久兵衛に向ひつ、(大星)兎ても、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、  
 せ彼成事は出来升まひか、(大星)兎ても、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、  
 さぬま、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、  
 は

夜の中に雲井に名をや郭公  
 ト觀まじらト言ければ(大星)イヤ是は成程秀逸々々エ、一と其初五文字を拙者がお貴ひ申て  
 一句いたさふ大高氏付られト、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、  
 一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、一昔の事、



大星 夜の中に力の息や霜柱 玄梅  
 大高 空にいきふ鈴鹿の聲 子業  
 小野寺 既に今大盃の傾むきて 里浦  
 吉田 松の座敷に百反の綾 春帆  
 ト思ひ懸なき附合も實に英勇の  
 現にて斯る時にも風雅のあそ  
 び然優長なる其風情真の太丈夫  
 と謂つべし斯て又大高は此屋の  
 下男か口癖に冠刑の題句なる  
 何のそのといふを聞き  
 何の其岩をも通す桑の弓  
 其内時刻も来りいおは各々出立  
 の支度をなす(長)イヤモソ久兵  
 衛さん段くとお世話に預ま  
 した(八)イヤ異に何様致まりて左様ならば御機嫌よ(長)其許にも行末長く御機嫌いたされ



よ(八)イヤ異人様もお通者で(大せい)随分共に繁華調成イザト言つ、立出る雪の宵路を物  
 せず勇や空に鈴鹿の聲見する鷹の羽の紋に経緯をば脚直も付ぬは今宵羽を伸て夫と目指や鼓  
 置の東河原に押出し備を立て隊伍を備へ二手に別れて無縁寺の南と北へ静かに進む時刻は子  
 の半刻順程なく高野家の屋敷にこそは近付ぬ

第廿二回

世俗義黨の事を語り傳へて衆評様々なる中には奥野將監小山藤五郎備前守は真一仇討仕損  
 じあらは二の目を討へき内談にて所爲と約束を破り反き様に、驚きあれど今は此人々に非り  
 くなり其証據は大星氏の認め残されし書面にて明けし左に寫出たる状は復讐の前日に認め  
 られて死後に故郷へ送り届られし物なり

尙以此狀家來に可遣候得共若途中滞候てハ如何と存意扣死後大津より其許へ相違候様に  
 願進候以上

家來兩人暇遣差登せ候間一筆啓上致候甚寒に御座候得共皆々さまいよく御堅固被成  
 御座候と珍重奉存候最早御城主も御仰付珍重之御事に御座候前々之類等計儀等も被遣事  
 もに候哉無心許奉存候

私在京之内何者角不得心隙候間以書中不得御慮御無音罷り過候御聞及可被成候十月初京都  
 異儀無父子共に下着仕候殊に今日迄一段と兩人とも無病に罷在候調に佛神之御加護と難有  
 喜悅仕候在京之内者從公儀拙者へ附人有之一足及踏出候儀罷不成と儲成る筋より聞出候品  
 杯岡本柏屋等彼是申候得共不儲成儀承り候故發足相催候處に道中御關所無備も少及に  
 に懸候儀も無之下着仕候爲申合儀倉に立寄五六日逗留夫より川崎近邊平間村と申所へ宅



申其後東之徳町に致借宅父子其外忠士共の者一ヶ所に借宅仕候折々高野殿他行を承り  
 心を碎き途中心懸候得共不仕合にて出逢不申居候家敷へも問者を入二三度見分申候處溜  
 無依之近々打内可申と奉存候最早間有之間敷候間其節之趣追て御聞及可被成候岡本太郎  
 左衛門柏屋勘左衛門小山源五右衛門進藤源四郎仕方不及是非入外之事共に品々簡様に申事  
 も狼箇間敷與野將監川村傳兵衛存知外之義共と只今に至り候ては空之助惣右衛門源左衛門  
 の了簡簡間敷と存事に候當地へ罷下候て中田利平太中村清左衛門鈴田重八家來瀬尾立退申  
 候古今不珍事に候得共是迄罷下り候處に右之通申候此度暇道一候而人之者共爰元  
 にて晝夜骨を不惜働くれ過分不便に存事に候急成事可有之と存暇遣候向後相應思召も  
 御座候は、此者とも義へ被御心添可被下候將又拙者妻茂存寄御座候て京都より離別仕縁者  
 え歸一申候悴娘義如何様に罷可成とも其通り之事に候然ながら當地へ罷下り承候得者二  
 男吉之進事内家に成何方敷遣候由にて不存寄事にて以後萬々一別義無世間に罷在候は、吉  
 之進事一度武名之家を起候様に仕り度事に候得者少し者心懸に懸り由候此段存問敷事に御  
 座候得共人性凡夫の拙者に御座候得者はつかう候乍去ことの妨に罷成義に者毛頭無御座  
 候御氣道被成間敷候此度申合の者とも四十八人にて此様に志しを合申候備冷光院殿此上の  
 御外聞と存事に御座候死後御見分の爲口上書一通寫進候何茂忠士のものとも御座候  
 御回向可被成下候其場にて生残り候は、定而御引出御仕置にも可被仰付候勿論人々覺悟の  
 事に御坐候御氣道被下間敷候夏雪線去年已來之御物謂失念ん不仕日々存り出此度當然の覺  
 悟に能成得奉存候備御心安得各々様御儀多御暇乞わたくし如此御坐候死入無口死後色  
 々批判とり、可有之と存候知貞縁へも同前に申度各恐惶謹言

十二月十三日

大星由良之助

長雄

○近士太平記に載たる東下りの文章  
 小野寺は隱家を密に出て大星力彌と此に東跡に下り再度家に歸るへき時も無れば是や此往も  
 限りの相坂のせきくる涙を袖に止め雲時は宿す月影の消ぬ水と見へ乍と浪寄る湖水の壯士  
 衣單なる易水の秋を眺めぬ一馴ぬ嵐に袂を任せ幾か定めぬ草枕衣關寒き夜に旅癡の夢  
 も結ひ不得蓍の草葉に影宿る秋も未野の夜半の空小笹かくまに露更て虫の音も打りきり類ひ  
 なく淋しかりしかば隈れぬ儘に差向ひ越方行末の事共思ひ續けてありしか共情々と斷念むれ  
 ば亦心極ます理も不有は小野寺は不斗も

今は世にあきはつる身のいるべせよとや入る方の山の端の月  
 何となく新歌を口ずさみければ力彌も感情絶たせりけん  
 故郷有母秋風涙 旅路無人暮雨魂

ト互に置く古きを探り今の情に准らへて打吟しけるを衰れなる匹馬風にいばびて、驛路の  
 鈴の聲今日も旅路の急がれて草分衣ををれつ、過來し跡を反看れば伊勢尾張三河も越てはり  
 けくも未は何所と遠江駿河の國も早過つ處ふ何と伊豆相摸思へば野暮山暮て遠くも來つる  
 族の空四方の八重霧立籠て行客の跡を埋む都の方には白雲の變遷果や箱根山ふりさき看れば天  
 の原押明方の海の面沖の小島は波荒て晴路舟に身の上も思た、へ一行衛より松風寒く時雨茶



て暫時馬を止めしに知己人と逢て都の方へ登ると聞しかば文など調へ言傳しに又今更の別れ  
と成竹の下道打過て酒匂大瀧相横川深き思ひは汝にのみ舞れて解ぬ藤澤や脆き涙の袖の色  
濁紅に染ませる唐土か原紙並か原片瀬腰越袂と、瀧と浮世の露けささ草葉にうけて隠れ家  
を鎌倉に求めつゝ、忍命の置所飛龍の三冬に替する如く時を待てぞ居たりける

○右の如くせし文章は享保の頃の板行に頼してあるを思へば古き情の文句にて小野寺が筆の  
跡杯をも見開きて綴りたるものにてやと察はる近比昔耕者の話大星の東下りと云者は大平記の  
中にある文章を悪くとり直し、句續にて愛に頼したる小野寺の文には遙に劣れり

第廿三回

茲に又小林平八郎は明石屋此次郎の必死を救ひ又琴浦をも介抱して段々の機子を聞に義理不  
良借財多く親族縁者の惡しき強く彼是身の立難き事累り故二人諸共に野中の井へ身を投て  
死なんとせし由を包まず語りければ小林は夫を不便に思種々に説諭して二人の死を止めし後  
自ら世話して和歌島伊勢といふ鑛師の名家へ夫婦養子に遣はしその家を繼て此次郎は和歌島  
伊勢と名乗養父母の没後も家業益々繁昌し鑛倉の諸侯へ出入して東に名高き鑛師なりしが住  
居は圍城の夏阪町に引移て高野師直の屋敷の門前に在ける然は極月十四日の夜深更に及び  
て義士の面々夜討の節に高野の家の中周章る中に小林平八郎は唯一人少も狼狽へる心は無しと  
思はれて然も其夜は非番なれば其身は宅に眠りしが物音を聞と等しく目を覺し其歳五歳にな  
る娘を起し其儘小脇に引抱へ兼々心懸置たる稻荷の社の屋根よりして片手に梯子を外へ下り  
和歌島方へ駆行て仔細を粗く物語り娘を夫婦に托せしま、再度屋敷の堀に近付懸たる梯子を  
躍登り又も稻荷の社の屋根より庭の方へと飛下り御殿を指て走り行夜討の人々と戦ふて實に

眞一が働は夜討の段にて委しと説べし抑々世の中の人情義士の方を愛顧にして師直方を憎み  
嫌ふは善を好み惡を捨るの心より誣れば尤の事なれども其中に聊か差別可有不仕合にて小林  
は高野の家來なる故に義士に勝れる働きて然も大丈夫なる其の行狀雖耳に不意の夜討を受  
て心周章事なく小兒を抱いて圍みを走抜飛鳥の如き身の取廻し和歌島氏を頼み引返り大敵を  
不怖死を擧せし容形は師直方の大忠臣にて四十七騎に百倍の英勇也と賞すべし斯て和歌島  
伊勢は小林八郎の娘を大切に養ひしが琴浦に實子も出來されば殊更に可愛がりて成長の後此  
娘は婿をとり鑛師の家業を傳へて家督としけるが彼娘は實の父小林氏の討死を兩親より聞傳  
へ歎き悲み火急の中より我身を助け出して和歌島に預けられたる慈悲の極杯を考へて九十  
余歳の長壽を保ちし其間一日も忘る事無物の本繪草紙杯に忠臣藏の夜討の繪が有は見る度毎  
に歎き怒憤てその繪を引破り捨しむる實に小林の娘なりせば然も有ぬ可事ならんか去ば彼小  
林の娘の腹より産れを以て又和歌島の家を相續し血脈絶す東都浮世繪師瓦家宗理と稱  
し古今の名人は小林の娘の孫に當れりとぞ其故に百廿七八年以前は宗理の父子なる者鑛師  
伊勢の家を續て能山町と云所に在りしが其男子の若死せし故他家より養子をなせしが今も家  
名は繁昌して何某と云御鑛師が夫也とかや如此なれば宗理と云し畫工は小林平八郎の血脈に  
て彦に當れる先生也

亦説鹽谷家の浪人は様々の傳説有中に小野寺十内の浪人して嵯峨野の奥に在りしかば如何風  
雅の住居なりけん彼人の筆さすみ也とて書寫たるを見たりし事あり

世に仇一野の敵なると浮世を敵に見做ては被羅金繒金銀珠玉も何か心に止るへき柴門荆棘  
に閉られしは人の吊らふ可道も無月外の友も無れば昔を語るべき便もなし



○おもひ出は嵐の山の紅葉を分れし袖の色そ其見し

○忘しな故百年を事來て代々に變ぬ君が情を

十五 九月の中納経の真影をば出るとて詠殘せし歌也とぞ

六 忠臣義士の功を賞美の餘り何に寄す其節に咄しの由縁有様珍重秘藏せざる事なり然は今も

尾張の名古屋關口にて在桂川の花瓶と云は寶井其角が都に登りし節桂川にて得たる籠にて其後

山田宗伴の手より師直の所有となり常に居間の床の間に置れしに義士は夜射の退口に其花瓶

を見付て淺黄の絹の服紗に包み高野氏の首の様に察する謀略と一鎗の穂先に貫き勇しく圓覺

寺へ行けるを彼寺にて大高子葉は思ひ出して花瓶を改め兼て見覺へ開知りたる其角の桂山の

花瓶なる由を寺僧に教え置ければ之を開傳へし者の懸望して風雅の家に傳へ後には餘疵ある

籠花瓶を桂川の眞物也迎久しく關戸に珍藏あるとかや

長持人足の歌 ▲あひかなア一遠けりやナエ×ヤツトコとうーん何様したく ▲須磨のナアエ

まの浮世の義理もへつらやヨウ獨明石のナアエ浦みが獲るヨウエソそうだか何様たかトツコ

イモ歩渡なる籠早川も昨夜の雨に水増て不接内では中々に淵漸止まらぬ早瀬の浪早日も西

へ入相に間近き河原をうろくして人待顔の娘と下部往來の旅人行違ひに顔見合る花の色年

は大方十八九素顔なれ其色白く世に類なき美々なれば噂とりぐ行過て早旅人も途絶へたる

に剛人の鬚光男左右より打寄て遮る下部を突倒し驚く娘を擔ぎ上げて河原の西の林を指て逃

行んとする其所へ來かゝる武士の浪人体編笠脱捨忽ちに雲助を引捕らへ片端より取て投除

籠を救ひて下儀をも引起し勢はり乍(浪)傍若無人の致方無常感でござつたるふ憎ひ雲

助供め變期仕よと白眼付刀の柄に手を懸は悪人もは恐れをなし皆散り逃散た身娘と下部

は危き災難除れて嬉しく手を捺侍の前は手を支禮義を演習姓名を尋るに折しも俄に川の

向より人聲高く木梢に響きワア

ーくと騒立たる多くの人足籠

籠の四方をとり圍み籠籠の棒先

にて籠を付肩に懸て引如く前へ

奔は人足は汗を流して聲々にエ

イサアえいサアーくと宙を飛す

る早打の忽川へかき入れ乍ら水

を蹴立て押渡る後に續て又一挺

同じく聲を懸合てエイサアーく

わいさーくワアアーくと聲諸共

に河水を瀬切が如く押渡り此方

の岸に上り來る其衆物を差覗く

恠り驚く浪人か思はず想籠へ懸

を懸(浪)卒爾乍ら早打は原郷右

衛門殿でござらぬか(郷)ヨハ珍

七十五らや不破氏か(浪)心元無郷右

衛門殿御家は何か大變が出来せ

るか此様子は(郷)推量せられよ





勝右衛門百七十里を五日目にて早も當所へ必死の注進隠しもならぬ主君の大變委細の事、後より續く瀬左衛門にお聞あれと云間もあらせず人足は赤穂を指てえひさア、飛が如くに走去は彼浪人は心急てや又來る駕の渡るを待ち兼川へ走入り駕籠の側(浪)大星氏か瀬左衛門殿不破勝右衛門で候ぞら家の大事は如何なる仔細何卒拙者へ粗忽乍お聞せなされて被下ヨト言へは、大星瀬左衛門は不破を招きて耳に口(瀬)ナ我々初覺悟致た貴殿古主の御恩を思はと(勝)ヲ、仰にや及ぶべき請たりとも鎗引提げ裂たり共鎧を肩に(瀬)萬事は後日見参にと別れを告げて瀬左衛門は乗物急がせ走て行く

介石記に大星原の兩人百七十里の行程を五日の日數にて馳付たりと記せり又此注進には汗馬に鞭を當て乗付たりと云ふ説あれども實は鹽谷家へ常に出入の道中師何某の計ひにて先觸宿次の早駕籠を昇續せし者と知るべし

再説不破勝右衛門正種は久き以前に鹽谷家を浪人したれ共忠義の志は鉄石の如く先非を悔みて高貞の君恩を報し奉らんと思ひ居たりし所に此度の大變國家滅亡の注進を聞よりも定めて大星始め國元の諸士一同に籠城必死の心慮なるべしと心急前後周章乍彼娘主従を同道して問屋へ掛り川越人足の不法を斷はり娘を悉く送り届ける様に聞くと問屋場の役人に云付其身は別れて浪宅へ走り歸り城中に入りて討死する支度に及ぶと勇々一けれ

不破勝右衛門が先年例一切の一件にて浪人一鎌倉へ立退浪宅せし事は世に不知者も無説なれば此に不説又是より不破が城下に到る旨趣より密に元老大星の内意を受けて鎌倉へ下る事又籠早川にて細を救ひ遣したる娘に再會して仇討の便宜を得る奇譚等總て此四編に説列したるは悉く五篇に出たり

第二十五回

收斂の臣有んよりは寧ろ盜臣有と古人の金言妙也哉俚俗の詞に言ふ時は親方思ひの主倒し夫儉約と名を付て吝く賤しき心から一文惜の百損とは鹽谷の老職矢居曳左衛門藤江股右衛門の兩人が時節も品も辨へず常々吝吝了簡から御馳走役の物入りに主君の御身の大事を思はず只金銀を大事に心得萬事吝吝か先に立ち後身を君に爲求は最惜む可き似而非儉約抑々鹽谷の滅亡は師直に非して矢居藤江の兩人が所爲に發り大變にて未然を察する大星迄越度の様に後人の批判を爲こそ悔しけれ諸も大星由良之助は此度主君の御役義を仰せ蒙り給ひと國元にて聞より早く國詰成新井新七郎と云者に思ふ所の内意を含め御用金三百兩を持って鎌倉へ遁しければ先安心して日を算へ最早お役も首尾能相濟君にも御安堵遊不恥目出度吉左右の有かいと待構たる其所へ領分の境の役人より火急の早打ある由を披露に及ぶ其間もなくお家の重役原郷右衛門少一後れて大星瀬左衛門駕の廻りは數名の人足大地を蹴立て沙汰「エイサア」く「エイサア」く息を喘せ聲も霞むを只大勢の勢ひにて路は急げと乗物を不擔は肩に覺の人々足を揃城門へ飛が如くに走せて行町家へ所用に出たる家中は平生不成と心に周章何れも用事を捨置て我もくも城中へ走入る有欠行歩其縁繼へ知らせて行風情も被察て周章然れば城内城下とも誰言ふと無大勢有各自用心有よ云を人々聞傳へ不有嘘を吐者有は今にも職が始る様に周章人も少からず上を下へと混雜し易き心は無程此時大星由良之助は第一番に城中へ馬を飛ばせて走り入り評定の准催を調へ諸士の出仕を待請て今到着の原大星を介抱閉閉ならざりけるが追々出仕の諸家中へ主君判官御切腹の様子を披露有ければ上下一同顔色變り暫く言葉を出す者無呆れて各々忙然たり忠義一途の若刀野原は齒齧を爲て進み出「君蒙耻辱



時は臣死すと故人の教へは合此とき「御主若御切腹と有故我々必死の覺期の外別の思接も無  
他城を枕に潔能、耐死致が拙者共の心底元老宜敷き差圖をト云ひ出すこそ建氣敷由良之助  
十は心の中に速くも極むる國家の後日何卒亡君の遠志を免やせん角やと上中下其謀略の善惡を  
胸の中に考へながら差當りたる若殿原の血氣を深く取鎖め又相敵なる師直の襟子を札すが  
肝要ならんと云に各々尤も其詞に従へば大星は一座を見渡(由良)イヤナニ新井安右衛門  
原文右衛門(二人)ハ、(由良)御太義乍只今より一刻も早く鎌倉に走下り高野氏の落着を聞届  
直様取つて返されよ是下等二人の注進次第諸士の覺悟を相定めん今日よりして老分の面々は  
御殿に詰切り物頭の衆は役所々々を相守つて再度の御沙汰を相待れよ又御家中は一同に武具  
の用意を油斷有先今日は一同退出被致イト云ひ渡されて一同に宿所々々に歸り一か是より  
追々の注進に師直殿は何事無延養生の仰を蒙り判官公には御切腹の翌日直に鎌倉の三屋敷を  
召被上諸家中散々破羅に途方を失ひ浪人と相成果趣きを今は儘に聞よりも齒を嚙一家中扱  
は我々が運命の盡る所今更未練の恐を取て世上の人の物笑ひ臆病者と云はるる潔能討死し  
て戸を當城に晒共忠臣の名を末世に残し鹽谷のお家は絶る迄君々爲は臣も亦道辨へて終りを  
遂んと云はれて實て御恩に報ひ御報公の爲終せんと互に心の合した同士は鐵物具肩に詰所々々  
に馳集れば城下住居の家々は固より在り所々に住居の役人鹽濱役所の人々まで後日は免も有  
一旦は勇氣の立て待氣氣籠城可爲と覺ひ込で前後を争ひ難引提げ籠を背負ひ城中へ我不劣馳  
入るは最目驚きこと共なり

第二十六回

正鹽谷家の城中には時代形勢勢々が思々の支度にて互に心世合有は兼々同氣の忠臣は誰に

遠慮も有はこと月矢の甲意越差物今にも事のある様に騒ぐも有は兼々寄合で口耳き諱し私  
欲を働く不忠も有物頭は逃仕度する者あれば薩臣は必死を種一豪傑あり然り重徳の面々は先  
堀門の下知を隠し云付出入の者は油斷せず又城下或ひは在り住居爲諸家中の面々が走集る  
看對を記す役人門外に在て名前を調入城帳へ名を付立て居る所へ追々来る家中の外に走り集  
る者も不少其中にて兼て覺悟を如爲く用意して来る者三人有其人々には○岡野治太夫○井關  
徳兵衛○大岡林太夫の三人は鹽谷判官の勳氣を請渡入りたる者也一が武具の心掛頼母一は  
城主の沙汰を聞よりも籠城の中に加はらんと鹽谷の城門の際に來り姓名を名告て入道と著到  
候へ告れと豫て大星の命令あれば一旦涙入せし者も容易く城へ入を許さず再三再四謝絶れば  
固より渠等三人とも思ひ極め其面色容易立歸る体無は是非無大星へ斯と告げ一に由良之助  
が差圖として腹心の侍ひ一人門前に立出挨拶して入城の事は固く斯り義心の程感賞する驗也  
とて三人の者へ金子と衣類を與へ住所を書留め後日に内意の趣きを通じ申事も有が先まづ今  
日は歸る可しと理を盡して言明ければ渠等三人涙を流し厚く大星の好意を謝して力無にぞ歸  
り行く此に又鎌倉の三屋敷に在り家中は浪人として身の落着を免や角と接し頼ふ其中にも忠義  
一途の人々の妻子を所々へ預け置置物具携へてお國の城こそ死所と走登たる忠臣義士同一  
時刻に参着し城門に近付ば家中と雖も初の内入顔見知らねば相互に粗相の事も有んかと門番  
所にては油斷せず一人一人を改めて重役へ順達する故時刻移て相おれば城下には町人百姓追々  
に走り集御用も有は承はる可被仰付下されよと村長里の長杯と帶刀のゆるし受たるは美々一  
十六い  
く出立武具を携へ勇ましげに組々を立て抑たり此時最々貴しげなる衣服を着て紺糸の鎖の  
と下糸の解破て古ひたるを肩に引懸馳來り入城せんと云込其着到帳へ容易に記す氣色も有



はこそ鼻の先にて會釋その見苦しきを嘲笑ふ聲も自然と聞えつ、又嘲口耳くも聞えよか一の  
影思ひにくに口善悪なく懸る聲は聞ゆれと耳にも不爲涙人は門際より少一隔一小高き所  
十に度打懸始く扣へ居り一若着順に城内へ這る姿を羨ましく見送る心は奈何ありけん見すば  
二ちりけに在ける所へ城内から立出る立派の侍小野寺十内はるかに城下を見下して(十内)唯今  
變へ参られ一中に不敵勝右衛門殿は不參哉元老大星は先刻より待兼られたり不敵氏は参られ  
口かト云へは着到場の役人も不敵勝右衛門不敵氏と叫ぶる聲城下に響き人々四方を見渡して  
待兼られて呼入らるゝ勇士は何れに居るやらんと互に見廻す其折しも彼敵鬼と訪られたる漢  
人は欣然として立上り城門へ近付ば小野寺は會釋して(十内)是はく勝右衛門殿大星氏の所  
存不違此度の犬變を聞れて外事に不致す早速の参着は兼々のお心に適のとに存じ升イヤサ御  
同道申さふと言れて不敵は肩身も廣く笑ひ誇り一人々を見送り乍ら城内へ伴なはれつ、行程  
に始め笑ひ一人々も探は先年たぬし切にて身を離せし播磨第一の荒者不敵勝右衛門にて在け  
るかさ皆口々に噂せり斯て大星は勝右衛門を聞三日城内へ止め置内との心底定まり後金  
字を與へ痛に内意を示し合せ先達て鎌倉の地へ下せしとぞ斯て又城中には籠城の覺期をなさ  
んと家中は人々廣間へ集まり彼是へう蹟を爲中に日比は武勇の心懸第一也と賞せられて向島  
及右衛門ハ如何せしや昨日我家へ歸りしより少しも影を不見ば朋輩の者深く怪み方一卑怯の  
舉動あらば不忠者の見示ゆに斬捨呉んと言合せ續て同家へ踏込見れば何やら周章て家内中を  
引散し實に疑難でもせし者かを疑ひ乍居間へ散入四方を見廻すは鐘を天井より鈎下置き早着  
め用意も爲てあれば腫病もとはは右まじと精業せし其所へ向島は然々漢方その他城外に取  
立ありし運上の海軍又は田原など兵旗の羊宮になるへき物車の數も十餘車督時之間に潮へて

練中へ引込み来るは人の心の付不用事口にて何共出さねと必死の覺醒勇士の動き此一事に  
ても驚々心の底はあもれけり

第二十七回

古人の云る事有婦人は其身を受する人の爲に身を註ひ武士は己を憐む者の爲に死すと宜也か  
な壇谷判官高貞は君臣の禮義正しく殊に慈愛の心厚く實情深き性なりければ遺を守る家臣老  
黨其君恩に報ん爲め仇を復して深よく死に就く者四十余人是れを金鉄の忠臣義士其列傳は世  
の中の人既に皆知る所にして今又謂んもこと經たれと片岡傳五右衛門孝房の一條は世に現れ  
ざる其傳有愛も所は鎌倉に家居間原を町續少し離て巳午の方身を忍ふには屈竟と思ひ月池の  
龍法洲に四隣は遠き借家住主從二人の涙人有頃しも秋の末つ方●の梢の紅葉して降る日は  
肌も夏寒く晴る日ハ空青と海面遙に帆帆片帆出松入松絶間なき眺望にあかぬ上總折浦兩雁  
の一隊に古柳最懐しく流石に人情捨難ければつ子の子の事をや思らん様先近く坐を占て主の  
片岡傳五右衛門春の末より眼の病ひ大望有身は心も急れ氣を紅絹の藥紅の色は變らぬ同盟  
の約に洩じと全快を祈る藥師に御夢想の藥の驗も不運一個一ける朝夕に過越方と行末の事  
を案して居る折しも勝手元より下部の元勳(元)且那樣お藥を漸々と煎じ升た柄石上りま一段  
十日の短く成升ので大まに纏く成ました格子町迄は余程御在升ナア(片)イヤ御苦勞く今日  
は大きに目の霞のが快方な最う全快に間も有まい(元)ヤレく夫はマア有難い事で御在升成  
程元辰様は余程御功者で御在升ナア夫は左様とヨウ日が暮升りうな秋の日は少一の間も油  
が成まきぬトレ行燈の支度でも致せうと言ひ乍勝手の方へ立て行西へ入日に海原も水色黒く  
物淋しき浦曲すまの汐風も身に浸々と哀れげ也抑々此片岡は家藏員なんど、而三人多くの

三十六



人々に先達で早く下りし事なれば火急の支度に向も彼も不足儀にて鎌倉に假住居すぞ不自由  
 今國難の其所に殘せし片岡が下部助尋ね来て傳五右衛門の浪宅の力と成て暮させける  
 斯る所へ遷々と國に残せし妻と子が夫の跡を慕ひつゝ漸々尋ね来りしが爰に一ツの不思議あり  
 今度内義が召連し元助と云は是より先已に此家に在けるに今又同人が来りしは最も異事  
 なれと互に久々相見たる其嬉さに打忘れ初程は心も付ず稚兒遊て打通り夫の顔を見よとも  
 思はず涙だ潸然と(女)「ア、貴公はお眼が未だそんなにお悪う御在升か最前元辰様のお眼  
 ではお快方と承はりましたが子エ(片)「イヤなる程先達から見れば最く大丈夫に成の(女)  
 タ、然りて御在升か下手を支て一さて其後は御機嫌を伺ひませす定む懐かしく存升無ナア  
 御不自由で被爲入ましたるゆゑに唯人が朝夕の御飯の配膳を致して進升か(片)「イヤ食事其外の  
 用向は元助が申さくしく働ひて呉るわら夫には少くも差支無(女)「ア、元助とお呼びませ  
 ぬますのは只今供に連て参りましたお馴染の元助と同じ名の男をお假被成ましたので御在升  
 か(片)「イヤ失張國元で使た元助じやあ少く考へ(片)「ホン、元助ハ何れ致たか元助「ヤ  
 呼べば二階より燈方を提て梯子を下る元助が(元)「ハ、只今燈の仕度を致して居りました  
 「言ひ乍附本に火を燈し燈方に移して持来り片岡の内義お佐代を見て(元)「ア、お國の御新造  
 様で御坐升か是は此は能マアお下りさいました最り、此方でも旦那様がお眼の悪いので  
 實に御難儀を被爲ましたヤ、嫌いや是病は私も大きに心強く成ました、外言中お佐代が  
 伴ひし子供二人は傳五右衛門が右と左りの膝の側へ擁付つゝ父の顔を熱くと打眺め(子)「お  
 眼が痛ふ御座升か(子)「親様疾氣悪ひかへ拙子がお背中を敲ひて進まらやうかへト問  
 はれて父は驚きと又驚きと肩を震りて見へぬ目を塵池を寄つゝ二人の子供の背に手拍子の

花無恥と秋の野面を見るは附古猶思ふ戀愛は只戀ひさが増る故親子四人が泣くのみにて暫く  
 詞も途絶しが只其中にも元助が二人に成り興味は呆るゝ迄に不思議也けり

第二十八回

古より形容兩體に成を離れ病と名付尤も多くは非なる奇病の由を云傳ふれ其其は只物の本に書  
 殘して存のみ未だ眼前に見しと云事を聞かず然るに今此元助は一身分體二人となりて互ひに  
 咎むる体も無家内に居る元助は格子町に諸用有連何氣無出で行は今来りし元助は勝手元にて  
 夜食の調繕一人世話せし勤き居片岡夫婦は久々に問つ問はれつ果し無談しに移りて元助の  
 怪しき体を忘れし如く只子供が道中にて二人一緒に抱き合はせし難儀の實況を物語れば亦片岡も  
 眼病にて種々難儀せし事を語りて聞つ諸供は辛苦の程を察し挨拶彼是慰め懐られ涙だに  
 憂思ひ胸撫摩る計なり此時元助は夜食の膳を持ち出(元)「ヤ、御座座ましたらア  
 何にも召し被成物はなげなア御膳を召上つて成下まると是より夜食を調 爲 乍道中  
 の様子を問慰め國元の咄し杯を言出して過にし頃の物語城中城下の誰彼が斯る事の有し杯  
 を言毎事に一照程も胡亂の旨趣非何様氣を休て容形を見ても久しく馴染の元助を少しも  
 不違疑ふ可休ハ聊無りけり斯て其夜は主従五人寝物語に小宵更る迄果し非ず問ひ問れ二人  
 の子供ハ珍らしき父の左右に添寝して夜寒の風も厭はさ心快に眠むりを見へ板て手にて  
 撫 摩 夫の眼病見る妻は其の不自由を察しつゝいと胸さへ痛る可成早元助も勝手の方にて  
 眠り入りたる息操四邊も静に之を枕頭成旅荷物より大星の手紙を出して小聲に此を讀  
 せ懐中の胴篋を解て金子を取出し片岡の手紙に渡(女)共三十兩御座升方は大星様から手書  
 して被讀ました外は餘の賤用は爲と敬仰まりて十兩下されましたが儉約を致した成子供の遺



六十六

着の入用と逗留の旅費の費で四圓の余も遣ひまゝに片ヲ、然うで有とも何して子供たど  
言ふても二人の入用中々容易いとは無併御家老から三十金とは有難い事だ(女)オエ夫は  
ア當座の入用にと被仰まゝた又當座には小野寺様か向島様かお下り被成升故其節には鎌倉方  
の連中へ手當を遣はさると申す事で御在升と言ひつゝ、又も諸雜具と不用の品を賣拂ひ下三十  
八兩の其他に五兩の金子を手渡し五兩の方は其以前庄屋太郎作へ貸附あり十數十箇の内の返  
價にて箇様な時も粗略にせず彼が飽まで實意を盡す其の深切を物語れば(片)兼々實明を男と  
は言乍ら實に正直な事だ夫はとうと元助が二人に成たのハ何様した事だ頼と合點が不行て  
(女)ホソニマア氣味の悪い事て御座升ね(片)國元から其方の供をして來た元助が紛者か  
疑つても奉公の勤方道中の骨折少しも私の丁儀無實意を尽して長の旅を女子供を大切に送つ  
來た機子と思へば中々悪く怪しむ程で無(女)サア夫故に猶の事心掛りては有不候哉貴君か  
代地へお下りの御跡を追て参つたと云元助も御不自由の中を心配して高ひ藥の都合迄苦勞し  
開へたと被仰お咄しの事を始として思とも疑はしつゝ疵を付る事の無あの風俗何様した事  
御座升かと夫婦は挨拶し煩ひ乍ら成り成り頃心勞れて寝入ける  
因に云ふ義士仇討の後其子孫は遠き島が根へ流さるゝに及びて片岡の子供は十二才と九才  
なれば十五才迄其母に預けられしとを其以前より里長の太郎作は鎌倉へ下り片岡に尋ね逢  
實意を盡し夜討の時門前迄供をせしが猶後々迄も信切の心掛其外太郎作が鎌倉へ出  
府に付て鹽谷の城下花岳寺より同道爲者奇談等最多一必竟太郎作が如き正直なる百姓有も  
別當の仁心且大星の政事能敷か故可成片岡夫婦の縁物語は用無愚痴に似たれ其後の咄の結  
せれば全本に至ると心ゆく讀せ給ふべし元助の事は第六篇に候しつゝ

第二十九回

實の實事を書殘されし書は言ふも更だ値の難れ書文古反も年經爲は想事物ぞか一然れば忠臣  
孝子の氣の跡は拙き手に取らぬたりとも餘く遠慮事なるを近頃看たる爲一本の中に「蜀山人  
聞書文庫」か題覽せし書書なりとかおはゆ一大星か復讐の存念四十七人を使ふ事手足の如し  
赤城の臣三百余人の中道藤小山の如は阿比志臣に似たりと雖も復讐に違の意無者成を知つて  
其實を告す下賤なれ其寺岡野忠誠を察して共に大事を計るは明智の至と云可然らば其主君判  
官の短慮にして事の不成を知らぬ事は有まじ又師直の貪慾を不知は不明なり鎌倉の家老矢居  
藤江か魯鈍者きに依て事に不堪も可知是を不知は不明なり尙くも其氣質を不知れば其身は  
輪を守りて外に出る事能はず其使手足の如に使ひたる原か蘆田の如き才智の者を密かに鎌倉  
へ下らしめ金銀財帛と持せて如古川木藏の如方便を行は、高直殊不成家斷絶には不至大星は  
道に意無徒らに坐頭して偶然たるは愚に似り事破れて後千辛万苦の心を碎ひて復讐を計る  
は其身の思義千歳に實せられて判官の汚名彌々不朽が如と論じたり  
云にも足らぬ輪乍ら殘口の辨を好む者は右の評を是也と看か南朝に新田楠の名將有て諸愚  
の足利を順事不能動に孔明有て立憲天下を不一統大星の才智忠臣古今に無類也其由緒正し  
く仁心深き高直の家只一時に亡ぶる言大出變成を量大星氏に難断附て是をへうす否や又  
其故を以師直の汚名後世に傳へ其説その談歴夜を差別事無天下の人口に語り續て休み無美  
談成を一曲附て誇る人は他に異才皆あり氣に思はする所爲なるが愛にばらく義士の眞跡  
或ひは書狀の寫を出して本文の助せり

六十六

○義士對話に曰く高直山右衛門は兼て存生の内に位牌を飾らへて鎌倉の長福寺に置きける由



○黒塗りに金粉を以て戒名を記す一日付焼しとて二月四日は妙が徳白なりとて

先立一人もありけんけふの目を つひに旅路の思ひ出して

○茅野和助常成は作州東北條郡川邊村の人也和助の兄を善助と呼び和助の弟と加太夫善次郎

と成長の後に三郎常成と號し津山侯の官醫にて上手の名を得たりと言ひ傳ふ

○潮田政之丞は播州加茂郡北條村に縁者有と同國加古川の本陣中陸奥右衛門に頼みの書狀有

武夫の道とばかりを一筋に思ひ立ぬる死出のやまみち

○早水藤左衛門は乙川家にあり早水助兵衛の縁者なり彼助兵衛は後浪人して熊本古町光明

寺へ引取り居られしが東の沙汰を聞て藤左衛門を尋ね浪人の便と計金子杯を贈り好みを盡せ

一とそ(光明寺は助兵衛の縁者なり)とそ(水藤左衛門か其光明寺へ送りし書中に

池水火風空の内より出一身のたびちへ歸る本の仕家に

風間喜兵衛光延は垣本保の藩中よりける中堂又助と云人縁者也ければ辭世を送りしとそ

草枕むすぶかりの事とめてと世にかへる春の夜

重次郎

風間新八の死骸は小室氏へ貸ひて山ひけるが喜兵衛の妹伊津女と云は古今稱なる才女なり

と賢にも然ありしと被察て其伊津女の筆の跡文章も最可愛は茲に寫し好古の人の慰とせり

たもちねの眼のわかれにかさねて遺書一かりしは元禄十六年二月の初七日の御志を嗣一人

の遺にて其名を遺し給ふこそ武士の本體ならんと思ひ慰めて

○伊津女一日二日ありて或人の許より

をけくさよ外へはゆかむ亡國の空きからばさもあらばあれ

御預り在りみたちの御沙汰杯有けるが新六光風の戒名を刃摸唯劔と誌人々と同じ所に卒

都娶を立せ給ふ事の有難き事に思参り一隔生十年十七日は御事有て詣す二十三日今日は果



の日なれば知るも知らぬも貴賤群衆影一速くも過る月日かなと光陰のうつるも最悲く過期方を思は夢幻とも辨(難)

夢の世に夢を見るころかをりけれありまほろや見へりおもかげ  
逢見人々は墓所に迎は其情も移心なれども刀横唯刃は見ぬ事なれば夢に見るさへ其情不確何時長人再妻へ下りなんと思ひ夢が甲斐も無

見ぬ人を見るぞはかき苦の下それぞとばかり飾  
逢ふ事は何斬りけん早振神さへ今はうらめしの世

四十余人の人々の法名の上に刃といふ字をすへて下に刃と置給ひしは何れも刃を拂ひ失賜

此等は猶長けられ略りて不和又義士の諸書に籍せり又茲に一奇説有此事諸君の義士傳へ記さす尤も實録

○延享の年(今より)はあはれ九十年ほどいせん也(隆泉寺町(里俗に大あん寺まへといふ)本

立山長國寺と云日蓮宗の時有其地内門の西の方に寮有て賢了と云僧の住居しが此僧は立林唯

七の甥也又其所より程遠不指家に六十余歳の尼の殿からさるが住居て折々此賢了の庵へ看

る事有基ん立林唯七の妻にして賢了の節に一大事の動揺の機を動めり(才女遺書)

谷七郎の町小路何所も物有ははりの木芽も眠ると聲に云ひ成はせし丑滿比月は晴ても降積し

雪の較道の頃白に光輝有際隙よりは却て人怖しく稀にも往來の人影無犬さへ不吠ぞ淋しけれ

愛化病野郎直は寒氣に冷て小水近く夜更て寝所へ入りしかと幾度と無雪露の傍女中に介抱せ

れて通ひ北の世の吐刺を思ふ頃一人の女中に伴ははれ縁頼傳ひて側に行き雨戸を明させ手を

使ひ空を見上て不み幸(高)老母の化世に響たる冬の月影物凌心くこ有けれど此雪中の月の  
氣色は霜と風雜の吹めてハ無か(女中)御意の通りで御座升昔から貴美致も仲秋の月影も  
是時成淨世の縁令骨の空が暮せらば一入の景色又御座升(女中)夜風が帯身に當りは不致候  
か(女中)名月の疎明寒くも無卜宵の酒氣かな不醒や元來著重身に纏寝間著の白無垢不寐  
心は騒音の癖成か庭の松が枝木々の花實に月雪の三景を一時に眺る樂しみと暫時縁類に端居  
の折しも付添ふ女中が誤てお傍に有銅湯次の籠を手に取縁類より手水鉢の下へ取落せり  
たる右に打當り縁に依て(女中)銅の音を合圖(如)せて垣の陰より走り出縁傍へ如翻と飛  
上る良馬出立の一人の曲者忽地刀を抜より早く師直目掛けて揮て垣は師直は驚天し立上らんと  
爲所を二人の本中は左右より飛懸て師直を引倒し其縁縁類へ押伏たせ

第三十回

再説師直は思ひ懸無無法に出合驚き周章身を振り拂ひ退に付添一侍女二人が左右より押  
懸て縁類に組敷つ、彼曲者は差圖おれば忍びの侍は水の如き刀を持って師直の喉に突懸け上  
女の掌中を除る暇も非は其儘に師直の首をさげに掛るを刎除んとあせる故二人の女は一生懸  
命の力を手先に入れ乍(女)兎ても退れぬ御尋常にお首を延て御最期を被成ませ(女)サア此儘  
にお首を早く私の手をも此儘で差通すたが能ひはひア(師直)主殺しの女ども出合くと言  
聲を立てさせじとぞ争ふ大變忍びの者は是非に及不女の手先其に師直を貫き乍(女)鹽谷の頭  
入推参よて主君の敵を討申す覺期被成日尚野氏ト云ひつ、忽ち首斷切り呼子の笛を吹鳴せば  
亦もや木陰の暗かりより顯はれ出たる黒装束互に頷口耳きて師直の首を服紗に包み庭の雪間  
へ仕懸る狼烟音は無れと中天へ月を翳で立登れば兼ての相圖か西南に當りて打出寄せ太鼓



雪の夜風に誘引て眺めるはしに恐びの者は最早く家敷の西の用心堀に懸て上る刎橋を内より外へ懸渡り各々此所より走り出れば二人の女を介抱して同く續ひて出たりは寺岡平右衛門也と云

如斯なる時は世に書傳へし悪きとは世に相違の事にして又偏屈者の批判も有んが撰者元來此辨有夫は本傳滿尾の難に至りて物論に託す者也

此時師直を押へて其身の手庇と請作首を取らせしは則ち立林只七の妻にして兼々義士と内通し今宵の仕儀に及し也夫より後に尼となりて隱泉寺町に住居甥の法師賢了を便りになすつ、世を過し四十余人の追善を專一と心懸しと暗約この尼の外に五人程の女子を高野の奥へ入置し事と唯七の妻諸共ニ剛直を打せし女の傳は次々の巻に記し出せり日唯七の娘賢了にも夜討の時に臨みて小傳在道も又後の巻に著す可し

變に一奇事の外傳有ゆ々廣世家滅亡の際に臨んで其家中難儀をらざるもの連は一人も非ざる中にしも別て其れに悲しみの難儀をせし者有し其いふ所は鎌倉の市の通り清川町とか云町の裏家に住む女仕儀は甘城を三つ四つ越ても島田を渡り廣形容の美麗ければ未中々に甘才共不成儀に見ゆれ共今年五才の小兒も在て朝夕苦勞に日を送れば自然と心の沈入りて只其子耳を大朝に大事育る不自由も夫無身に食客の人に等しき昨日今日伯父とは誰その實は他人也けを羅者の強八と云が同居して此種儀に母子の者を養ふを思に懸少一の衣るひ手道具迄皆持出して遊ひ捨て置し詰たる其上にて五兩の金が明日までに若期はすば我身をば人の妾にする事云々無禮難題をば云放ち今しも我家を出行し歸る民は口惜涙咽入つ、位儼れ正体も無款き居る折柄男の兒(兼)母人さん先刻の胎産をば與れ敵討をして護るのだオとヨウ早くしてお

果れヨリ此身小書我の五郎だもヨウ素の金銀か左邊からヨウ(たみ)今出て上る區ね露水の外へ出るも後危ヨ空地の所てお遊び醫者をするも行なひ(兼)怪我を爲るとも屋敷の娘さんが歸つて叱るわ(ト)いふ所(三四)人の子供の體(△○×)兼水(ト)早くお出ヨウモウ芝居を始るのだから胎産を以てお出なせといふ聲聞て母の身はせんべいを十五六まいかぞへて持出し兼茶を子供に遣も子を思ふ親の心ぞか

第三十二回

再訪を民は其翌日極月中の五日の朝寝覺も驚き雪の眞身にみく、と思ひ入浮世の外の里もがを同じ世界に交は兒を育るにも大並の准ひは流石捨置れ待た人ハ沙汰も無待ぬ月日の脚早く近付て春の儲さへ四邊近所は賑はへど此身は此兒に正居の時着も替せる事難成今にも風八が歸りなば昨日のさるく運られて如何を憂目を見やうかと目にもつ涙滴く、と物に落して壁元へ立て朝けの煙さへ細く、おらす火打箱濡がらなるまび住居いと寒れなる母子の体垣る中にも兼吉は元氣好此身は老妾さんの所へ往ヨウト制起れば(民)ア、サ、寒といふのにノウト言ひつ、察問着の其上に替せて合する前後はつれ、糸の付紐も廻り合せが懸ければ壁に入らぬ行支も短かき不願者其體にて壁に表へ臨行しが暫らく在て何事やらん路末の外へ人聲高く裏より何事か聲喧く欠出し性を耳には聞せ心の風度出て見る氣も無し所へ相長屋の内義の壁にて(内義)お民さん、大變な事が出来たわら早く來なヨ遅い間合ハね、ト云れとお民は何事かと障子を明る出合頭又も走來る隣の左次兵衛(左)ヨウ、くお民さんお前の所の兼さんを今表を通る大勢の侍が血の付た鎧と一つに荷て行て仕まつたせ追走て行て馳言進て來て遊度が五六十人の黒駒隊が鎧長月の振身で行のだから怖くつて將り付れねト云はれ











れ鎌倉に來り醫者と成屋敷替地面の買婚嫁子嫁入の媒人して世を渡れども表は醫者の事なれば古主判官の敵師直に取入さま〜に媚諂師直が権威にて出入屋敷多く此命澤町に家作して威勢を振ふ身とは成れり斯て青山の町人は蝶庵が貧乏なるを憐て承知の上なるにや翌病人を連れて來ると熱々渠を吞込ませ其次日に本町にて一番大きい藥種屋へ趣々蝶庵の偽手紙を差出して連立ち蝶庵の家に行れば彼町人は玄關にて眞珠を請とり其價與へ至りしが姑く出て出來り(町人)今折悪御用多て少〜手間取れませ愛に扣てござれ今に沙汰が有うマア〜ぶくと自分も火鉢の傍に座しけるが頓て彼町人は手水場へ入たり此日は折悪〜く藥取病人とも多く入り替り立替り蝶庵の前に出藥を貰ひ漸有て彼青山の町人が同道せし若者の番に當りければ侍が案内して聯合場へ通しける(蝶)お前は本町の藥種屋ひ〜こや久兵衛殿の若衆か(△)左様でござり升(蝶)夫をらすうりト愛へ來給へ(脈林を見て進ませせうト云ば(若)〜私に病人ではござりませぬ只守差上ま〜た眞珠がお氣に入りま〜たなら代金がいたださ度存升といへば蝶庵うちらなづき(蝶)承知く〜それは承知だそれが病症だ角も愛へ(若)お承知せら能敷ござりますこれに扣〜居ませう(蝶)ハテサア困つた者だ何れにも藥を進ぜるには容体を見ねばならぬト玄關の方へ向ひ小隔本〜ト取次の侍を呼び(蝶)此本町の若衆の同道した青山の仁は何様した早く愛へ來さ〜といはぬか(小)〜只今手水場から出られま〜て表へ行れま〜た(蝶)ハテ困つたものだ(若)私も遠方でござります〜眞珠代を願ます(蝶)ハテ扱扱もない道上的症といふものは開羅がないに困る氣違ひ程取扱ひにくい者は無〜いへば藥種屋の若者腹を立(若)氣違ひとは私のこととござりますか眞珠の代さ〜被下は氣違取扱ひには及不代金を下さりま〜(蝶)貴さまは氣の違ひ積でも眞珠の代を取ふと

云わ病で夫が逆上た(若)い、ぬあなだが逆上被成たのでござり升高金の品を取被成て其代金を下されと申せば夫が病症だ〜と金子もお渡しなされず欲如何思召てござりませぬお氣に入ませずば眞珠をお返被下ませ時刻が遅くなりま〜ては親方の手前も能〜くござりませぬト是より大ひに云募り遂に那の町人に詐偽れたる事の分りが藥種屋の方にては蝶庵の手紙もあれば是非公廳に訴出んと嚴〜く掛合止ざるにぞ從來蝶庵は躬に醫惡あれば大に迷惑して内分の扱ひと見もせぬ眞珠の價を降しけれども此事自然と世の風聞と也けるとぞ却説片岡傳五右衛門は説法洲の佗住居にて眼病を煩ひ既に療治も不稱を原元辰(郷右衛門の變名也)の力へ下部元助多く得難き眞珠を持ゆきて療治を願ければ漸に病全快せんとす元助は傳五右衛門病中國元より尋來り看病不忘眞珠を盡しに中途にて妻并に下部元助傳五右衛門方へ尋ね來りしければ家僕元助二個になり傳五右衛門の看病せし元助は一通の書面を讀してかき消如く失にけり其文のうつ〜省略左の如し

是迄假りに元助と姿を現し貴殿之看病致し候へども此度國元より家内の者元助を召連れ到着致被候に付最早貴殿の介抱も是迄と存候眼病も追々全快に相見候へ共此上加養專一の事に存候元辰方に眞珠澤山預け置候間心配なく服藥可被成候先達て中風聞有之



候 庵と申候者は野九太夫弟九十郎にて古主の恩義をも不顧敵地内通之者に候間通力を以て天を蒙らす者に候へども薬種屋久兵衛を變詐具珠多く賤奪貴服服業に相用候併盜泉之水之汚にも相成間敷間猶本望之時に臨み候は、乍蔭助力致遣し可申候

青山 助 田

傳五右衛門夫婦を始め下部元助も是を見て或は驚き或は憐み默然として暗を潰し扱は是まで元助も思は主君の別館たる稻荷明神の我々が眞意を憐み給ふ神慮の有難き事心魂に徹して勿體なくと數行の落涙止るへず是より後全快して事の顛末を主君の後室瑞泉院に告ぐかは其

神徳を尊み給ひける其後義士の面々本望を遂ぐかは猶神慮の驗不等同とて正一位元助稻荷大明神と今に彼地に崇め祠て里人の口碑に残りしとぞ元助稻荷の置手紙に某か云里正の家に今に傳へて在となん聞へし

第三十五回

今此章に記しは諸書の中より實事可成思ふ事を自筆の類ひを寫出たれば娘御方への心に稱讃にも有可なれど凡昔の物語は其世の体を深く考へ推量りてこり面白しと思ふ條下は有ゆべし但し作り物語りならねば心無讀給ふ人々にはいやならん夫兵衛に云人に靈有生涯善を守り死に臨んで屈せき正道順路なるを神靈と云生ある中に人を救ひ人を立仁義を守り死に臨みて道を勵魂魄残つて人を救就て神靈と云大星由良之助は祭りたらば一社の神靈ともなりぬべし六十余州誰か此人を尊とまざらん只疎漏に見過し給はで忠臣仁心の深きを思ひやりて其身の鑑となし給へ

馬の跡をうつす筆さへ耻かしく

狂 訓 亭

爰にうつし出せしは復仇の後に京都紫野大徳寺の瑞光院の使僧へ遣はしたる返書にて大星氏の自筆也

更に角に思ひははる、身の上に

一十八い 這は娘女達の見て 税類ひに有ねど凡義士の筆の跡は些に書殘せし反古迄も懐慕其時の事も思ひやる、所爲ならずや



花の雲空も名残になりにけり

大星貞雄

世の中は春の巨燧の心かな

同 良金

これも辭世にてありけるか

二百里や我園香ふ菊の酒

木村貞行

また蟻蜂録といふ書に

大星の辭世

水にうつる花は蕩くずに

浮かへて

匂ひばかりを

庭の梅が枝

今ははやことの葉草の

ちかりけり

何の爲とて

露むすぶらん

同書に一説あり義黨の爲には此書に寫出するも心好らぬ事なれど亦王君たる人の臣下に情なく非道なるは家國を亡く子孫の絶



る事演後に其例も不少 鹽谷家の滅亡も深き怨念の所爲也と云夫は大丈夫魂の人は嘲笑  
可事に似雖無實の罪なるとに情無死を遂なば怨念の残りて祟りを爲備敗者にはあらじ爰に鹽  
谷判官より三代以前の君の折時に不慮の誤りにて清直の家臣を非道の刑罰に行ひ玉一事有け  
り是より(義蜂録)〇こ、に鹽谷相目止の時代に最伴義なる家臣有て金奉行を勤めありけるが  
國時金藏に盜賊入りて千兩箱一ツ失たりまかば種々に雖陰謀一向に知れず是に依て金奉行  
の不念より發りし事也と嚴しく重役を以御咎め有たれば彼者の返答に拙者が預りし役義なれ  
ば則我等が盗人也と申ければ相目正大に怒り遂に冤罪と知ながら其返答の悪き爲め慘酷の刑  
に所せられける然れば其人終焉に臨み怒て當家を絶さんと言罵り死しはるが果せる哉其時よ  
り三十三年目に當りて同じ月日に鹽谷家は滅亡に及ひいと云  
遺は花岳寺の方丈の因果物語りせられいと義蜂録の説也  
けるにや騒敷も怖しき事なりけり  
武士の深き怨念は然もあり

第三十六回

今爰に説く物語りは判官在世の事をりしが本國より鎌倉へ在番の諸士の多かる中に森胡平太  
と云者有折しも彌生の上旬連四方の櫻も時知り顔に綻ひ初て春風の身は焰々と来る頃は人の  
心も自ら浮立つ中に特猶此程よりして長谷の觀音開帳とて群衆の參詣胡平太は國元より近  
い頃來し者にて鎌倉の繁花珍らしければ勤仕の際を見合はせて章履取一個を召進先つ觀音に參  
詣せん途中まで出掛しがふと同役へ申可置大切の用を思ひ出ければ矢立を取り出し鼻紙  
三に委細を認め供の男に是を渡し元來一道へと引返させ其身は一人歩行つ、長谷の地内に到り  
折しも年比四十斗にて米綿廣袖に五分月代一餅可有大男酒の機嫌か道幅も狭いと歩む千鳥



足夫を見るより片麻へ除けんと爲たる胡平太を田舎武士とや悔りけん態と先より行當り(大男)コ、日本坊めへ此廣い大道を明告じやアあるゆへ何て此身に突當りやアがつたト喧嘩十買はふに出かけられ胡平太も忽然とせしが素より温和の生質故(胡)イヤナニ態ト爲たてはな四一寒に互ひの出合頭行當つたは此身の粗相氣に障つたら許して呉りやれ(大男)ナニ粗相たど面白へ賊盜を爲ても鹿相とさへいやア事が済かい今突當つた時此身の懐中へ手を入れやりと爲たのを見て置たぞ其二腰は人威武士と見せ懸て汝は晝驚を働などいはれて胡平太面色變り己慮外と刀のつかに手を掛さたりしが否々箇様な無法者手に掛たり迎陰ない事を遺傳を堪ゆる圖を付込み開に開れぬ懸口雜言傍若無人に窘窮は堪忍、最う是迄と刀の鐔元寛て既に飯んどせし折しも物見高なる群集の中より「アレマア待つてといひ乍夥の人を推分おしわけ現はれ出たる一個の娘女胡平太の手に 緋(娘)お腹の立は御道理でございませ私がお詫を致升から何卒御了簡被成といふを強八開不取(強)誰だと思やア民だな汝が構つた事じやアねへ入らざる世話だ其所放せ(民)エ、マアお前も誠相な武士様になん事な事をいつて濟ものかエ(強)濟むも濟まねへもあるもんか此二本坊が突ッ懸柄出入を初て居る所を汝に邪魔アされて成ものか何ても盜賊に違へぬへ泥坊だ泥坊だト喚き立るを押沈め(民)アレマア伯父さんお前マア其様悪い心に何時おなりだ此方が御了簡深ければこそ濟様な物で那お刀がお前の自には懸ないのか(強)痴婦めへ竹鹿で人の體が折れるものかい何でも懸へ手を被入た譯を付ねへじやア了簡されね(民)アレモウお前も強情だねトい、乍髪に差たる後ろ差の簪をを被て(民)お前も然ういひ出ちやア只はお歸りであるまいが今茲には持合が無から是をどふとも能やうにして速く何處へ行にお呉」熱々と思つて見れば此出入言ひ謀つて見た處が

余物にも成そうも無品に依ては返兼ぬ那武士が顔色に口は立派に叩けとも心に五分の恐れを抱はお民が言葉を幸ひに能い退しはと思にぞ一本の簪でも取らぬは損と手に受つ、一寸と目方を引で見乍(強)さつぱりとわへ代物だが手前が余り氣を揉から此場は是で濟て遣ぞ命冥加の盜賊めとへらず口を利ながら人立の中を降りぬけ早も影を隠しけるお民は跡を見送乍胡平太の前に小腰を屈め(民)嘸貴公は憎い奴とお腹立てございませうに御了簡被成て下さの升て實に最難有ござお升お禮を申上たいにも爰は途中て人立も有私の店は此少し先でござい升柄鳥渡お諸ん被成下さいませトいひつ、わりなく仲ふにぞ胡平太も否み兼て後附つ立去ける

第三十七回

生の空の定めなく今まで春暖に晴渡りしも忽地降り出す村雨に開帳参り花見遊戯ひは辻段小屋懸商ひおのく濡じと押あいおし合ひ上を下なる長谷の境内其中店の中程なる何某寺の境内へ這入れは當世を遺長屋九尺二間の棟割に或は種物師女圍れ女前句の判者陰陽師茶店へ出る娘杯軒を並へて明暮も野暮を離れし付合は舌先で丸めて浮氣でこゑる浮た暮しが仕たり扇の印の付た筒持と損料蒲団が路次口へ這入らぬ日も無業枯得失假の浮世に宿を借りて世渡る有様は盧土か夢の五十年其邯鄲の夫ならて混雑長屋と渾名せし斯る中にも表面のみ程を合せて遊葉の濁りに染心も多かるべし此路次の入口から這れば右へ四五軒め門の印に梅本と書し障子の其内に何やら眞を嘶し聲(胡平太)扱頓だ事からして色々な世話に成寒に氣の毒申そうにも急に雨が降つて来て陸方が無のでござお升柄何卒御堪忍被成て下さいませし先刻は



叔父様がひよんなどを爲出して万一貴公が倒了簡なさらずば何様せうと思ひました(胡)イヤナニ全く悪氣でも有まいか酒が過てのとて有う併あ、云叔父を持ては何かに付て心配で有うな(民)ハイ有難ふござお升斯う申と何様か恥をお隠し申様でござお升が那人は私には血脈の叔父三じやアござおませんけれ共お爺さんが無死で柄段々不仕合が續いて陸方無私がこんな商賈をするに付て那人が色々世話をして呉ましたからツイ叔父さん〜と申たのを今では先から叔父顔を〜して無理を無しや何かをいひ升のに寔に困り升は是と知つたら初ッ柄あんな人の世話には成舞を其時分には母人も私も世間の様子は知りませず賢明に心切な人だと欺されて頼んだのが今じやに口惜うござお升世話を爲たく〜といひ升けれ共私の方から那人に出したお金も〜とではござおませんヨト放しく言いが心附(民)ホ、初てお目に懸つた貴公にこんなと迄お咄し申て嘸無端者だと思ひ召てござおませうね〜と顔赤らめて美附向を潮平太は程能受て(胡)イヤモツ然う云とは世間に儘有とてある扱色々なとて大にお世話に成た雨も小降に成た様子だから私は最うお暇に爲ませうといふをお民は引止め早くも支度を整へ酒と肴を持出せば潮平太は留置顔(胡)イヤ心ざ〜は厭ないが若い女中と差向て斯うして断りを爲て居るさ〜何とやら人の思はく殊に酒宴等致したと申すとが屈辱へでも聞へては斷無解だから平に是とお預け申そう(民)然う敬仰のに無理にとは申ませんが今に母人も歸つて来ます〜夫に私きやア少〜貴郎様にお聞申、度事がござお升から承くとは申ませんが今から最少出被成て下さいます〜と思ひ有氣に引留められ流石否共云難因り果てぞ居たりける

第三十八回

野から又もや降出す村雨車軸を流す斗なれば潮平太は今更に歸らんとするに歸りもやられず

殊にお民が何とやら開成事の有と言ふを開果ぬも心ならず其上些の酒肴も心を盡せ〜と懸念するを物堅くは云ふもの、書餅にさせんは有難にと思案を定めて座に落つき固より嗜酒なれど勤られる儘一二杯傾け乍ら話すうち早くもお民は潮平太を鹽谷の家中和知りかば何思ひけん思入れの萬籠の中より取り出せ〜羽二重の紋付と袋入の短刀を潮平太の前に差出〜(民)あッ此品を貴公万〜お見知はなさいけんか〜(胡)ハテな此小とでと云短刀迄皆鷹羽の御紋付是の何様して前内の不〜と問ひ返されお民は思はずはら〜と墮す涙を拭ひ〜(民)これに付ては長いお話お聞成て下さいます〜元來私のお爺父の鹽谷様の御家來て〜とは人にも知れた者武術の上の争ひ柄朋輩に痲症を負せ其儘御殿に成りまして本國を追ひ拂はれ所々方々と流浪する内今の母人と夫婦になり此鎌倉へ落付て子供を寄せての手習師匠思の外に繁昌して暮す内に私か生れ此様子で往つたら一株にも取付て能い知取附てどう〜と思つてお出の其内にお爺父が煩ひつき五年越のふらく病染も負も驗無私が丁度十四の年逆も治らぬと思つてか母人と私人とを枕元へ呼び寄せて他のとは少〜も云ず此小袖と短刀とは殿様から拜領の品此身の命があつたら士士の短をさり此二品をも隠らうと思ふて居たなれど斯病ひが重つては整の程をも不測息有内には望みも叶はぬ此弱が死だ後連も假令貧苦に逼らうと此二品は系圖共父共思つて肌見を放さず成らうとやら鹽谷家の身分の軽い仁にもせよ心ざまのよい人に其身を任せて未永此身の位牌を鹽谷家のお家へのこして呉るなら此身も歸參をしたも同然今云ふとを能く守り浮氣な色に迷はされ浮〜男に誘はれて親の名迄も汚すなど細々との御遺言夫か此世の名残にて其夜も去す果敢無別れ夫か心を勵まして其期に遣せ〜お言葉を決して無にはせまいぞと思つ〜暮す永の年月何様云御縁か存ませんか不思議に貴



公けし目に懸り最前からの御様子を見れば見る程お頼母一存て長々く過去咄し不便と思  
 下さい升ならお爺さんの存念をと云ひさして又涙くむ心を察して胡平太も侶に哀れと鼻  
 打かみ(湖)扱々驚き入た親公の心體遺言を受次て无にせまいとするお前の孝心男の身ても不  
 及事夫に就て私も又懸心當りなとがあるが若やお前の親公の名は里見十右衛門とは被仰ぬ  
 か(民)夫を何様してお前様(湖)ハテ其里見氏ならはお前から頼みが無共お世話をせねば  
 ならぬ義理サト云はれてお民は何故共仔細知らねども憑世しくいり立つて佛壇より親  
 の位牌を取り下し(民)是は確な證據でござお升ト云ふを胡平太受取つて位牌の表を讀下せば  
 法名仁徳即是居士俗名里見十右衛門(湖)ト此位牌を見る内は彌義理ある里見氏と斗り云つ  
 ては分舞か私の親は左内と云てお前の親公十右衛門様とは子供の時から竹馬の朋友それ故常  
 々私へお咄し幸はひ此度鎌倉へ在番に當りし故御當地は繁華にて諸國人の集り所心に掛て  
 尋たら回り逢瀬も可有と親の差圖に随つて夫とはな一人にも問ひ種々心を盡せしに思ひ  
 掛無今日此所でお前に逢つての物語り永々涙させらる、内二君に仕へず其上に拜願の二品迄  
 お前に讀つて細々と遺言されし心ば、此事左内が聞たから無満足にせよ、に親の左内も去年  
 の冬私の留守に本國で不死たとの知らせの文通親と親とは世を去て其子と其子が廻廻ふ是も  
 不思議の因縁と過來方を隣りあひ四ツの袖をぞ讀しける

第三十九回

置下胡平太は懐中より小判三兩取り出し鼻紙にさりと包んで(湖)扱々不思議な御縁でお目に  
 懸り年頃の本意を達て是程秋はし一事はございませぬ親共の言付には里見氏の行衛を尋ね今  
 に涙々してござるなら昔のよーみを忘れぬ精液編は合カして折を見合せ諸事の成様骨を折て

世話教せと申した言葉がござい升から十右衛門様は居られず共其娘のお前の事故及ばず乍ら  
 此末此御力も多かりし成せう就て是は余り少でお恥かしい譯だけれ共今日お目に懸るとは思ひ  
 掛無事だから持合せと言つても是は又近しい内寛々参つて母公さんにもお目に懸り緩々お  
 母子の身の落付をも御相談もいたさうと信實見ゆる胡平太の言語にお民は婿一さの身にこた  
 へて容を改め(民)今日はマア何様吉日でございませうねエふとお前様にお目に懸つたが御縁  
 となつて然う迄御信切に被仰て下さるとは是も大方信心する親音様の御利益かお父様の引合  
 せか私きやめ最うこんな婿一い事はございませぬ併こんなに大さうにお金なんぞ頂きまして  
 は寔にお氣の毒でござい升からはアマお返申す私の願ひはお金も何にも頂か無ても未永  
 くお見捨被成無てください升と夫が何よりか難有ふござい升(湖)イヤナニ親々が昔の所縁を  
 ぞんずれば中々粗略に致す存寄は決てないからお前の方でも議のものを彼是と言て呉んなさ  
 るが何分私に氣の毒を懸ればよつて平は是は納めてト遠慮するを無理に渡(湖)ナニト種々  
 のお話して師の私限が運をつたで先今日は暇に爲ませうからお母人さんがお歸らぬ成た  
 ら私が申した仔細を委細申しておくんさいお頼母に言置きて雨の止むを幸ひと頼て其日は  
 立去ける

斯て後胡平太は折々此家へ歩み運びお民の母にも對面を親の言葉を無にせしと様々に  
 心をのけ金銀も合カして母子の貧苦を救ふ程に月老の結び一縁一にや終に精交中と成後  
 は母にも打明て夫婦の縁合を爲程にお民は腹に一子を儲け名を兼松と號名つ、一年余も遠  
 る内免角して胡平太は早在番の年も満ち本國へ下るの時節となれば一旦歸國に及びしが親  
 子諸共公然と別取んと約を定め手當の金子を興へ置て其後本國へ立歸しに未だ此事を願ぬ



間に嘆谷家に騒動起り判官朝腹を聞よりも忠義無二の胡平太なれば頼て大屋に一味をい管討と心を定めし上は親妻子をも看返らじとある誓詞の言に深く愧て鎌倉に残したるお民親子が怨みんと思ひひも音信もせずお民はお家の滅亡を人の胸に聞よりも良夫の身の上氣遣はしく今日は便りの聞ゆるか翌日は音信の知る、かと心ならざる待内に母は敢果此世を去り悲しき月日を送るにぞ胡平太より悪まれたる金も大方遣ひたりしに強八が非義非道少一の物をも掻取られ爾々貧苦に暮りけり

○愛所の物辭りの第六篇に若はしたれを事の前使するにより看官疑ひ給はんが是等は例の筆されば云はても推し給ふへし胡平太お民が事のおさまりは是より下に綴り出せばよくく初めをてらし合せて前後の首尾を見給へ

いろは文庫の事

第四十回

借も森胡平太は亡者の仇を報せん爲大屋と侶俱に木國赤穂を立退いて京都六條の片邊に幽かせる家を借り求め姑く遺所に假住居して鎌倉の様子を探ふ程に由良之助は鎌倉より洛中へ入れ置る、上須美家の問者の爲に密謀を悟られじと態と身持を備弱になし種々遊興を盡す中に其頃歌舞妓の女形にて瀬川竹之丞と呼ばる、者を大屋深く寵愛して那が男色に心を酔し日夜に放埒彌増にぞ胡平太深く心を痛め那者さへ無は大屋が不行跡も少しは直らん其時諒めて木望と達する所存を出させん不便乍も仇討の妨したる彼若輩今宵も借木屋町の例の二階へ大屋が竹之丞を呼は必定往來の道は四條河原路りを俟伏せよ、夫ト疾刃合せて胡平太は其夜切に河原へ趣き今や遅しと待ち居る追々時刻も推移り涼み一人も散々に自己が家路に立歸れば夜店の灯りも皆引て蒲鉾小屋の灯火のみ縷に残る真夜中過息急駈來る四手駕を夫と見るより胡平太は間近く寄つて聲を掛駕の内はと問ひかくれば供に附添ふ送りの者が竹之丞と答ふるにぞ矢庭に刀を引抜て威に四五度振り廻せば潮昇共に打驚き駕を其儘打棄てヤレ人殺しく供の男も侶供に雲を霞と逃て行爲澄したりと胡平太は駕の塵を刎揚て塵へ説く竹之丞を駕より外へ引出し覺悟しやれと振り揚る刀の下に竹之丞は身を沈ませて飛びさり又切掛を右左りと刀を交す身のこなえ素より那は色子にて武藝を知るべき者ならねと習ひ覺へ一俳優の業に馴たる取り廻りに飛鳥のごとく駈廻り透を窺ひ胡平太が刀掛つ手に絶附(竹)アレマア待て下さりませ私に何の咎有てト急度見あける若輩の顔折しも出る月影に胡平太つくづく打鉢がめ(湖)ても麗はしい目元口元其艶色が其身の仇咎も怨みも無けれ武生で置ては主家へ不忠不便乍も手にする身の薄命と観念して成佛爲やれト言ひ乍塵み掛たる鏡とき尖先已に危



二方

うき其折しも忍頭巾に面を隠し始終の様子を彼方なる小影に立聞侍が夫を見るより遁み寄  
り持ッたる扇に湖平太が刃をばつと打落し狼狽遁竹之丞に速く逃よと手で知らずれば地獄  
で佛と那侍を伏拜みツ、竹之丞は後をも見ずして走り行湖平太は打留んと思ふ若童を取り逃  
し怒りに堪かね取り落せし刃を手速く拾らひあげ(湖)のれ曲者過さじと研てかゝるを侍は  
再び扇に受とめ(侍)懼り召敵な森氏と言はれて驚く湖平太か(湖)然言ふお聲は大星殿(侍)  
コレ止めて四邊を見廻し(大星)感入つたる貴殿の心底其赤心は知り乍諫めを用ひず種々  
に身を放埒に教せしは敵方の間者又浴中に竊み居る故最早時節に赴けば本意を遂るも今須臾  
某も遠からず鎌倉へと志せば貴殿は先へ那地へ下り原郷右衛門を始として一味の者と心を合  
せ敵の様子を窺はれよと言はれて欣ぶ湖平太も斯く迄に深き所存を知らずして感にも疑ひお  
を今更悔しく思ひける

第四十一回

運回は本編の第三十一回も兼松が夜討の引揚に出遇の義士の輩に掻きかかれ大高子葉  
の短冊と一包みの金を貰ひつゝか跡にて段々噂を聞は鹽谷家の浪人が高野の館へ射入て本意を  
遂たる引揚を借に様子を知れしかば借は長夫湖平太殿も其内に在せどなん敵を討て切腹す  
るは侍の帯ひと聞けば更々夫を歎きはせぬと息ある内に只一と目途て無残を告んもの兼松  
を供に引連れ駕籠にて圓覺寺へ至りつゝ夫湖平太を尋ねし所然る人へは云れ茲に望みを  
失ふて彌々我家へ歸しが思ふは夫の氣質忠義に洩る人ならぬに其事が若輩一と世に  
白人をばらばれしがと思ひ置て種々に脚を痛むる手にて便にて此事を聞かぬも其心の  
舌とと取角する間に其年も空しく暮て立回る春と一謂へと物思ふ我身は秋の心地して慰めか

三方

ねて日を送れば陸月も夢と早過し時に如月初四日(義士)の面々四家へ御預けの此日は去年世を  
去りしお民が母の一周期の命日に當るに且那寺の僧を招き心斗の回向を頼み日も暮ければ  
佛檀の燈明を備へつゝ香感する兼松を脚に寐かして只獨り過つる事杯思ひ出さずして居  
る折しもお民くと門口て呼ぶは借に長夫の聲と駭き乍手燭を灯し門の戸明て顔見合せ(民)  
マヤア貴公と云ツテ斗跡は涙にさし迫るを湖平太は何氣無與へ通つて四邊を見廻し(湖)又  
稚兒奴は最う難たを扱永々の此年月一度の音信も爲さんだに不實を此身を怨みもせずお老  
女の御介抱と此稚兒を育る世話中々大休ではなかつたらうそしてお母君さんは御丈夫か(民)  
ハイ母君アはと云ツた斗思はずリツと泣出せしが漸々に涙を拭ひ(民)ア母君は那所の佛檀  
の中に居り引るト云ひ掛て又むせ歸れば湖平太は驚き乍佛檀の側へ立寄り戒名と年月を讀下  
して眼をしば叩き(湖)夫ては母君さんは去年此年一かも今日か其當り日寔においとい事  
あつたノウ併一周忌の御命日に思はず此身か飯つて來たも矢張何かの因縁であらふ夫に就て  
も和女の心傍此身の方からは音信をせず母君さんは此お成行殊には例の強八か和女の弱みへ  
つけてんて無困らせた事であらう(民)ハイ母君アの亡死た後は叔父三か無理非道其上貴公  
のお身の上お屋敷の大變からは何様被成か出被成一度の音信も聞へ無い若もの事でもありは  
せぬかと安い心は爲まらんたに御機嫌のよいお顔を見て此を感し一事はございませんと斷  
し半へ兼松が眼をさまして起直り(兼)母ちゃんお乳給度(民)ヲ兼兒起き爲たか是か前のお  
爺ちゃんだから這所へ來てお辭儀をお爲行儀の悪い事を云ふとお叱りたコト母の言葉に兼松  
は血筋の縁か結し氣にわるびれもせず馳來るを湖平太は膝に抱上げ迫來る涙を笑ひに紛ら  
し見違へる程成長せし其嬉びを語るうち此方は子供の頭是なく彼の短冊を取出し自慢そうに



見するにぞ湖平太手に取つて短冊の表を見れば山を抜方も折て松の雪大高子と記しあるに  
 ぞ是は正しく大高源吾が討入の夜に鎧に付しを我にも見せし短冊とおもへば今更口惜く忠義  
 に二つは無れ哉大星殿の差圖を守り取殘されて期に合はぬは此身の不運と云生思へは無念と  
 わきらへる夫の心を知さればお民は何の氣も付す此短冊と一ト包の金子を貰ひし子細を語り  
 備容を改めて(民)私くは貴君が御機嫌よく御歸へり被所たのぶ嬉しさに心も付すに折ま  
 たが何様も私には合點が参りません貴君はマア今日迄何所にお在なさいました(湖)エナニ此  
 身がヲ、それノアノ何に居たのサ(民)何にては分解ません併たらはぬ女の身で此様なとを  
 申せしたら出過た口を利く奴だと定めてお腹も立ませうか亡死たお爺様が常々私へ申し升に  
 は和女も侍の女房になる氣なら忠孝が第一じや侍は二君に仕へす女は兩夫に見へすとは賢い  
 お方の被仰た事で假令良夫が主人の爲に命を落すとあらうと忠義故と諦めて他の男に身も  
 任せず生涯清く終るのが良人へ貞節主人へ忠義去すれば親へも孝行じやと幼稚時に聞きま  
 たのを今も忘れは致しません此間兼松が短冊を貰つて参つた時時谷家の浪人が敵を討て引揚  
 と人の胸に聞きましたら貴公も定めて其中と我と心で自慢して圓覺寺へ参つて聞ば然う云人は  
 無との答へ若夫共にと辻賣の形附を買ましても貴公のお名かごさぬませんから夫では大方本  
 國で御病死でも被成たか無御無念であつたらうと思ひ繼けて居りましたに今宵貴公か何氣無  
 お歸りなまつた其時には日比戀いしと思ひ込だ迷ひから御機嫌の能い顔を見て只嬉し  
 と思ひましたは私のたらはぬ故貴公に限つて御主人の御無念を余所に見る思し召はあるま  
 いと今日迄思て居りましたか是には何ぞ又他に探い子細でもあつたかと問ひかけられて湖平太  
 は胸にギツッリ機嫌を押當られし心地して須臾言葉も無けり

第四十二回

其下湖平太思ふ機嫌さ入たるお民の赤心人は性より育といへど其 誠に引替て貰しき中に生  
 立乍ら昔を忘れぬ那女か本性流石は里見の娘なれ其美烈さを見る柄は我本心をも打明て一世  
 の別れを告知んかと口迄出しかイヤくと思ひつめたる那女か顔色今宵限りの命とぞ明白  
 に言ふならば供に死なると言ふは必定さすれば不便や兼松は睡を力に成長ん白痴者になりお  
 ふせ那女に愛相をつかさせて術よく離別をするならば我亡跡にて怨まうとも那等二個か始終  
 の爲まだらう若きお民故年月の立内には去者は日々に疎しと終には身を寄て母子の者が行末  
 は世に出る事も有ぬべしと胸を定めて莞爾と笑ひ(湖)ノッお民和女は少く過無内にきついで野  
 暮助になつたノッ尤 主人にちうを盡すは侍の道とは言ふもの、當世は夫ではならぬ夫故拙  
 者も心を入替へ侍士堅氣は打棄て今度然る大盡の御養子になる相談整ひ愈々近日行くに付き  
 後日更や斯無い様に今夜態々來た譯だか斯うなつたら兼松を連れて往けと言ふたら和女だ  
 つて可愛い子を繼母の手に掛ていじめさせる氣もあるまいから稚兒は此儘和女に遣るから少  
 し手足の伸たなら年季子僧にても出すがい、夫で無共和女の容顔なら一個おの連子を爲ても  
 随分貴ひ人があるたらうから御勝手次第に御縁付なさるか、と言れてお民は興醒顔に呆れ  
 て言葉も出ざりしが借度容を改めて(民)モン湖平太様貴君はお氣でも違ひましたかお家の大  
 事を余所に見て逃隠を被成様なふがいなさいお心とは今日迄知らずに居りましたに金持の御にな  
 り一生人に後指をさるゝのが御本意か素より不足私故お氣に入らぬと被仰のは更々無理と  
 は存しませんが可愛そうに兼松に年季奉公させろとは宜くもひどうに言はれた事貴君は天魔  
 が魅入るかお情ないお心と怨みつ泣つかき口説を實に理りと思へ共弱くて叶はじと氣を取



六ろ

直し立上り(湖)是が手切ト何や  
らん紙に封一一包をお民が目前  
へ投出後をも見ずして出ゆく  
を(民)アレマアまつたト騒出せ  
ど四日の月は早落て黑白も別ら  
ぬ暗なれば影さへ見へぬ良夫の  
行術何國迄もと思へ共内には香  
子の泣入る聲に心は二ツ身は一  
ツ詮方なさに立戻り泣子を膝に  
抱上れば傍に落たら以前の一封  
手に取り上れば上書に兼松が養  
育金并に書置と認めあるにそお  
民は再び打驚き手早く封を押切  
れば三十兩の金の外に一通の遺  
書有披見れば其文に

一筆残るる吾等事兼て  
大星氏と一味合謀致し亡  
君の敵高野殿をつけぬら  
ひ既に去冬十四日義士の



面々侶供に敵の門口迄は趣き候へども由良之助殿の遠謀にて万一敵の親族方より後詰  
の人数を出され候ては討手の難儀なれば一ツには是れに備へ又二ツには四十七人戦ひ  
危く見へ候は、二の手を立て討入るべし若先隊にて本意を遂げなば各々命を全ふ致し  
亡君の御菩提を永く用ひ申されよ進む退くは忠義に隔は候はず後詰の備へ堅固ならぬ  
ば先隊の働き自由ならず是第一の忠勤をや一老の激謝黙止がたく相守り候うち果して  
先隊は本意を遂げ宿等は在る甲斐なく去とも心は四十余人に變るべくも候はねば余人  
は知らず我等におおては存命候所存置でるれなく本意は共に致さず候へども死は共に  
せんと思ひ込み候へば今日四十余人の面々切腹と承給はり我等事も御菩提所圓岳寺に  
於て切腹を遂げらるるもじこの御事は何卒良家に再縁致し呉々も兼松が事頼みん。此  
金子三十兩は大星氏より討入の用意に配分致され候へども最早要なき金子ゆへ兼松に  
あたへ申候其元預り養育の足しにも致されへ候若突詰候心より自害なと致され候は  
、此うへの怨みにそんじ候申殘し候事只是のみに候し

森湖平太

七ろ

お民は始終を讀下し吐と一盛叫び一か何思ひけん兼松を肌(肌)に造か抱き込み身輕帯を引しめ  
て親の腹りの短刀と湖平太が書置を携へ乍ら斬出せと叫び一討と此物音に近所の人々起出て  
お民か様子の只をならぬに驚き乍問ひ寄るを答へもやらす止むる人を押退け振り切り一截に  
南の方へと志さし息を限りに走行ける

第四十三回



八ろ 其夜も何時小夜更て星も眞空に極曇り空さへ暗き雨催ひ折しも來掛る一個の男四邊りろく見舞一乍歩み寄つ、向より息せき馳來る辻駕に行當りつ、不滅口(男)エ、氣の利へ駕屋じやアねへか目を明て通りヤアがれト云ひ棄て行んとするを駕の中成客人が提燈の火に透て(客)コウウこへ往なア強八じやねへか(強八)エ然り被仰のは浮懸屋の若旦那か子(客)コレサ若旦那かても有めへ邪アねへか何にしろ咄が有からと云ひ乍駕を落させて中より立出(客)コウウ駕屋宿の宿迄とたのんだだけれ共些と此男に用がある柄爰切りて回つて呉ねへ是で酒代はあるだらうト包みし金を渡すにぞ(かこ)へ、是は毎度有難ふござお升左様ならばお静にと言ひつ、駕屋の戻り往迹見送りてあた九郎は是迄強八が彼お民を是非周旋と言爲て五兩三兩取乍ら今に其事なきを責め憤起となりて罵れば強八殆ど困せしか何やら黙頭き耳に口一子、子、何と解やいたらう(あだ)フウ夫れじやア那胡平太がお民の住居へ忍んで來て言つた事をば何もうも(強)すつかり門て立聞たから先へ廻つお民めが湖平太の跡を追ひ圓岳寺へ往く途中に待伏せ兼松が養育金にと遣して往つた三十兩を奪取線と言泥鰌斯う言内にもお民めがそろく其處等へ來るかも知れねへ氣の急脚は此通り向奉今夜の處をば(あだ)成程然言理屈ならまんざら野暮も旨めへか夫に就て自己も又お主に些と咄しが有やす今開きやア湖平太は今夜圓岳寺の墓場へ往つて腹を割て死じやアねへか然うして見ると那お民は先使りの無身の上其處等から持込んで口説落すと言線は何んど理屈は有めへかの(強)そりやア被仰事だけれども並々の女なら随分其手に往やせうが此迄三年越ると言者婦たり賺たり手のこつほうを搦てまへ思ふ程には不成婦女今其専主が腹を切て死なふとする場合だ者を自己も同所に死ね覺悟で往居を出たには違ねへ夫を彼是爾つた處か此も話しは追附やせんお前様も男だらう一旦斯うも

思つた女を思も被逐に仕舞つちやア口惜のも其善サ私も又お前さんから那程迄にたのまれて出させた金も有譯だ柄其儘では濟されねへ毒を喰は、血迄ださ車の腐れおたみめが今にも愛へ來たならは暗粉を幸ひに無理往生に引捕へ思ひをお晴なせへやう然うした上で遠國へ連れて往つて遊女に賣ても年一杯の身の代なら眞血野暮でもありやすめへ然う斯ふ云内向からあれく人の來る足音大方お民に違はあるめへ此邊へ忍んで斯うしてと耳口き示せばあだ九も白者なれば打黙頭共に小影に立隠れて埋伏する其毫らぬお民は前に湖平太が彼遺書に打書き長夫の赤心知た上は息有内に今一目逢ふて盲度ことも有最期の程をも見ま欲と家の内をば駈出せしが泣く兒を肌を脊負ひつ、押ぬ夜路を女の一念足に任せて行折柄小陰を出本野前のう八お民の前へ踏踏山(強)や此婦見舞に驚らぬ大膽事を爲やアがるな常々自己が待焦れ一純なつて居る野郎が先刻忍んで來たをちらりと我が見付たから今夜ア必定欠落と白眼で跡から付て來た是まで母子を喰せて置た其勘定を立も爲ねへで此生馬の目を抜て陸徳寺を遣られちやア強八棟のあごが干ア幸ひ今夜手前をば世話を爲て遣らうと被仰旦那も一處に御座つたから是非其方へ遣らばやアならねへ夫に就ても邪魔を小防主小兒奴は我が預かると傲くお民を推据て脊中へ入れたる兼松を抱取る機に手に障る財布を共に引出せばアレマア待ツテト取絶付おたみの後へあだ九郎が拔足爲つ、忍び寄抱き附れて又吃りコリヤ何事と云乍眼放さんにも男の力除術も無見へにける

第四十四回

九ろ 當下かう八差寄つて(強)エ、お民今も云つて聞せた通り是迄論はせて置のも其處に御座る旦那柄調賦で貰たお陰だアうれたに由て先頭ツから旦那のお世話に成すと口を酸くして那程迄



割ッ口説つ動めても得心爲ぬへのみならず自己が勝手な願出されちや第一且那へ我が濟ぬ  
へ今から直を切替て且那のお世話になるならよ未此上にも姓を出りや且那への言辭に此  
兼松めを押し殺すぞハハ殺した辻が我甥何處から熊の打人もあるまい返事が遅いと斯うする  
ぞト泣叫ぶ兼松を小脇に取と掻抱き螺榮の如も拳を固め打んとするに堪り兼(民)叔父様そり  
やア餘りな程が今夜断出支度し断落所の事では無湖平太さんのお命の終らぬ内にと氣の急途  
中其子を奪ひ財布迄手込に掛て取るのみか遂を見慣ぬ此人に世話にされとは何事ぞ其の子は  
遣らぬ殺させぬと走り寄らんと身をわかくを仇九郎に確と抱しめ野暮を云すに是斯と共儘所  
へ抱抱が己に危き其所へ木立の蔭に立忍び最前よりの有様を隠らす洩聞く一箇の武士餘の  
事に視兼てや踊出ツ、手陳の早業矢庭に二人の利腕を隠むと視えしが捨伏て隠に相伏動かせ  
ず其間に早く兼松を怪我せぬ様に使へ退け猶も財囊をお民の方に向(武士)女中定めて驚きつ  
らん怪我が無くして先は重上取返りたる財布取返して愛取られよと云にお民は嬉しさと辱なさに  
手を合せ借々禮を述べたる上今宵の始末我身の上夫の事さへ取交て包匿さす物難れは或武士は  
願て(武)借て女中は鹽谷の御家來森氏の内室と此度義士の面々は世に類無忠義は適武士の  
願にて最義しく存せしが夫にも更々劣無湖平太殿の眞忠義勇其内室の其女に料らず思ひしは  
武士の面目拙者事は何某が藩中小織左膳を呼る、者以後はお見知り殺下べし夫に就ても湖平  
不願の最期に逢んとせらる、ならば心の急迫は即乍ら女中の足にて酒繩迄走り着んは覺束無  
来存する旨有は姑く我等に任せられ日ト云つ、以前の工圖に對ひ(武)汝等命を取る奴才れ共  
う我言葉に従ひ、聊か用拾致て取らせん爾々命を惜むならぬ九の女中を背負ひ又がう八は  
四兒を大切に掻抱き我と一處に酒繩なる圓岳寺迄供致せ若少にても略略めらば二箇が命無る

へきぞと云はれて否とも言難頼てお民と兼松を仇九郎とごう八が香中に負ひ肌は抱き初の勢  
ひ引替て阿容々として先に立てば左膳は之を追立てく既に圓岳寺の大門迄来たれりか  
ぼちたみは速も着中を下りて彼兼松を抱き取はごう八とあだ九は思はず一息ホツト吐息をも  
見ずは逃行にぞ左膳は寺門を打敲き火急の事にて参りたれば役僧方にお目に掛ん先此門を明  
られよト再三門番に言入れ、と今夜は少子細めれば決して人を入るなと番僧よりの言付故  
何分門は開難しと一ひて言を折返し(左)番僧の言付で咄ぬとならば是非もなト爾は問座事の  
有今宵鹽谷の浪人にて森湖平太と云者が此寺へは見(と)さり(か)門(然其湖平太が今夕二時程  
以前火急の用事で庫裏迄通ると甘く欺して門を明させ鹽谷殿の墓の前で腹を切つて死な故寺  
の内は大騒ぎ其だに由て又他から腹を切に來る人が有ては不成と番僧が厳く私に云付て六  
時が鳴らぬは明させぬと聞くに驚く左膳よりおたみは身もよも不祓有思ひリット一層平伏し  
て生体も無有様は哀れにも又道理なる  
斯では小織左膳は門番を盡く論し彼番僧を呼出して猶も子細を尋ねし上お民が事をば報し  
かは由縁の者もあるかとは逆漸々門を開かせしにお民は墓所に赴ききて長夫の死骸に抱  
き付返らぬ事杯繰返し愁歎も囁成さげれども元長一ければ爰に漏しつ看客皆敷推すべト其  
時お民が心では同じ道にも消果度を新道に思ひ返して其場にて髪を切り長夫の骸と侶供に  
圓岳寺の中に葬りて跡念比にそ用ひける斯で後左膳が主人何某侯より兼松を召れ初めは扶  
持杯賜はりしお成長の上家臣に被爲再び森の家名を立てば左膳か取持也とは雖も是併乍ら  
湖平太とお民がちう節故ならんと其頃噂したりとせん



愛に大星清左衛門と喚はる、は近江の國司佐々木姓の家來成りか後に鹽谷家に懇望被爲てつ  
ひに高貞の臣と成又此義士の一個也始め近江に在り頃は百五十石賜りて使番を勤むる親共  
に世を去て未妻さへ不迎に清左衛門は生得正得直慾の人なれば世帯向の事坏には聊心を留ま  
る故其家究めて貧しけれ共夫婦のまとは苦にも思はず小丁稚一個を召仕ひ是に勝手の手を任  
せて其身は明藝武道にのみ心を盡して居たりしが折しも年の終り世間は煤取餅搗杯と、春  
の段の賑はしけれ共清左衛門は夫さへ構はず破れ障子に破れ疊切張一つ爲ること無安然と  
て居る程に早大晦日にさぬれば大勢の掛取が喜所狭と居並びて(懸取)催促すれど少しも騒  
かず當季に渡りし物成を共使彼等の前へ出し是より外かには貯へなければ跡の資苦は物も  
せず有丈視する潔白に懸取共は顔見合せんと答へも不成りが中にも米屋が趣み出(米)皆の衆  
彼を聞かすや又たか町人の心と違ひ御武家様の思召は又格別な者では無か先和主衆のお掛ひ  
高きとつと積つて見た上で又相談も有たらうと云はつていよいよ十六盤取つて  
懸れば各自高を贖上り其締略と十八兩所で七兩三分なれば引足へきに非されど常より律氣の  
氣質を知らしめてさるのみならず却て後の困苦を察し其内三分を共儘に残して行ふと米屋  
の發願に(まきや)成程米屋三の謂れる通り且辨はる、云結縛をお方だかしろ質屋三(いち  
や)然う共く御身分の事は些も構はず被成て無此身共に持て行けと被仰のだから懸と道方  
から小遣ひ位は給を付て進か宜ノヤハイ、且那樣只今御開遊す通りお金を配當致しで  
懸有し御さし升此上何成共街入用の品も御坐升柄御預内柄お間に合せ升(古てや)手前方も御  
用も御さし升事ならぬ御の義は何にも懸構まして御分を御恰好な品を御覽に入升様に致し  
まはす(懸や)且那は御座は存し無か懸懸は懸とは不可無後懸造に宿から掛せて進か(や  
をや)は難波の菜や膾の大根は小僧殿此身か店へとりにとさらしやい(米や)左様ならば且那  
様此二百疋は着上り升跡二百疋か御餅と贈入用此は小僧殿に預けて置ませう扱頂まいたお金  
高面にお受取に致して御覽に入ませう(消)イヤ各々の信志は別て、辱ないが拂力にも不足の  
金子を箇様に致して呉ては爾々氣の持じや心配無に取つて呉りや(米や)イヤ、夫では私共  
の家業に對して濟ま仙故夫はお納め被下まいと聞りし金を分取て各々受取の書付を差出しつ  
皆打廻て出行しは只一同に見る時には白痴一事の様なれ共義理には懸を打忘る、此等は御國  
魂成へー

第四十六回

斯て其年の大晦日は掛取り此の世話に成安々と春を迎へて正月も早半旬になりしが或日大星  
が同役なる笹浪志留齋と云る者久し振にて来りしかば清左衛門は一ト間へ勝ひ四方山の物語  
り杯姑く時を移す程とに(一)が職)時に貴殿も御承知なされる彼の米屋市兵衛が此間參つて申に  
は那の大星様は寔に結構な且那てふお升が惜い事には御勝手向が御不都合の御様子夫と申が  
御獨身故何卒御想懸な御縁女も有たらばお世話を致度と存ますか大星様の御内室には並々の  
女では中々お氣には入升舞共處で種々舞わすた所幸ひ富國堅田の郷士に淺田藤内と云人の  
娘は十七で容貌も美仕度も相懸に有との事で御さし升が其内内と云人が武術の達人で娘御  
にも幼稚時より薙刀を習込だ處が今邪ア親御にも負無遣人になつたと云ことと御さし升共處  
ろて親御の言はる、は假令先は困窮でも娘と立合つて打勝程の男をは卑に爲様と言はれるそ  
に一對の御夫婦と思はれ升か是れ何奈て御さし升ト申升から私も幸の縁談と存した故實は其



事で参た解(清)ハテ子夫は珍(う)へお咄して御さい升縁談の事は兎も角も娘に夫丈長刀を仕込藤内とやらの武術の舞かト思はれ升れば私事も御存知の通り武道は執心の解故何卒知己にても成て度度うござい升(う)か然う云う思ひなら市兵衛を呼んで曾又先の様子委しく承給つた上て近日御沙汰を致しませうと其日は別れて掃りしが斯て五六日程過て志賀藏は再び来り先へも段々咄せし處明日御出有様にと市兵衛より申越せば某も早朝より御同道致さんと云にそ清左衛門も承知の由にて次の日兩個打毬れて淺田藤内へ赴けば豫て言入れたる事故一間の内を方爬拂ひて爰に二人を通つ、頼て主の藤内も出て對面する程に彼是の挨拶挨拶少々に終りて後試合の事を志賀藏より懇ろに申入れれば彼方も早速承知して娘お義を引合せ頼て藤内は若黨に白木作りの長刀と同木太刀を取り出させて好處に組合させて卒勝負をこの言の下より清左衛門とお綾とは一體なつ、立對ひ暫時互に打合しが思に増たるお綾の手練遂に大星が打負ければ志賀藏は市兵衛が由無言葉を取持してわゝる不覺を取せしは最氣の情には思得共今更に詮方なく暇をさへそこくに清左衛門を引連て屋形へ歸る道々も是等の事を認めれば清左衛門は打負しを爾のみ恥と思ふ色無不思議の處女も有者哉とお綾の手並を譽め夫に就も清左衛門は其身の未熟を深く歎き右の次第を少しも隠さず一通の書面に認め武術修行の爲として三ヶ年のお暇を乞ける所主君佐々木何某殿には件の願書を祝をなほしこは珍敷願ひ也我兼てより清左衛門を粗忽者ぞと思ひしが並々の者ならば女如きに打負しをおし隠して居るべきに明白に願ひ出しは身の非を飾らぬ潔白にて人の及ばぬ處有奈何も渠が望みに任せ身の暇を取らせよとの仰に由て諸士頭より清左衛門に達するにぞ大星深く欣びて家財は親しき人に預け旅の支度もそこく日ならず近江を出立して京都の方へ赴きけり

第四十七回

現も大星清左衛門は三ヶ年の暇を以て受本國近江を出立して程無京都に歸りかは三條小橋の邊なる香女屋と云る旅館屋に五六日逗留す、那地の様子を開合するに其頃京都に名の高き劍道の名人に澤路谷之進と呼ぶもの東軍流の師範を成由今都にて這人に肩を並ぶる者も其門弟許多有と云こと本國に在り時より聞及ひたることなれば傳手を求めて弟子となり澤路の家に寄宿して一日片時も怠り無稽古之心を離す程に多の弟子の其中にて免許を得たる者と云は清左衛門と立合ふに勝を取る者稀なる程に上達はなされ其谷之進は奈何なる故にや清左衛門に奥義を許さず然るに主君に頼ひたる三ヶ年も早終れば一ト先國へ立歸らんと谷之進を始として門弟共にも暇を通知頼て近江へ戻りしかば最早是程修行を爲たれば那處女と立合ふ共最初の様にはあるまじと再び堅田に至りて藤内に對面し試合の義を申入りに異義なく承知し立合たれば這回も十合に至らずして初の如く打負しかは清左衛門は呆れ果吾三年の其間痲目も療ずし修行して吾身乍も劍術に上達せしと思ひしに今此娘と立合ふて最初に襲らず不覺を取りしは是迄心を盡したる修行も全く冗骨を打たるなるかと身を悔み茫然として物いはずた、打向て居たるにぞ藤内は打笑て大星氏のお手の内御修行被成一程ありて適の御上達娘も以前の手并ならは及ぶ事にはあらねども娘事も三ヶ年宿にて出精致させたれば貴殿に劣らず上達して勝を取りたる者ならんと云つ、此日は清左衛門に酒杯出して款待にぞ大星も賈もと思ひ姑く余事の物語して其日も惜し立歸りしが再び三ヶ年の暇を乞ふて澤路が家に赴きつ、此度は初に彌増て命限に稽古せしかば二年斗の其内に師匠の谷之進さへも手を置程に上達爲たれとも未だ免許のさたもあらず又數年修行を積みて早追願ひの三年も了る頃になりたる時或日

五十



澤路は一問の中へ大星を招き入れ東軍法にて秘す處の微塵の位を初として其他奥義を悉く皆傳せしつ、以て其許の御手練にては疾も是等の傳授をも致すべき善なれ共貴殿の本岡堅田の里には淺田藤内が娘にて其名をお綾といへる者長刀を能使用ひ凡そ近國に名高く聞へし餘劍術の達人も彼に勝者稀成由貴殿は古郷の事なれば若渠お綾と試合をして萬一不覺を取られし時公之進が門弟にて奥義を究めし者なりと人の口端に掛る時貴殿と我等が取のみならず流義の名折と思ひし故是迄態と一流の秘術を授けぬ拙者が心底無訝敷思はれつらんが偏に流義を重んずる我赤心を察し給へ今は貴殿の修行も滿て假令鬼神亦恐るべきに非れば今日即ち皆傳せし猶此上にも心を練て那一大事の秘術をば輕々敷な思はれどと最念頃に示されて清左衛門は總身に不覺冷度汗をかき恐れ散り居たりしが姑く有て頭を擡段々との御教訓讀て承給はる夫に就て一つの御願ひ其仔細は外ならずと今言れたるお綾の事を更に隠して陳終り若此度も打負をば流義に疵を附ぬ爲め切腹なして相果る覺悟の由を聞おれは澤路荒附片類に笑み思ふに違はぬ貴殿の心底最早夫迄修行あれば彼と立合給ふ逆見苦敷義はあるまじければ随分共に大切にお試合有て然へし若其上にもお娘に打負給ふ事あるとも御切腹は宜からず速我等に報知られよ拙者が近江へ立越て彼と勝負を決せし上我さへ彼に及すは師として指導を受る共武道に取て恥しからず必短氣を出し給ふなと與々も敷戒つ、猶も他流と立合ふ時の心得にも可成事採最細かに顯示し早大星の出立も懸近しと聞に因夫より盃の準備をさせ心斗に錢別の名残を愛に惜ける却て二三日程過て清左衛門は師匠を始め甲乙の門弟にも是を以て話にもりたる挨拶を演て暇を告て再び京都を立去りつ、本國近江へ趣にぞ此度丈は淺田の娘を只一太刀に爲負して六年越の思ひを晴さん者と大星は心勇めは自から足の進て程も無我

圖表へと立回る

第四十八回

大星は國本へ立回ると其儘に歸府の由を主君を始家老諸士頭へも届けしかは家中の者も知て何國の浦ても蔭語に我八難は御へ掛け人の七難言ひ纏らすが總て浮世の習なれば清左衛門の事柄をも種々様々に言觸す家中の噂を聞度又彼の志氣誠は胸を痛め快からず思ふにそ大星方へ馳行きて先恙なき飯國を祝ひ扱此度も淺田の娘に試合をさる、積りならんか此上方一不覺を取は世間の手前身の恥辱容止く活ては居られぬは事止たが宜らふと思ひ込て言出れと清左衛門は頓着せず(清)實に御深切の御意見千万添ふはござい升が拙者の所存は些目違ひして居る様でござお升尤始の了簡ては此度娘に打勝すは切腹をも致さうと思ひ究めて言りまゝたが師匠の教訓旁々を勘辨致して見弁れば従ひ此度勝す共是迄修行を教したの此身に取ては得と云者併殿へもお聞に達し修行を願た事有はまけ度心は御在ま仙か世間の人の口杯と夫敷の小細な事はは構ひ被成に及ばことサ(一)が(一)イヤイヤ共許の様な物に構はぬお人は夫てもよいお知りませんが人の口には戸か疑られぬと様々な事を云觸らされると第一身分にも拘る事が出来様も知れませんとはいふ者の其許の御氣質止に被成ト云つた處が止る復所存は有舞から此上は宜うござる今度貴殿が負と見たらはお綾が咽へ喰付て、も死ぬ氣で居者もお供致そ(清)是は又仰山な夫れには決て及ばぬことサ(一)が(一)イヤイヤ是非共然致さぬは拙者も武士が立ませんと止ても聞ては陰方無次第日兩人同道にて又彼淺田が家に到り對面し七度百有連二箇が名前を申入れは取次の者立出卒這方へと言つ、も例の一問へ誘ひしが待と違と主は出ず餘りのことに志氣誠は取次に出し若葉を呼出しつ、催促なせば合始く逆奥に入向



八十八  
やち口耳く様子也。が半時斗待せ置て漸く主藤内は出来りのみ會得もせず(藤)今日入來の  
姓名を大星氏とは聞たれども是迄二度と試合に來て恥面提て戻られた御身がよもや來られと  
は夢にも心着なんだ無浪氏さへ同道にて入來の仔細は何故ぞト常に異一俟挨拶に志賀は早  
急氣を爲を大星目顔で推諷め打笑乍ら進寄り(清)如何にも只今仰の通り御息女との立合に二  
度迄不覺を取り一專全く此身の未燃故と又三ヶ年修行致せし掌の程を試み度再三作進參して  
お相手には足す共今一度御息女と何卒試合を願度ト言はせも敗ず冷笑ひ(藤)恥と言者知らざ  
れば此世に恥は無とやら娘の欲きに二度三度恥を播ても恥とせず面お一拭で來る様を白痴を  
男では逆も拙者が卑にはならぬ又候娘と立合ふて恥の上塗を様よりとつと、立て回らぬよ  
今日は拙者も繁用にてお辨ひ申す暇か無気力の毒人哉トにいなき辭に清左衛門は腹の中に  
思ふ樹三年跡に來る時には不覺を取り一某に酒送出して飲待しに夫とは打て替りたる今日の  
素振ぞ心得ぬと須臾思按に差俯き辭途切れ居たりける

第四十九回

再 詔 清左衛門は按に進ひ一藤内か取ても付れぬ返答に並々の者ならんには忽地怒りを起す  
へきを大器量の金星なれば更に面の色をも變ず莞爾と打笑ひ(清)何様御老体のお腹立御尤に  
は存升れと拙者事も前後六年心命を抛て取術修行致したも何卒して御息女の今一度御相手に  
御立合をば願はん爲只今御繁用とならば御用の濟迄御稽古所の末になり共進扣へて待升るで  
と座ませり何分平に今一度云ども更に藤内が受諾く様子のあるに堪へ兼て志賀は  
信相變て詰寄るを大星は推留短只身を謙遜りて頼むより果は餘儀なく藤内も不性無性に承  
知して娘見に斯と報知たりけんあやば身輕に手扱し稍稽古場に立出れば清左衛門も續ひて下

立双方互に對合て侶に一禮終ると其儘あやば例の長刀を探大星は又小太刀を拭て呼吸を合せ  
て立上れば清左衛門は前後六年必死と成つて修行せしも只此試合に勝むが爲と思へば少も精  
神亂れずあやも又大星が以前に替り去身の備に侮り難しと油断せず暫時洩間を窺ひつ、際  
く聲を掛合ふて一上一下と新結へば勝負奈何と見物なす藤内よりは志賀は此一試合に大星  
が若や不覺を取もせば阿容々々屋形へ立歸り人に面を向難しと頼に背き筋を出し纏身汗に成  
をも記へず瞬もせず抑れば這方の二個は秘術を盡し半時計りも戦へ共未だ勝敗も判ざる程に  
清左衛門は些少撓まざるやが焦つて籠む長刀を右手にはつと受流し透もあらせず打込太刀  
は東軍流にて秘す所の微塵の一手に争か堪へき流石のあやも受損む右の腕を強か打れて持た  
る長刀を取り落しひるむを得たりと飛込んで猶打居んとする折しもヤレ待給へ大星氏勝敗の  
見へた云ひつ、一間の襖推明て立出る其人は京都に於て師と頼み澤路谷之進なるにぞ  
打驚き、木太刀を投擲(清)思ひ掛なき先生には何故有て此家には怪しみ問へば莞爾と笑ひ  
谷)その樹不審は御道理子細をお咄し申す可れば先と是へと云ふ程に清左衛門は座に登れば  
あやも其に端折を盡し父の過りに居直るに谷)諸大星氏は是迄は態と御沙汰を致さんだが  
是に居る藤内は拙者が爲には實の兄夫故にこそ二度迄實験はお綾が試合の事を兄の方より申  
越し就ては貴殿の人品骨柄真の武士と思はるれば成ふ事やら那様を婿を欲いと兄の念願幸  
ひ不思議の御縁にて我等方にて御修行有は此由兄へ申遣はし一諸六年其間貴殿の様子を見るに  
九十ろ 武術の上は言ふに及ばず平日の立振舞迄天晴と見受し故流義の奥義をお傳申せし事の序に斯  
ととお綾が事を餘所乍言出せし豫てより兄藤内と示し合せ御身を婢に做んが爲是に仍て某  
も跡に京都を獲足し昨夜此家に到着して貴殿の入來を相待しに今日お綾とお立合のお手の



内をば拜見致拙者に於ても祝著致す興に珍重々々云へば藤内語を續て(藤)夫に就ても某の  
 二十  
 最前よりの爲體を合點行ずと思し召んが實は貴殿を試さん爲然るに聊怒の色無只武事にのみ  
 二傾かる、其御心底を見るのみか今の試合の御手の内假令娘兒は打挫かれ片輪になつても苦う  
 ござらぬ娘に勝た権を娶は年來の拙者が願望此上は笹波氏以前の僞言に御用捨有て御謀を  
 み入と二個が言葉に打驚く清左衛門より忠實職は我を忘て小踊を喜び勇ぞ道固なる期て夫  
 より酒宴に及各々歡を盡せし後大星笹波兩人暇を告て立歸る扱吉日を撰つ、志賀藏が媒にて  
 曾尾能お綾と婿煙臺ひ夫婦の和合も最睦く幾千代迄もと契なるべし

第五十回

期て月日を経る程に菅屋形佐々木殿は専茶道好み給ひて所謂茶器を集め給へば上を學ぶ  
 は下の倣ひ一家中の侍まで皆此道に心を入れて今日口頃日日は披露道處の會席彼處の返  
 茶と只管流行たり中は大星のみは相變らず武術の他は見向もせねは青待士等皆一同窓に彼  
 を嫌つゝ向が差を與へんとて或時廣間結詰合せて四五人互ひに申合せ茶器の目利を強付て  
 習ませんと計畫居る咄半(清左衛門は向心なく廣間に至皆夫々の挨拶了り)○イセトキニ  
 大星さん此間には御新婦を御迎への御様子未だお歡ひにも出まへなんだ(清)此は御挨拶添を  
 ふ存升(十)へ、エ夫ては好山氏は未清左衛門さんの御内室に御知己におせんなさねへのかキ  
 夫は然りと宇治右衛門さん先刻の品を大星先生に目利を頼つたら何様たらうね、眼で知ら  
 すれば打領頭(宇)成程此目利は清左衛門さんなら間違はありやすめへ何卒大星さん一寸折紙  
 を付て下さるとはなりますめ(かね)御目利と申しては及びもないこととござり升が武器  
 は兼より好む所然うして私に見ると敬仰のは何か刀劍の(十)ハテそこ許も野暮な事を仰らる

者た當時殿を始として家中一  
 統茶の湯の流行するに就ては今  
 の世に入用の無武器杯は廣代な  
 しても金高の茶器を求め度時節  
 お手前様は諸道に通してお在故  
 云様に承はつたから定めて茶道  
 のこともお心得があるてござい  
 ませう其所て此茶樹のお目利を  
 頼ひ度と申す譯サト一個の茶樹  
 を突付られ清左衛門は呆れ果し  
 が爾有ぬ体にて打笑(清)此は又  
 何と有たら茶樹の目利でござお  
 升が私事は生れ付て簡便な事は  
 大不接内此樹は何分御用捨を  
 ▲、エ夫ては大星三は茶の

二十

湯は一向御心得が無の如斯云た  
 らお心に當か無知が朋友の好た  
 からお咄し申是から些と我々方  
 へお出させへ薄茶の香様でも致へて進せう併茶のへをするには中々物の入る者だが失禮乍ら









四十二ろ 嫁して後女の道を守のみ武道の事は口へも出さねば鹽谷家へ抱えられては彌々固く離せし故  
離有てあやの手練を知る者更になかりしが清左衛門が義士古侶に吾妻へ下るその以前夫婦別  
れに及ぶ時

白梅や雲の中にも花の意地

あや女

ト書て送りしにぞ夫の所在を夫とせば誰に見振り者を見えたり後に由良之助も此句を聞て勉  
の賢女哉と同盟の義士の中に頼り出して譽れしとぞ其後あやは頼里なる淺田が家に立返  
り夫が本意を遂げ後切腹せしと聞よりも縁の愛を切捨て菩提の路に入れるが此時あやに  
一子有其名を瀬平と呼つ、も値に五才也けるを佐々木家へ召出され大星の家名を立られしよ  
り今猶近江に清左衛門が子孫は榮へて有とぞん

編者云く尙此外にも清左衛門が別傳有と雖も世俗の宜く知る處故夫等は總て愛に洩しつ是  
より後の物語は牛尾田政之丞が父牛尾田主水が實傳より政之丞が鹽谷家に仕ゆるの美談を  
綴りし最花やかなる一段と知るべし

第五十一回

扱脱く牛尾田政之丞は鹽谷家譜代の家傳に非ず奈何なる故にて此家に仕へたるぞと尋るに政  
之丞が父主水と云るは伊勢の國松坂の住主古田何某殿の家臣にて高三百石を給はりつ、馬廻  
りを勤りが今年廿三才其容貌の麗はしきこと女子にして見欲き迄最優姿なる生れなるに心  
は宛ち柔弱ならず文武兩道に丹練なる中にも別て劍道は神免二刀流の奥義を極め當時古田  
の家中にて主水に並ぶ者無と其頃辱せられしとぞ然るに主水は病氣に因り有馬の湯治を思ひ  
たちて此處を主君に頼み五十日の暇を乞受附より忍の旅なれ共三百石の身分せれば若葉餘

持草取の三人を召連て彌生の下旬に伊勢國松坂を發足なり日ならず津の國有馬に到りて家  
名を藤屋と呼ばれたる湯宿に姑く逗留なり専ら療養したるより病全く癒りしかば近に故郷に歸  
らんぞ心辨せしつ、も此日も又例の如く湯場に至て浴しつ濡たる体を拭ひ了て浴衣を替んと  
せる折しも勝手の方より庭傳ひに那方の座敷へ行んとて通掛し一個の病女年配は十七八歳顔  
色に色白く目元て男を殺す迄にはつちりとして最涼敷身筋通りて口元優く翻る、計の敬を  
るに主水と顔を見合て莞爾笑て行過たる婀娜ぬ姿を見よりも流石の主水も心動きて跡見送  
りつ、居たりしが餘の事に思ひ兼てや傍に居たる湯女に對ひ度々の素性を問ひ且別紙を頼  
り湯女は早速香込しが元來堅氣の娘ゆへ容易く承知は覺束をけれと兎に角連て參ると云に主  
水は深く喜ひつ、頼て其身の坐敷へ歸返事奈何と待程に暫く有て件の湯女は酒肴を携へつ、  
主水の座敷へ入り來り首尾よく娘を言辨へ伴ひ來し由を報知れば娘も續いて一間に來り言少  
に挨拶も最ういしく見へけるか此處女の名をお覺とて正の年は廿才の上を二才三越たる  
なれ共敬深き生れなるに其粧の未通風なれば誰か目に見ても十七八と思はざる者は無最  
前ちらりと見し時さへ心の動く斗なるを今又顔へ引附て親く之を見事故其麗美さ十倍にて  
年に似合す物堅いと評判受し主水なれ共戀は思接の他なるにや魂氣ろに身に添はす未盃もせ  
ざる先か酔るが如き心地してあつやの顔を打守り頻りに一人打笑のみ果敢々々敷は物さへ云  
は口を湯女ハ只管執持て輕口なると云散し酒を繼て座を持程に主水最早はる酔機嫌好機也と  
思ふにそ湯女は程能座を立つて無難利して外し住此湯の首尾は奈何ならん次のまきをを見て知  
らん

第五十三回



幾は二箇が差向ひ須臾辭も途切れつ、主水が才智の勝れしも斯事には疎けれ何と言ひ出し  
宜からうかと手持無沙汰に見へけるが思ひ切て傍へ寄(主)アノウウ和女の名は随おつやと云ふ  
二十うだのト初心ちうく問ひ掛くれは(艶)カト先剛笑ふた計付端かなければ又暫して(主)而  
て年は何歳だ(艶)ハイ十八でござぬ升(主)成程此身も其位で参らうと思つた夫は然うと最  
う一ツ呑から酌て呉りやれ(艶)アト云ひ乍酌に掛其手を確握り締れば(艶)アレモウ御座候  
を成成ては宜ませんヨ(主)イヤイヤ決して置れぬ致すのてはなほ大眞實だが何と今宵は道徳  
を拍つて呉れる事はなるまいかのと言共(艶)は若俯向のみ回答無れば差寄て(主)心の成を  
口説く戀は曲者思接の外斯者にて歴々か眞實を建言葉の替成(艶)は始終聞果て恥さうに顔を  
上(艶)お言葉は嬉しいなれど何を申せし私にばつた一個の母が御座まして何卒未始終  
母を大切にして呉る様を男があるなら親子の身を任せ度も妻御妾では未だ覺束無から假令  
先は貧窮でも心立の宜人で眞正の女房にして呉る人無は母が安心する様を事には往ませんか  
ら何卒然言人をと尋て居升其替には私の身も眞て浮氣な事は爲升舞と心に院を却して居升  
ら不便の者と思召して堪忍被成て下さひまーヨト云に主水は感入(主)いか様和女の物堅と  
云事も親孝行と云贈も女の咄しで聞ては居たが夫程迄とは思はなんだに寔に見上た前意氣  
だそふなら此身の様な者でも牛漣見捨まいと言は女房になる存寄か(つや)夫は最方に一ツ然  
云事に成升と何様にか頼り御座升然とも夫は逆も及も無事だと断念て居升ヨ(主)イヤ和女さ  
へ得心ならば未定まつた妻逆も無事故國許へ母子侶供呼取て母をも安樂に暮させ様が何様だ  
夫張不承知か(艶)アノそりやア眞心で御座升か(主)ハテ疑ひ深ひ者だ此身も斯見成も勢州  
勢州の家來牛尾田主水と申して三百石を頂戴致す者虚偽りなぞを云て成者かと云つ、ソト

引寄、これは(つや)ア、レ誰か(主)エト恠りして飛退ながら誰ぞ来たのかつやナコチ萬一人が  
来てもすると思つ御座升柄サ(主)ナンノ誰か此二階へ来る奴が有者か併一家來の前も多れ  
積る話は四時過に取び忍んで来た時と云は(艶)も承知して後刻を約し出て行く此時主水が若  
黒の六内と云へる者何心無二階へ来るに常に替りて女の聲の一間の内に聞ゆるにぞ合點不行  
と訝み小窓に隠れて最前よりの二箇か語りを洩聞つ、(艶)か出て行く後より共に一階を下  
んとせし時主水か何やら手を打て六内へと呼聲に何喚ぬ顔付にて其儘一間に赴ければ主水  
は胸に一物あれば殘の酒肴を與へト猶何なりと肴を取り一盃呑との事なるにぞ六内扱はと思  
へども素知ぬ顔にて禮を陳べ伴の酒肴を頂きて我が居る半敷へ戻り來り餘持の鎌平及び草履  
取の七助にも旦那の仰せを聞せし、互に酒を呑始めしが下郎は口も善悪なき噂最前委立聞  
しつやの事を六内か醉に紛れて云出れば何思ひけん七助は顔の色を變物をも云す蕭々  
と胸掛ぬきて居たりけり

第五十四回

斯て其夜も小夜更て程なく閉ゆる四時の鐘主水と二階に只一人今にも(艶)が忍來かと臥房の  
理に有乍寐も遣して待程に下には下奴の七助が主水を思ふ忠義者最前若黨六内か咄の様子に  
打驚き直様二階に赴て主水に諫言爲んかと思いか共イヤイヤ日頃からして物堅い旦那か夫程  
思ひ込たはよくく事であらんを生若輩を身以て異見立して尙萬一と用られずば詮ない  
十二事夫も今宵娘が忍て來を途中に待受何ても旦那に逃せぬ様に有無を言はさず其場から追つ歸  
すのが新道と一人思案を定めつ、彼六内と鎌平が醉倒しを幸ひに竊に部屋を忍び出まさらかの  
時の爲に逆準備の一刀脇袂み二階桐子の奥にぞつかり腰を打掛つ、今や遅しと待處へ斯と



も知ず忍來るおつやを見るる大手を廣げ此所一寸も通すまじ達て彼是吐すならば踏段すそと  
威つ、啼立たる權幕に迫のお飽も詮方なく言込られて悄々と頓て此場を立去ける然るに主水  
八十二ろは最前小蔭に在て様子を立て聞き憤に堪ねと出るにも出られず暫く忍び居たるうち已におつ  
やには出いおは彌々胸に据兼て七助を一間に呼寄せ主いや七助其方は遺處を何所だと思ふ夜中  
といひ殊には又何か女を相手にして豊高な今の振舞旅人の入込此湯治場若問違でも出來た  
時には上のお名が出と云其所に心も付ずして法外な致し方左様な者は家來に置れぬ此場限に  
して暇を遣る切々其所を立居と戀の邪魔せし腹立紛れ日頃に似合ぬ一言と思は遣方は最猶落  
る涙を推拭(七)貴君は天魔が魅入たるかお情無共お言此處を何所だと敢言た貴君が何處た  
と思し召遂假初の旅の空素性も知れぬ女を捕へお戮れかは知れぬ共身元も遊とおれし無お國  
へ連れ行與傍に敵成坏とほそりや何事若夫等から問違ひ生じ内外の耳に入る時は人の入込む  
兼花の場所古田の家來牛尾田主水が女に溺れて云々の騒動有りしと取沙汰あらは貴君斗か殿様  
の御名の汚れと云ことばはよもお忘却は敵成舞其所を思て下郎奴が御立暇をば覺悟して來るを  
途中に待又有無を言せず追跡したは貴君のお身を大切に思ひたる故のと夫を然共思し召ぬと  
は餘といへばお情無と心の眞實打明て主人を諫むる七助か此物語は木置ねども丁敵差に限有  
ば夫は編を替巻を改め十編に委く説くべし

第五十五回

牛尾田主水は七助が主思ひなる一言に始めて夢の覺たる如く蓋たる顔を揚兼て差附向つ、居  
たりしが嬉く有て吐息助(主)ア、我ながら過つたり汝が居すば既にして那が色香に心を奪は  
れ身の一大事に及ぶ可を主水が武運の樂らざりしも全く汝が赤心故夫を左様とも思はずして

暇を道の法外のと云たが今更山目なく言辭辭は更々ない許して呉やれ七助と云に遣方は飛退  
きはつと耐りに平臥て頼一涙に稍暫一顧も得上ず粒入りが(七)エ、難有ふとさり升り心廣  
且那機敵にも足ぬ下郎奴が申上た一言をお取上下さつて慮外の辭をお尤も無反つてお響の  
お辭は千万兩のお金をば頂戴たより難有いと云顔熱敵打守り(主)聞ばきく程汝の心感思ふに  
中々腹からの下腹の子とは思はれぬと是れより七助が十一才の時主水の家門前に病臥ておた  
るを救ひ上今草履取には召使へと定て以前は由緒ある武士の血筋を見受たれば匿さず素性を  
白よとある優しき主人の詞葉につき以前宇和島の藩中にて父を浪崎宮内と唱へ正しき武士の  
累ねなりいか同じ家中の佞人なる沼澤傳五左衛門と云ものに従せられて遂に切腹したるよし  
母も程なく死去りて頼りなき身の只一人故郷を出て彷徨ふうち斗牛尾田の門前にて行到れ  
しを救ひ取れ此年月の御厚恩今まで口へは出さねども片時忘れぬ父の仇討取こも叶はずと  
も一太刀なりと恨みんと思ふ心は絶ねども受た御恩を報じもせず親の讐か討たしとてお主を  
餘所に爲べきならねば深くも素性を包しは斯る仔細の有故ぞと涙ながらに物語ば主水は信と  
形体を改ため(主)我が推量に毫違はず扱は汝は宇和島家にて由緒ある武士の子なりいか世が  
世の時て有うなら我が草履など掴むべき身の上にては有まじきを下郎と迄に成下れど父の恨  
みが報ひたひとは誰見上た武士の魂ひ其一言を聞く上は今より兄弟の義を結はん我をば兄と  
思ふべし我また汝を弟と思ひ力を添て父の仇沼澤とやらを討取て必ず本意を遂させん心安か  
れ七助と云れてはつと驚く迄に此方は頭を疊に摺付(七)重々厚きそのお恵み爾は去ながら且  
那さま下郎の我等と兄弟にはお情過て何とやら(主)ハテ苦うない去乍ら餘所の聞へも憚り  
有は時至夫迄は互の心は兄弟にて表向は矢張下郎の七助必ず人に洩すなと言葉の中に小夜更

九十二ろ



十三ろ  
て無よとの鐘の聞ゆるにぞ主水は臥へ七助も暇を告て自己が住下屋敷へぞ退きける斯て其次の朝敵に旅の用意を成有馬の温泉宿を驛足爲にぞ主水も流石におつやかとを其儘にして打捨あかれず以前の也女を竊に招き金五兩をは渡つ、戯れ事に云紛らし事機密に濟せしとぞ

長持うた「飯はア引てる」鈴鹿は曇るをアエ、引

合の土山雨が降るをアエ引

(八足)ア、どつこい何様だイ馬が物云た鈴鹿の飯だイト下上りする旅客の往來途絶ぬ都路や受も名に負近江なる其水口の驛路の脇本陣に駕を廻させ今晝休すみの牛尾田主水の若黨の六内(六)ヲヤ鎌平今方爰の棒端で閑遊つて通つた行列と陪臣者と見たか大層幅を以て通る奴じやねへか何でも五六百石も取と云のか頭駕籠か三挺往たノウ(鐘)然ラサ具足櫃に宇和島家中と皆を書て有たから四國侍だろ道中も那位を人数で爲たら面白からう鐘計が五六本も往たぜ(六)イヤ其槍で氣ついたら彼七助は何様したらう(かま)此身も先刻から氣に以て居のサ石部の宿で腹が痛くつて歩行かれねへから脚り馬でも雇つて乗て往から些との間且那のお草履を持って呉ろ其替りにはお餘は此身が馬の上へ擔いで往と言たから彼奴に餘を預けたが何でも晝休み迄には追着と言たにイヤア餘まり遅ひなア(彼)彼奴も小ばりのこい様を口は利けれど此云時に成とぐずくするので困らせきらアと言ふ時石部の方より以て追々來懸る旅人が是所より後の松原にて奴と侍士の大喧嘩を今見て來との噂咄しに若やと思ひ六内は様子を門七助に寸分進ぬ口實なれば六内も鎌平も打驚くのみ術をさし主水に斯と報知にぞ一ト間ノ理に休息する主水は聞より仰天して其侍が宇和島の家中と有若万一常敵と頃付ねらう傳五衛門をらざるか何は兎もあれ我が持餘を携へたり家來をば見殺しにせん御も無殊とに渠は

有馬にて書約事も有なれば須臾も怠らざるを忽然思案を定めつ、六内は後に隨て衆物初物のたぐひを守らせ鎌平一人を召連て飛が如に彼方なる並松原へぞ走行ける

第五十六回

夫より先に七助は石部の宿へ來りしころ持病の瘧(恙)起りほとく個に堪難ければ鎌平に草履を頼み其身は鎧を預かりて宿外より馬を雇ひ荷鞍の上に乗かりながら片手には鎧を擔片手に痛む胸先を伸し苦痛を忍びつ、既に石部と水口との間にある松原へ差掛りたる折社あれ向ふより來る武士の行列(先はらひ)ヤ、馬山馬を脇へ引けエ、氣の利ねへ馬士だト持つる杖を浪上て馬の尻をばした、か打ば件(けん)の馬に驚きけん頻に蹄り在ふにぞ此時迄もさし俯向き胸を押へし七助かの形勢に吃りして鞍の上にも堪難や真逆さまに落る時持たる鎧の石突にて通り懸し待の乗たる駕の窓を破て内へぐさぞ突入たる其時駕の裡より以て戸前をばたき蹴開て顯れ出たる暴戻武士顔に疵を受しと覺し流る、血は拭ひも敢ず怒れる聲を振立て(武士)者ども其叙を取逃すなト烈(れつ)き辭に家來の面々馬より落て七助かうごめく所を取て押へ持たる槍さへ奪ひ取て彼武士が目領りへ有無を云せず引据たる此形勢に七助は呆れ感ひつ更に又云降辭もあられれば只忙然たる計なり此時侍の武士は烈火の如く憶り立ち是非とも主人の名前を云と對つけく馬の側より血氣の若者三四人云はば其たと立應り踏やら踏るやら打くやら遠慮會傳も荒くれ武士か手込の賣に七助は髪は亂され衣類は破れ類も體血まぶれに駭の痛は付られ乍ら爰そ一世の大事と思へば眼を閉てたじろがす此形勢に責めくみし武士どもは呆れ果須臾(と)の休なるにぞ(七)ア、ヤ、且那様かた私(わが)の危相は此上もない不關(ふかん)でござい升れど是程道に利を御分(ごぶん)に遊はし升たら大方お願(ごん)も罷(ま)りたらうから何卒其餘はお返し



六され下さいまし御慈悲でござい升お情で御さい升コレ野み升と手を合せ詫つ口説つ種々に涙乍にかこちても争何開かぬ侍とも(侍)エ、強性を素直め明瞭の面体へ生肌を付させ乍端曲體で濟ては宇わ島家の恥辱を成は沼澤氏は許すと有とも我々か承知致さるや(沼澤)イヤ拙者拙も不用捨四の五のと面倒だ一寸試し五分試し此奴は是れ許す一又拙の主か此餘を自身に貸ひに来ならば渡事にして渡で遣う奴め斯ても主人を云すはもう是限だ覺悟せよと刀の柄に手を掛れば(七)ア、申一只今ちらりと承給はれハ宇は島のお家中で沼澤氏と御仰は若や傳五左衛門様とは貴公でござりませぬ口を問はれて那方は訝かし氣に(沼)主人の名も云す一て人の名を聞白痴者用をから知られた上はつ、んで詮せし如何にも我は宇わ島の中沼澤傳五左衛門だが我名を夫と知ればは向か子細か着ては詮はぬ今打放す奴なれとも譯を聞かぬも我り多し判然ぬかせト白服ゆれの七助屹度形状を改め(七)切は汝か傳五左衛門斯く云我は誰かと思ふ汝か爲に殺せられ敢なく非業の最期を遂へ浪崎宮内が一子たる七助なるを知らざるか今は是迄解落を片時忘れぬ父の誓一太刀なりとも恨みんと思心の屈きてか瀕らす汝が面体へ疵付たるは天の賜物汝も武士の敵ならは咄咄場にて勝負せよ勝て此身は切死と誓倍は既に爲たるを此で死するは身の本懐恨の刀茲て受よと身は散々に打振られ辱さへ自由に立兼るを論眼ながら立揚り準備の一刀ぬき申一沼澤目かけて切て算ればすは根幹と侍とも伊當なんとか立揚り潮の杖をば振閃か一欠腕に刀を打落し又さんくは打振れば憤ひへし七助は絶死すべしにまみれ息もたもげに眼閉する怒に任せて傳五左衛門足蹴にまたと蹴返つ、所と打笑ひ(沼)標は宮内の降よを汝も汝も父は其替肥せる罪の有故に命を棄たは自業自得人と其みん餘は無を我せ一事と思ひ違へ敵味はる事おかしい親の因果か子に報ひ命此世に成さからぬも我ら

愚者則は去さから夫程まで我を敵に思ふならさア立上で勝負せよ是丈云ても心付ぬは我ら敵に彼が来て不便や腹か振たのオ口程も無慮病者夫ても元は武士の子かト絶まで嘲ける器口重言事は口惜と七助は齒かみをさせど夥の人にうち搦へられて身うち動かず年頃日頃心を盡せし父の體たる沼澤を今日の前に置ながら立合ふ事も叶はぬとは能く武運に尽果し此身の上は何とせん父には孝を尽し得ず主人の爲には此餘をも所へ取れし不忠の罪是も難故傳五左衛門假令此儘死ぬる共生替り死替り恨みを晴さで置べきかト憤恨の眼尻血走る迄に那方を急度見上る物とも思はず傳五左衛門エー面倒な往生せよと言つ、刃をぬき放し既に斯く見し折しも思せき走來る牛尾田主水切はと思へは近寄て先町事に名を名乗り又家來の誤ちを段々折入て打詫れと相手飲々の沼澤等少しも聞入る様子なく却て敵々腹口をい勝負いたせと詰寄る其舉動も最悪きに當の相手の沼澤は下奴ながら兄弟の儀を侍びたる七助か父の敵を知るのみか其七助さへ手込に命命も既に危きを素より見透す心は有ねと故意を辭をやわらけて斯怒態に爲つるも渠等に飽まで非法を云せ其上にてと始める深き思慮有事成れば今は早急迄と思ひ定めし牛尾田主水か其返答は如何ならん次の巻を讀得て知らん

第五十七回

三十三  
 爾は主水は那者共に絶途過言を言察らせ彼石に心中怒を含めば今は斯よと脚を定めて沼澤氏に打對ひ(主)イヤナニ各々位然らば何程申してもお問濟はござらぬとか此上は是非に及ばぬ那方這方の用槍は無一箇々は面倒な皆纏掛に蒐らつせへと袴の股立瓜扶み下緒を取て襷手に執とり刀の鯉口くつろげつ、立はたかりたる勇士の形構へ始め卑下せし容子とは打て換りし形勢に沼澤與先へ進み出で丈の知たる青袴ひ他人の力を借るに及ばず我一人にて充分なり



急行ト立對へば(主)其高言は後のこと。卒先勝負と言つ、も刀をすらしりて横放せば此方も其に  
被合せ一上一下と斬結ぶ互ひに手練の切先は電光石火の月須與雌雄も別さりしが古田の家  
十三にて一人と首に聞かす主水が手の内電光石火と討込む刃を受損じたる傳五左衛門右の腕を打  
落されひるむを得たりと付入て拂ふ刃に又左の腕のつかひを研落せばウント討に仰様に倒れ  
たる儘動き得ず夫と見より同仲の侍どもは打驚き心に五分の怖は抱けど大勢を頼みに研に掛  
るを主水は搦する氣色なく左手に指添へ振もちつ、尻免二刀流の達人成ば瞬時に斬卷れど  
孰れも淺傷深手を追ひ今は仆れて近付者もあらねば刀を拭ふて四邊を見廻し此時迄も松陰に  
打苦されて苦しみながら早片息なる七助を抱き起しつ介抱て主コレ七助さぞ残念に思ふて有  
りか汝の親の敵と聞沼澤の輩は大伴自巳が討取て其許が怨を晴したる其所で見物爲たて有り  
な(七)ハイ旦那さま有難うござぬ升私はもうお蔭てお思ひが晴升たから思ひ置ことはござり  
ません是が此世のお暇をござい升(主)ア、コレく其様氣の弱いことを云てはならぬ汝の  
息の有中にまだ此上の本望を遂させて遣る事がある必ず心を落さず氣を儘にして待て居や  
れと用意の氣附藥を口に含ませ尙様々に勞いりつ、此方に倒れし沼澤が手足は研落されなが  
ら死も得遣ず居たりありがみ握で引すり來り主コレ七助是こそ汝が父の敵沼澤傳五衛門  
だぞ思ひの儘にさいなんだ日比の遠恨を晴すがよいと差付られて七助は早片時に成ながら  
餘りのことこの類いさにて我を忘れて起上り腰成一刀引ぬいて沼澤にのし懸り(七)いかに沼澤  
は五衛門殿前も云通り汝が爲に殺せられて罪無命を落され父の怨み母の無念今は主人のお情  
だて一時に復す七助は遠恨の切先受て見よと刀を目先に突付と手足を既に切落され弱り果た  
る沼澤が物首こそ討はぬにや頻りに目を見張のみ返す辭も有ざるを七助飽まで罵り懸して胸

の巻を三刀まで事も越れと刺貫くにござりしもの傳五左衛門も須臾はもたへず一みしが早急絶  
上存様に無地心や續けん其に悪入る七助は伏重してござりたりける主水は不便と思ひながら  
又腫痛も有されば石野水口陣の宿役人等を招き寄せて事の子細を詢問し後日遠慮の次第も  
あらば早速古田家へ申出よと諭る力なく心得ざる七助が死骸をば其邊の寺へ葬りつ、續て  
其地を覆足して橋板に立陣りに懸隔も古田の家と思ひ懸き凶事有て其家斷絶したりし  
かば主水も涙々の身も成て少時東西陣崎うら山崎の國伏見の里にて又一條の物知りあり其趣  
事を尋ねるに伏見の里より路の隔遠くもあらぬ深草野邊早小夜更て亥の刻過ぎ廿日餘のこと  
さればまだ月代も出やらず星の光りを輝地に露の路芝踏分つ、尋ね來りし二人連男は歳ま  
だ十七八の前懸さへも刺り落さぬ露を欺く美少年女は越に二ツ三ツ年増ならと思はるれど化  
証乗する顔立のぞつとする程美しく甚此女は榎木町の八文字屋と叫れたる結妓屋の抱にて名  
を彌美と持懸さし許多の客の其中にて新之丞と其名を呼ぶ是なる若衆に馴染しが濱邊深き伎  
術有て今よひ新之丞と此處へ來り情死させんと計りつ、既に涙に昏居たるが此ては果と新之  
丞は我と心を取置し刃をすらしりぬき放し既に此よと見へたるは最も危うきことなりけり

第五十八回

期る折しも見へ懸れに時附來りし其漢子か四五人一度に懸れ出二人は矢庭に濱菱を抱きか、  
へて馳去れば猶る二人は新之丞を思ふ存分打叩き息さへ即に絶んとせし危き處へ折能く通り  
四一一個の武士羽織大小しとやかに頭巾に面を包む其體一からざる風俗なるが携へ來りし提  
灯にて此有様を見るよりも思ふ子細の有けに(武)悪者待てと聲掛て提灯片手に割て入り先  
に進み老若男子の持たる棒を奪ひ取縦横無用に打討す最も鋭き手の内にコリヤ敵討と聲渡す

五十三







讀しよ

且那様

人々御元

はま

ふ

讀むより傳り新之丞は覺へず膝を立直り(新)モレ此文を貴公は何様して御所持のでござの  
 升(二万)イヤナニ他は仔細ないが此身が遠慮來途中で思はず拾つた其一通封じが切て居た故  
 に心とかなく破ひて見ばふかい巧の此文自然なるに前か此場の仕儀如何やら符合する故に夫  
 て御覽に入れたのサト聞より忽然新之丞は目色を替て立止り又取出さんとする袖を再び隘かと  
 引止(二万)是や貴所に何處へ行ーやる(新)ハテ知れた事此身は他は白痴にせーのみか殺さ  
 んとまで巧みー演義生て置ては男の立止禁立なるは情に似て戻つて隠みに思ひ升コレ見逃  
 してと云つゝも御座さんとも身をまぬくを向も確と抱つ、望みある身と云乍ら候一箇の婦人の  
 爲に大事を棄るは縁の返りと言葉を馳して脱輪せは越に隠ひし新之丞も始めて夢の覺たる如  
 く仕舞も一で居たりける

第五十九回

新之丞は二刀齋の敵めは其初も始めて情て須臾首を断たるのみ計も有で居たりしが覺へず眞  
 まはるく、其後、まゝに御座さんとも身をまぬくを向も確と抱つ、望みある身と云乍ら候一箇の婦人の  
 爲に大事を棄るは縁の返りと言葉を馳して脱輪せは越に隠ひし新之丞も始めて夢の覺たる如  
 く仕舞も一で居たりける

御にも掛つた御敵討迷ひの妻も時よりた實私の父親は人手に掛つて非業の最期その儘が討た  
 きた箇様に派々致すうち實に若氣の誤にてふと色里に通ひ染斯言不買な女と知す親の無念も  
 餘所にせー不孝の罰は目の當り今更悔とも返らぬと切ても申譯に切腹な一たき我等が望み  
 是れ計かりは見通してと言より速く肌押くつろげ既に自害と見ゆるにぞ(二万)ア、コレ待た  
 新之丞どの夫も矢強心得違ひ併し是迄の非を悔み切腹せんとは流石は武士其お心なら敵も討  
 てやう今死ぬ命生存て少の恥を忍ばれなば頼て敵を討めはせ本意を遂た其時に今の汚名は愈  
 地消やう思ひ事は言ぬから此身が意見に就なせト脱輪されて新之丞は彌々迷ひ附たりけん  
 士に頭を掲げて(新)段々厚い御信切此上は何事も貴公の仰にいたがひませやうとは言者の甲  
 斐ない私力とも便りとも先思ふは貴公計り今ハ包んで陸の無親の實名救の家名實と箇様と云  
 んとするを二刀齋はあー禁め(二万)イヤ、夫も心得違ひ大約大事を犯た者が敵の家名を放  
 心々々と口外するは危忽千万此身は聞ても他言はせぬが誓へども云壁に耳若此事が餘所へ洩  
 て敵にでも知られた時には身の禍ひと成は必定只夫のみの事では無お前は敵を討氣でも今ハ  
 中々及ぶまい斯白地に云つたなら心に障るか知ないが此身は飽が嫌い故有の儘に云升が最前  
 おまへが願者共を相手になされた御様子では失禮ながら危い懸射入ぬお世話の様だけれ共此  
 身を力に頼み度と云ーやつた計も有は是から此身の所へ來て一年修行を爲て見ませへお前も  
 敵は討たいと云一念で精を出し此身も其氣で敵へたら天晴手利に成で有り夫までには上上  
 では敵の家名も密に聞て討せて逃せる時節も有り何と然では有まいかと云に彌々感服して新  
 之丞は其場にて直探師弟の約をなし二刀齋に押はれて伏見の里へぞ趣きける

九十三

斯て後二刀齋は榎木町の跡をるかの八文字屋の主を招き拾ひ一交を證據にして彌々と掛合



わ、み金の取られれば、今度の騒動は、漢菱が工をると明白に分り、上段に候の  
 新之丞は、昨夜も、廻られ往深く隠れて居たり、八文字屋より見出し、て其身の代を思ひ  
 の儘に掛合詰で取たる、と故新之丞には仔細もなく、事便に済むとぞ、斯て其後兩人は、執れも  
 秘報報ひ来て、我家にも、付果かた、紺織は、出奔、一泊、身の中に、良らぬ、種物、一、つ、其、其、其  
 と、絶難ければ、誰、誰、側へも、寄附ねは、終に、袖を、と、成下、一、が、果は、何と、成に、けん、終る、所を、知らず  
 と、なん、選は、是、後、の、物、所、なり、

斯て、又、新之丞は、伏見の里に至り、より、日夜、稽古に、油、油、なく、其、間、には、家内の、事も、若、代、りに、立、働  
 き、或は、師匠と、共に、出、又、支、圖の、取次を、も、り、て、最、ま、め、や、か、に、事、へ、一、が、は、二、刀、齊、も、彼、が、心、の、殊、勝  
 むるを、不便に、思ひ、心を、結、して、故、ゆる、程に、此、方、は、修、行、に、怠り、無、れ、は、未、だ、一、稔、なら、さ、る、に、目、に、立  
 許、上、達、して、今、は、敵、に出、會、とも、後、れ、は、取、一、と、師匠も、云、ひ、其、身、も、自、か、ら、頼、母、く、思、へ、る、程、に、成、け、る  
 か、折、り、も、秋、の、初、旬、二、刀、齋、の、武、具、は、素、り、衣、類、書、物、の、類、を、虫、干、する、と、て、取、置、一、を、取、收、め、ん、と、做  
 した、る、時、書、物、の中、に、來、み、手、紙、の、膝、の、邊、り、に、落、し、を、見、は、牛、尾、田、主、水、標、と、云、上、書、の、一、で、有、に、せ  
 新之丞は、心の理に思ひ合する事や有けんはつと計りに驚きしが猶も四機を見廻せば彼方の器  
 の間紙にも那方の衣服の襟紙にも仲の名前を記せし反右の幾枚とも無有しかはいよく以て  
 訝かしく折柄側にて同やうに干たる着物を疊んであるお杉と呼ぶ、下婢は年久しく二刀齋に  
 召使はる、女なれば何氣なき体にて款待て其名前を尋ぬ、所是も那か古田家に在せし頃のお名  
 前と聞て驚く新之丞只茫然と呆れし時奥の方にて二刀齋新之丞は何處に居る新之丞々々々々  
 呼立ちらる、に驚きてへいと計に身を起し其體奥へ走り往く

新之丞は、昨夜も、廻られ往深く隠れて居たり、八文字屋より見出し、て其身の代を思ひ  
 の儘に掛合詰で取たる、と故新之丞には仔細もなく、事便に済むとぞ、斯て其後兩人は、執れも  
 秘報報ひ来て、我家にも、付果かた、紺織は、出奔、一泊、身の中に、良らぬ、種物、一、つ、其、其、其  
 と、絶難ければ、誰、誰、側へも、寄附ねは、終に、袖を、と、成下、一、が、果は、何と、成に、けん、終る、所を、知らず  
 と、なん、選は、是、後、の、物、所、なり、

斯て、又、新之丞は、伏見の里に至り、より、日夜、稽古に、油、油、なく、其、間、には、家内の、事も、若、代、りに、立、働  
 き、或は、師匠と、共に、出、又、支、圖の、取次を、も、り、て、最、ま、め、や、か、に、事、へ、一、が、は、二、刀、齊、も、彼、が、心、の、殊、勝  
 むるを、不便に、思ひ、心を、結、して、故、ゆる、程に、此、方、は、修、行、に、怠り、無、れ、は、未、だ、一、稔、なら、さ、る、に、目、に、立  
 許、上、達、して、今、は、敵、に出、會、とも、後、れ、は、取、一、と、師匠も、云、ひ、其、身、も、自、か、ら、頼、母、く、思、へ、る、程、に、成、け、る  
 か、折、り、も、秋、の、初、旬、二、刀、齋、の、武、具、は、素、り、衣、類、書、物、の、類、を、虫、干、する、と、て、取、置、一、を、取、收、め、ん、と、做  
 した、る、時、書、物、の中、に、來、み、手、紙、の、膝、の、邊、り、に、落、し、を、見、は、牛、尾、田、主、水、標、と、云、上、書、の、一、で、有、に、せ  
 新之丞は、心の理に思ひ合する事や有けんはつと計りに驚きしが猶も四機を見廻せば彼方の器  
 の間紙にも那方の衣服の襟紙にも仲の名前を記せし反右の幾枚とも無有しかはいよく以て  
 訝かしく折柄側にて同やうに干たる着物を疊んであるお杉と呼ぶ、下婢は年久しく二刀齋に  
 召使はる、女なれば何氣なき体にて款待て其名前を尋ぬ、所是も那か古田家に在せし頃のお名  
 前と聞て驚く新之丞只茫然と呆れし時奥の方にて二刀齋新之丞は何處に居る新之丞々々々々  
 呼立ちらる、に驚きてへいと計に身を起し其體奥へ走り往く



入切は左様な事も無物でございませうか(二刀)ナニ此身せんぞのは中々手に入らぬ云で  
 はせいの共不慮と云のが首は、船新から起る事ナ然かと思て今にも人が切死らうかと冷々思  
 へて用心を以て居たからと云て中々つゝ物でいな心を胸下に落付て天地と我をななじ心  
 に成て居れば自分の油断もなから中々不慮を耐うとて耐れる物ではないノナ思か今言た  
 不動心の場所だか其處迄に至て見ないでは別り難から何ても修行か肝心たト唯の中比次の  
 間より下女のお杉か郎を出し(すき)且那様御願か能うムゆ升(二刀)ナ、仕度か能なら直に喰  
 やう新之丞も部屋へ往て休息をするかいひと言れてへいト新之丞は暇を告知つ、其儘に勝手  
 の方へと立て往斯て又二刀齋は夜食も既に果たるに今宵は急の書物の習書讀て居り一を寫し  
 果んと思に甲夜の程より机の掛り亥の刻迄餘念もなく筆を採つ、居る所へ庭の切戸を推  
 開て飛石傳に密々忍び寄たる一個の曲者覆面頭市に黒装束腕に太小袂、つゝ手に一條の槍  
 を引提内の様子を窺ひ澄し時分は能とや思ひけん不慮に突出す槍先を驚き一がらも二刀齋再  
 三回身を開き傍に置し短刀を取より速く抜合せ受つ流しつ戦へと槍は野菊玉の暗なれば暫時  
 勝負も判ざりけり

第六十一回

方盤は消て眞の闇二刀齋は曲者が無法に突出す槍の穂先を右左りと身を轉つ、抜合せ少時  
 間ふ程も非横に拂し短刀に繰出す槍の只中を斜に代られて曲者が驚き乍も不慮なる一刀  
 被より早く跳り懸て伏附るを暗にも電光白刃の光りに丁と受たる手練の速業返刃に曲者の  
 肩先深伏付たる此物書に驚きて下女のお杉が勝手より響洞片手に馳出る日影により二刀齋は  
 今朝例せし曲者の襟髪取て引起し冠り頭巾を取退れば此曲者は別人ならず又彼新之丞成に

そ是はと計呆れ果路も無て打守れば新之丞は手に携し剣を遙に投給ぬと苦き息をホット吐  
 (新)有難や恭なや今ぞ念願成就して貴君の御手に掛し事歎ひ何ろ之に遇んと言に此方討か  
 はしく(二刀)我か手に懸る本望とは(新)叔斯う計申ては御合殿か参申まい基私には伊豫の國守  
 和島の藩中沼澤傳五左衛門の俸にて幼名金剛と呼れ一者父は先年水口にて其許様の御手に掛  
 果無最期を送たる由承給はり一口惜き其時吾身は十五才母には幼なき頃に別れ他に親族は有  
 ん共身一にても父の敵一太刀也と怨んと主君に願ひて暇を乞て敵は古田の家中にて牛尾田主  
 水と聞しを當に近江の國迄来て聞けは思ひ掛無古田殿には家断絶を致されて跡の行衛不知と  
 有に忽地望みを失ひいか去とて可止事ならぬは所々方々と尋ねる内に敵に我名を知られいと  
 母方の姓なれば福岡新之丞を襲名せしに不圖一た事から撞木町なるかの濱邊に馴染より彼  
 か敵偵に乗られて命を可落所其許様の情にてお救ひ下さるのみ不成永くお家に止宿られて  
 武術の御指南被りし御恩は海山替難若も御身に凶事杯有は我一命に換て成其受たる御恩を報  
 んと思ひ込つて居たりしに最前不圖土用手の片付物をしたる時反古の中より牛尾田主水と敵  
 の名前を見出してお杉に問へば斯うくと始て知つた貴君の御素生扱は此家の先生か尋ねる  
 敵に有しわと目も潰る、醫座の仰天假令敵ても命の恩人今更に名告懸射に不射懸と義理然は  
 とて現在の父を討れし敵を知りて彼々として有には父へ對して不幸也孝を立れば思に叛を思  
 ろを思は子の道を欠わは不成此身切棄奈何や爲と右つ左つ胸に恩案を運せしが命の恩と生の恩  
 共に 念さんにはこの身を捨るにしくは無去は此より書讀一切腹爲敵イヤく同命を  
 三落すなら一太刀成と刃を交へ御身の手にて討れん者と思ながらも明々地に敵と呼掛斬掛とも  
 お情深き其許尙我が命を助んとて容易手に掛給はし術こそ有と思案を定め忍び姿に出立つる



慥をば突入し故曲者をりと思はれて事の愛には及びし也と誓し息の下より一伍一付を物談れば二刀齋は歎息して二刀(一)寔に見上た其心慮敵同志が弟子と成師匠と成も過去の因縁夫に就ても爾の父御沼澤氏討取しも簡様々々云々にて實に余曠無事成しに其親のみか其子さへ可憐者の若者を殺すは何の因果ぞや最前汝の言葉の内に縦ひ名人上手にても不意を討る其時は奈何者やも尋ねしは我に用心爲んと云心成んと今迄も思ひも附居たりしに我生最悪也夫と查らば漢は負せに早過事一たレト云ひ掛て眼を瞬き新之丞は首を揚(新)此は先生にも似合しからぬ女々々事宣ふ者か我が此命は過し夜に失ふ可を今日迄も存命たるは御身の賜もの今更想ひ置事無云ふ可事は云ひ果しを何時迄苦痛を見せ玉ふぞ散々首を刎てよト身を指寄つ、覺悟の合掌便乍も二刀齋は此一言に被斬(二刀)實に云はるれば嗚有ん去ば苦痛を助る爲此世の暇を取らせんと言ひつ、後ろに立掛再び刃を取り直して見にぞ振揚る間も無氣れ果散なき新之丞が首は前にぞ落たりけり

○是より次の物談は三十余年も過し事と知可し

播磨の國赤穂の城より四五里隔し方在所に杉の先祖結田せし最も晴々草屋に今宵止宿りし二人の六部元宇和島の藩士にて大蘭品藏通和野入平といふ者なるが仔細あつて三十四五年諸國を遍歴する由を主人の二方に物談れば此は珍しき事どもなり苦からずば其仔細を吾等に語り聞かれよと云れて二人は慚愧いかなら扱談し出せる身の上話しは次の回に具に認べし

第六十二回

扱も宇和島の藩中に其頃沼澤金彌とて年十五才に成けるが花も可差前髪振にかの入平と品藏は互ひに思ひを惱しつ、思の丈を筆にて言はせ向表にもかき口説しに其比は纏て男色流行の

前稱せれば金彌も二人の赤心有を不憎は思へ共入平に身を任すれば品藏に義理立す又品藏に聞は入平に不御故此譯を以て双方へ隔りに及びしに二人はさしも若氣の短慮の一旦心を懸たる者を此儘に打捨置ては武士の一分立難爾は双方勝負を決し刀の上にて思ひを遂んと或日入平品藏が果し合をば做んとせしを金彌は聞より驚きて其場所へ駆付つ、二人を儘々に慰撫へ肩不成此身をば其程迄に思し召二人のお心差何れに否とは不申能ねば聊道に背共此方は二人に此の身をお任せ申升る故お互ひに遺恨無是より三人兄弟の契りを共に結びたしと言案を盡して言ひしかば品藏も入平も茲に忽地心解て互ひに嫉妬の念を去り共に水魚の中と成て金彌を寵愛爲程に金彌が父傳五左衛門水口の松原にて牛尾田王水と云ふ者に討れたる故により金彌は父の仇打にとて出立を爲御り那兩人も力を添へて助太刀做し度思へ共兄弟の儀は私事にて俗に仕官の身の上なれば思ふに任せず打過しに始金彌を手に入れんとて果合を做んと爲事一家中の人々は雖とて知ぬ者も有ねば命に掛て兄弟の契りを結ばんと云ひし者が今金彌の必死に臨み余所と詠めて居ると云は入平も品藏も始に似合ぬ扱處武士義を知り實ある者なりと浩る時こそ命を捨て、彼か方に可成は流石は命が惜いと見へる夫に就ても此年頃兄と頼みて身を任した金彌は寔に可愛相なと家中の者の惡口が早晩二人の耳に入り最口惜く思ふにそ兩人竊かに相談して主君より身の暇を乞請金彌が跡を離しつ、所々方々經巡る事既に三十五年に及へと金彌の行術は云に不及更に敵の手懸りさへ今に知ざる事の極き入平品藏兩人が交代に物語るを熟々聞て二刀齋は一回は驚きしが大器量の老人故御免爾と打笑らひ(二刀)始て知たお前方のお身の上義の爲に家を捨此年月の御心算爾こそと察しられ升がお歡び談成まは今は何をか匿しませう敵と云は則ち拙者はより前回の事情一伍一什物語り竟に角帯帯に御氣



を決して是迄の心盡しを晴らす可しと猶も熱闘なりたる上直さま赤穂の城に駐つけ事然やと  
 訴出しに鹽谷殿開一被召遣は珍らき智耐なり城下外の松原にて早速申附よと有て則檢使の  
 六十 役人に警固の人敷を差出さるれハ其沙汰忍地四方へ聞へ是を見んとて遠近より走集る見物は  
 乍左山を成程に最晴がまき事なりけり然は又村長は是等の由を開歸りりの三人に報るに  
 双方共に歡びて又村長に伴はれ城下外の松原に既にして到るほとに入平も品藏も供に五十才  
 の坂を越て早壯年には有ね共二刀齋が老巧て腰も斜に届りに脱れは猶壯なるに三十余年の本  
 望を遂るは今此時に有と思ふ心の勇るれは縦ひ那者武術饒て大丈夫の體有とも丈の知れたる  
 精熟此兩人が立對はんに何程の事有可と恠る時の爲にとて兼て用意の衣服大小笈の匣に取置  
 一を取出して互に懸見苦一からす打立つ、四邊を拂て立出れば夫には引替二刀齋ハ爾のみ身  
 形も取繕はず僅に大小二振の木刀計を腰に横へ三箇等しく檢使に對ひ名を名乗意趣を演て巴  
 に勝負に及ばんと爲にう檢使を始め許多の見物皆手に汗を握りつ、首を伸して詠居る此段未  
 だ長けれども紙目爰に限り有は其立合の趣は次回に説べし

第六十三回

酒る所へ見物の中左右に推分て二八計の一個の娘女が矢來の姿へ走り入り警固の武士に打對  
 ひて(女兒)私は二刀齋の女兒て御在升が片島の親類の所へ參つて居りまゝ今朝其方から歸  
 り道に此處を聞きつた柄宙を飛で駆けまゝた相手は二人の其上に未マア血氣壯の人達私の親  
 は御覽の通り老衰致して居りすれば勝負の程が心元無御座升及はぬ乍も私か助太刀を致した  
 り御座升柄何卒お宥り下さい升様何分お願ひ申升と思ひ入て願ひに警固の役人打聞て敵の  
 行かぬ處女には健氣なる其願ひ去乍警打に助太刀と云事は難宥節なれば双方心得の上ならて

は向とも斗らぬ難き故先二刀齋  
 に申聞け集が所存を承まはれ其  
 上にて時宜に因は相手の者へは  
 我々より申聞する事も有んと  
 説さといつ、二刀齋に是等の由  
 を聞されと素より剛氣の老人も  
 是争で助力を願ひべき娘を論  
 て退けさせ仲の木刀にて立對へ  
 ば最初に出し太閤品藏心中充分  
 の怒を懐き無二無三に斬て懸れ  
 と此方は得たる手練の腕前飛鳥  
 の如き働きして遂に品藏を打卷  
 り吐痰や此よと見ゆるにぞ堪り  
 兼たる入平が早外聞も厭はばこ  
 そ有無をも言はず左りより討て  
 腰を物ともせず左手に持し木刀  
 にて是も同く方れば此助太刀に  
 品藏は僅に力を得りけん色を直  
 してと双方より透も不在討込む太刀風何に思て有ね共二刀齋は此年比鍛に練し藝術なれハ刃



七十回

品藏は僅に力を得りけん色を直してと双方より透も不在討込む太刀風何に思て有ね共二刀齋は此年比鍛に練し藝術なれハ刃



の中に在るも聊か動する氣色も無右に當り左りに拂ふ飛鳥の如く動は血氣盛の若者にも劣る可も見へざるにそ品類も入平も心計は怒れ其惚心汗を没流す途次第々々に戦ひ勝て討太刀千鳥に成かは二刀齋は思ふ様始よりして彼等が手の理唯一討に否さん事難くも有ぬ所爲年三十五年の年月を尋ね廻観 難辛苦を仇にさせ人も本意成ん附けとて彼等が所行義の爲とは言作金彌が色香に迷ひたる程怒よりして事起人の批判の後めたさに助太刀をさんと出國せし斯るたはけた白痴者に老去ばひ一命なりとて求めて失ふ可に非ずや是程に戦ふたれば定めて果等か心にも及び難事を知りて其に母情も究めつらんと去は今世の暇を取らせ迷ひの夢を驚させ臭んと右より進品織が折込む刃を引外丁と討たる木刀の手練の手の理不遇す水も不埒品織が首は遙に飛散つたり是にを驚く入平が怯むを得たりと陥入て左刃に拂ひ一拳のさへに腰の鐵を打離され二ツに成てり倒れける此有様に群衆の見物満見とと響る聲暫時は鳴りも止ざる理に娘は覺へず馳出て天を拜し地を拜し悦び勇を道徳なる

斯て檢使の時に赤穂の勢に立歸り此旨具に言上爲に鹽谷殿開敷召て殊の外感じ給ひ是非を抛んと言るれど名刺を好む三刀齋強て御辭退申せしより餘義なく其悴又之丞を百石にて召出されしが此又之丞も父に不肖賢勇秀一者なれば追々に盤用されて高百五十石に及り鹽谷家は誠心したる也爾はにや討入の夜も二刀を持て敵を離せ比類無効せしも父三刀齋より授けたる家傳の妙言を得し故也とぞ猶此外に又之丞の上には種々の餘談有哉牛尾田のみ傳にては番官禮儀給はんかと次の回は物語他事及ぶ

牛尾田高致

第六十四回

八百屋の聲一太東冬菜、冬菜の仕廻は宜うとさも焼たる商人が賣行く後より一個の仲間(仲間)シイ八百屋さん一寸と待ね(やほや)ア冬菜計は成やした仕廻故負て置やせう(仲間)ナニそんな者は入ら無が此身の旦那が目前に何だか逢てへといつた那方の茶店に待つて御座故一寸来て呉ませへ(やほ)夫じやア葉を買ひて下さるのじやア御坐せし無か(仲間)何様だか知ら無が速く來ませへト引立られて不性々々に後に次ッ、行程にかの仲間茶店に至門に八百屋を待たせ置て主人に斯と告いと覺敷再ひ其處へ立出來たり(仲間)旦那は奥の座敷に御座て爰へ呼へと言はつーやる故草鞋を脱で上ませへトおはれて八百屋は合點もかねと否ともいはれず足を洗ふて其儘奥の一下間に至は五十餘りの武士が其處へくを呼ひ入乍ら四邊見廻し小聲に(侍)貴様は婿の寒助じやア無かと問はれて八百屋は肝を潰し姑と返事に差支ゆるにぞ(仲間)イヤサ貴様の吃りより此身が貴様の粉打を見てとんきに吃り爲たか知れなんだが途中で物を云ひ掛ては供の男聞前も有と想つた故此茶店へ呼び入て家來には外に用事を云付て先へ歸した故向も慮慮を事は無が何にしても貴様の妻いかに涙人の所業に困り尾羽うち枯したからと云て夫が鹽谷の家來若村寒助とは何様見ても思はれ無(かん助)イヤ最う左内様貴脚にた目に懸りますの對に面目次第も無事で御座升が私も當所へ下りまゝて柄何卒宜い住居も御座ます故主取を致したい者と存居り升内大煩ひと致しまゝて已に命も危ひ處を漸々遊れまゝて此通り闘は大丈夫に成まゝしたか設計は貯へて居りまゝた金子も其物入に遺果しまゝて遂々こんな見苦者に成て仕舞まゝたか只今の所ては決句是も氣樂で能かと存ます夫に就ても不思議なは左内様貴公は播州三日月の御城内で郡役所をお勤なさるとの事で御在まゝたから容易此録



















腹仰せ付られし由致にも定て愁傷ならん成も力を落したり就ては勘山か寒冬とやらん附が方に在由なるが最早雨線の心も有まじ事は渠が妻成りとも醫家において扶持を與え奥が手元は召仕は、予に於ても本意成へし其方が娘の事故心の儘に成事なら曲でも奉公致させよと思ひかけ無主君の仰せに難有涙にむせびつ、畏り一段ん受して立歸りつゝ云々と女兒との間に云聞するにぞ夫が先にも否は又兼て悔悟の上から若も良夫の存命で逢る、事も有んがと思ひし甲斐の有はこそ此程同志の面々と共に切腹せしむる云使りを聞し其時は其身も共に刀に伏し同じ道にとも思ひしを雨親に止められ難有は厄も姿を變良夫の後世を弔はんと浮世の事は思ひ捨しに今また主君の仰により奉公致し御内を聊か本意に有ねとも冥加に餘りて難き君の恵みに背れ無地主は生涯奉公成れを任案を定め夫より醫家の奥方の腰元を召しこれしが歳八十に及ぶ今更に怠る心なく終に勤め死を爲すかば其功により君の命により新知し石の椀を賜り兄左太郎の次男を以て此家の養子と爲是を中村勘助と名告らせしより其家代の中村氏にて今尙繁昌したりとぞ

第七十回

茲に義黨の一人なる相原江介と呼ぶ、は赤穂を退散したる後大屋の内意を受直に關東に走下り敵の屋敷に程遠からず思所相生町の片邊りに奥服小唄類の店を出し其身は松城五兵衛と變名なり同じ義士の三人たる倉橋全助と云者を假に和七と名告せて其店の手代と爲男世帯て暮す程に五兵衛は何時か店を守り和七は又荷を背負て高野屋敷の近邊の得意を求めて暫歩き敵の様子を伺へとも尙宜き手づるも得ざりしに此比此家の得意となりしお聞と云る算婦あり年頃三十八九にて厭身たらしき女なるが何時和七の容貌に惚れ付つ廻りつ極口説きつ今日も注

文に假托て和七の顔を見に来り思ふ心を夫と無く目顔で知せに歸りたる跡見送て五兵衛は打笑みお前那内家さんと情曲に成ちやあ何様だらう(わ)コレサ親方戯言を云ちやいけ引んせめんを艶姿ツたらしい一寸見ても小胸の圓く成様な女が(五)然ばサ那女のじやらけた風俗を言ちやあ此身ても否だと思ふから年の若い御主の了簡じやア見向て見る氣も有まいが爰に一の咄まがあるト四邊を見廻し小唄成(五)おねーの爲に此身に爲る親方の手代のと云つて居る藥を者の賣と云へば互ひに朋輩大屋敷の内意を受て敵の椀子をさぐらうと干々に心を碎ても高の屋敷は用心嚴しく出入をする事も叶は無ので仇に月日を送るのはお互ひに本意の無事だから何卒能手づるが欲しい物だと思ふ折柄幸ひなのは今の内儀さんち主も聞て知て居るらと那亭主と云のは高の屋敷のお金の御用達で其亭主の死去した跡では那内儀さんが後家で居ゆから御用を聞て師直公のお側まで酒のお相手なんぞに出ると云障だからあの女を手に入て見ませへ夫こそ奥向の様子まで手に取やうにも知れぬし間が能は那屋敷の出入の叶ふ様にも成まい者でもね(わ)せ然さへ成ば屋敷の勝手は知らず見振ると云物だが何と一思接して見ちやア如何だらう(わ)なる程左様いはれて見れば夫を物だが併此方は其了簡でも大きに先の心が然で無つたら可笑なものでも有ませう(五)其やア此身一寸一目にも向ふの腹は知切て居るかから大丈夫だが言はれぬ如く有めへけれと屋敷の様子を探らうとして此方の身元を知れね(わ)様にするが宜せ(わ)其處は私も呑込で居るから氣遣つてお呉なざるを夫の宜が今日は色々な事商ひに出るのが大きに遅くなりやした昨日注文の有た所へ一寸往て参りやせう(五)そりやア御苦勞を譯たノウ何なら今日は休んで翌日の事とすれば能(わ)今の身分では世渡りで有れば當分の事ながら得意先は大事に爲て置にやア成やすめ(五)夫も云ば其を物かアの

九十五



う夫じや序に少し頼みた(事)有が青柳橋の方へは往ね(わ)か(わ)丁度彼方を通りやすが青柳橋なら小雛さんの所か子(五)然らず那女に些と見て遣て(用)有がわら一寸と一筆書うら仕度(事)をきて居てお呉な(わ)エ、おるりとお書させ(と)言内五兵衛は書状を認め是を頼むは請取和七はそこへ出掛けり

什磨此小雛は何者ぞとこれ五兵衛の妹なるが仕細ありて幼少より浪花にて成長糸竹の業に妙を得たるに其容色の美しければ五兵衛が関東に下る時渠をも伴ひ来りつ、敵の様子を探るべき方面の種にも成んかと青柳橋の頃迄とせし思ひの外に評判好終には五兵衛の計り一如く此小雛が前の屋敷へ手づるを得るの事に至る猶委細は次の巻に解現すを聞て知らん

第七十一回

川を見はらす料理茶屋の二階にさ、ゆく客の慶(客)ヤンヤンぐ小雛の松盛一何時も替らぬるらしい物選もの一寸一葎飲玉(小ひな)ヲヤ又私で御升かへ是やアひとつお手元を拜見が爲た(い)じやア有ませんか(客)イヤく此身は冷なみく(と)然も愛に居る小糸の酌で、ウ小糸おぬーが儲に証人であらうがのサアく小雛香だぐ(と)酒も言せる高調子向れも笑ひ直ぐ中又外の酔者なども来りていよく座中は賑やかに成客も太極様と成し比茶屋の女が小雛の袖一寸と引故小雛は夫と心得て着替に行振をして折好所て其坐を立ば彼茶屋の女も附て来て女、小雛さんト云乍ら耳の側へ口を寄せ何ういそく(耳)は小雛は覺へず莞爾して(ひな)具にお前の御深切は死でも忘れ無(女)ア、余計な事を言無て遠く顔を見てお出ロト宵中を一寸と蹴く真似を爲に小雛は嬉しそりに莞爾笑ひながらいらそく(階)子を下りて往く其時遠方の塵先なる生垣の小雛は忍のび一和七と顔を見合せて(ひな)和七さん能来てお呉たぞ(と)願待遣て

お出だつたらうけれど、何か坐敷が(わ)をりやア此身(と)居る(と)合お情に(と)は茶屋の内証で呼で呉ると頼んじや遣たけれど、方(と)座敷の外へ悪(と)者(と)氣を懸て居る(と)お出で来られたのう向たか夫そり二階が賑やか(と)何處の(と)客だ(と)ひな(と)聞は(と)い(と)まの御家中で子(と)一(と)個(と)は(と)お留守(と)だ(と)云(と)事(と)有(と)升(と)夫(と)に(と)高(と)利(と)屋(と)の(と)お(と)か(と)み(と)さん(と)来(と)て(と)おん(と)て(と)有(と)升(と)よ(と)高(と)利(と)屋(と)は(と)美(と)鳥(と)町(と)の(と)じ(と)や(と)ア(と)ね(と)か(と)ひ(と)な(と)ア(と)わ(と)其(と)奴(と)は(と)飛(と)た(と)あ(と)つ(と)か(と)お(と)る(と)ア(と)ひ(と)な(と)ヲ(と)夫(と)じ(と)や(と)ア(と)那(と)お(と)か(と)み(と)さん(と)知(と)て(と)お(と)在(と)な(と)さ(と)る(と)の(と)か(と)油(と)断(と)が(と)な(と)ら(と)無(と)子(と)わ(と)何(と)若(と)ヤ(と)ア(と)ひ(と)な(と)其(と)だ(と)つ(と)て(と)あ(と)の(と)お(と)か(と)み(と)様(と)は(と)遠(と)に(と)男(と)好(と)だ(と)と(と)云(と)評(と)判(と)だ(と)の(と)に(と)い(と)か(と)も(と)脚(と)家(と)隊(と)だ(と)と(と)云(と)事(と)だ(と)か(と)ら(と)前(と)は(と)ん(と)何(と)線(と)か(と)爲(と)お(と)出(と)の(と)じ(と)や(と)ア(と)な(と)い(と)か(と)わ(と)馬(と)鹿(と)ア(と)言(と)物(と)だ(と)あ(と)ん(と)な(と)奴(と)が(と)何(と)様(と)成(と)者(と)か(と)夫(と)お(と)お(と)主(と)は(と)毎(と)日(と)種(と)々(と)客(と)に(と)出(と)の(と)だ(と)者(と)を(と)何(と)な(と)事(と)を(と)爲(と)居(と)か(と)知(と)た(と)物(と)じ(と)や(と)ア(と)な(と)へ(と)と(と)云(と)れ(と)て(と)小(と)雛(と)は(と)眼(と)尻(と)の(と)所(と)へ(と)き(と)り(と)と(と)お(と)出(と)か(と)合(と)改(と)て(と)云(と)て(と)も(と)な(と)い(と)が(と)互(と)に(と)お(と)國(と)に(と)お(と)る(と)時(と)分(と)兄(と)さん(と)が(と)私(と)を(と)お(と)前(と)は(と)ん(と)の(と)所(と)へ(と)遣(と)ら(と)う(と)と(と)お(と)相(と)談(と)が(と)あ(と)る(と)と(と)聞(と)て(と)歳(と)の(と)い(と)か(と)な(と)い(と)心(と)に(と)も(と)嬉(と)し(と)い(と)事(と)だ(と)と(と)思(と)つ(と)て(と)居(と)ら(と)う(と)と(と)お(と)屋(と)敷(と)の(と)那(と)騷(と)動(と)ち(と)り(と)く(と)お(と)は(と)ら(と)ぐ(と)に(と)成(と)中(と)に(と)お(と)前(と)は(と)ん(と)と(と)兄(と)さん(と)が(と)同(と)所(と)に(と)暮(と)し(と)て(と)お(と)出(と)な(と)は(と)る(と)の(と)み(と)か(と)私(と)と(と)斯(と)云(と)脚(と)に(と)成(と)た(と)もの(と)矢(と)張(と)り(と)無(と)線(と)か(と)と(と)思(と)は(と)あ(と)つ(と)か(と)ま(と)い(と)事(と)の(と)様(と)だ(と)が(と)私(と)や(と)ア(と)お(と)前(と)は(と)ん(と)の(と)女(と)房(と)氣(と)て(と)居(と)者(と)を(と)浮(と)氣(と)な(と)酒(と)に(と)紛(と)して(と)お(と)客(と)の(と)前(と)は(と)程(と)を(と)合(と)て(と)お(と)る(と)様(と)な(と)者(と)の(と)他(と)に(と)心(と)か(と)移(と)ら(と)う(と)か(と)移(と)る(と)ま(と)い(と)か(と)積(と)て(と)も(と)知(と)れ(と)そ(と)う(と)な(と)物(と)じ(と)ア(と)有(と)ま(と)せん(と)か(と)私(と)の(と)氣(と)や(と)ア(と)お(と)前(と)は(と)ん(と)や(と)兄(と)さん(と)に(と)何(と)卒(と)首(と)尾(と)能(と)く(と)水(と)望(と)を(と)わ(と)コレ(と)サ(と)放(と)心(と)と(と)そ(と)ん(と)な(と)事(と)を(と)云(と)六(と)つ(と)て(と)方(と)一(と)他(と)に(と)知(と)れる(と)と(と)ち(と)ら(と)わ(と)せ(と)壁(と)に(と)耳(と)の(と)有(と)め(と)と(と)も(と)云(と)れ(と)ね(と)か(と)ら(と)氣(と)を(と)付(と)る(と)事(と)だ(と)ひ(と)な(と)ホ(と)ン(と)ニ(と)然(と)て(と)有(と)ま(と)した(と)子(と)エ(と)夫(と)だ(と)け(と)れ(と)じ(と)も(と)お(と)前(と)は(と)ん(と)に(と)あ(と)ん(と)な(と)事(と)を(と)云(と)れる(と)と(と)真(と)か(と)ら(と)腹(と)か(と)立(と)の(と)て(と)ソ(と)イ(と)愚(と)痴(と)も(と)言(と)ん(と)て(と)有(と)ま(と)ア(と)ま(と)わ(と)馬(と)鹿(と)ア(と)言(と)た(と)お(と)主(と)を(と)浮(と)氣(と)と(と)思(と)へ(と)は(と)此(と)身(と)よ(と)り(と)兄(と)が(と)そ(と)ん(と)な(と)商(と)賣(と)を(と)















面白の狂言互違橋下とは川柳點にて穿ち可笑みお蘭は宛てられた様に茫然と上氣して亂れ、私を此にいじめながらお前は平氣な顔をして出たから憎らうい(わ)ア平氣な物でござい升者か大汗に成やうた(らん)夫じやア此と様側の子を明やうかねへと痛なから障子を片手て明て(らん)ヲヤ早晩の間に雨が降出た(わ)え、夫りやア大變だト様側へ出て空を詠がめ乍ら(留)トレ小降の中速く廻る事と致しませう(らん)アレサ何だらうね、張子の體心やア有まい一雨が取て喰ふとも云はないのに其な怖がつて騒ぐ事もないはね而して些とお前に聞て見たい事か在んだから少一待て居てお呉ヨト云ツ、立て小用に往き以前の火鉢の傍へ周りて一ぶく吞だ後の煙草をわ七に吸付て遣ながら(蘭)アソウ聞たい事と云のも他一やアないがねお前實正に隠さないで云てお聞せなト云れてわ七は我が身の上を鹽谷浪人と察せし故夫と云と云事かと浮世を忍心からはつと思へば胸うち騒ぐ(わ)隠さず云とは何の事とござい升へト覺へず胸を立直せば(らん)ホ、其な真面目にお成では聞懸いかねお前は那小隠と云唄者を知てお在だちうねへと思ひ懸ない事を知て扱は小ひなと情曲有事を知て聞かど又驚しが身分の大事で有る故小は必の落付て(わ)へイ育柳橋の小ひなをなら知て居升(らん)ヲヤ夫じや深い情合だとお言のか(ト)忽地に顔色が變は(わ)ナニ其な事は些ともございません(らん)イエ、お隠さない私が先刻見たと有る言のは其小ひなのことたねお前此間阿波長の庭で何か喃々咄を爲お在てた(わ)え(らん)夫御覽の有事だから返事が出来まい私も薄ッ暗い晩だから確りお前とは知れなしたけれど何でも怪いと思たからエヘト微笑を

聞たら周章を逃てお仕舞たつた(わ)へ、え夫じやア那時微笑を成つたのは良女でござい升たか大笑ひを咄てござい升たとは是か小ひなは主人の妹女にて那日手紙を届に行たる譯を語り(蘭)に言紛ければお蘭も漸々承知して彼松原左仲か小雛に執心なる事を咄し其周旋を頼むにぞわ七は借々思案を廻すに我女房とも思ふ小雛を敵の屋敷へ遣して慰み物にさせん事は残念至極のとまれと首尾好集を入込すれば敵地の城内は忽地知なん今此事を相談爲とも五兵衛は直に得心せんが小雛が承知をすれば宜かと怪訝ながらも黙頭て(と)成程御尤もの御断て御座升が主人の了簡は何様でござい升か知ませんが何にしろ那娘の爲にも唄女をさせて置より隣隣てござい升から出来るか出来無かお請合の成ませんかまア断を致して見ると爲ませう(らん)夫やめ嫌いなえ併しお前は何でもヨウお歸のかお言内は七は早速に仕度をして立上るをお蘭の送つて出なから後ろからヲヨイト抱付様を身振して顔を差覗き(らん)何故此に迷はせてお呉だ憎い人だよト莞爾笑つて背中を叩けば誰でも喰へと腹の理ては思ひながら去けなく俱に笑ふて別て行く

相生町なる五兵衛が宅に小雛に何か物思はし氣に差俯向て言葉も無打怕然つ、居る側からわ七は脚を摺立て(と)コレサ小ひなさんお前の心は比身も能察して居るけれども是程事を分て云ふのたからお前も驚くり勘辨を仕成程と思つたら承知だと云返事を聞せて安堵させて呉るか能じやあね(わ)夫たつて餘まり無理心やあ有ませんかお前様は那後家様を好な事をいして私にやめ妾奉公を爲とお云たつて其様真似が出来升者かね(と)さあ然聞から聞いは此身たつてすき好んで彼を狸婆めは色の戀のと言譯が出来来る者かね(小)ハイサ冷して置て澤山



食はばい年増は味みが格別だと言升から随分お楽しみなさるが能ノサどうせ私きやあ捨られた  
から(わ)コウどうも然言ちやあ咄しも何も出来やあ爲ねへまゝ一氣を落付て此身の云事を聞た  
上て夫とも胸に落さあ又其様に相談も有うじやねへかよ是より前の一什一伍を事委く物陪  
り又五兵衛より頼まれて問者の爲に小難をば松原方へ應る事をも得心する様言聞すれば小ひ  
きはトット一息吐き(小)成程然開て見ると無國とは思はれませんけれどもお前はんと斯成の  
も色や浮氣を擲ては無總角結と云ば夫婦も同じとどあつかまゝい様たか私の氣じや女房の積  
りて居る者を假令忠義の爲めだと云て他のことなら命を落すも厭ひませんが女の道を外す事  
難りは何様も私の心が(と)ハテサ其處が御主人様への御奉公たはな操を棄て操を立ると云事  
も有て誰も知て居るだる常盤御前でも知れた物じやあ無かと云れて須臾打扱、か(小)ホ  
ム然で有升ねへ夫じやあ私が屋敷へ行て成べき丈は綾爲ても居升は万一夜は無て身を任す様  
な事か有れば堪忍してお呉なはい日とホロリと滴す涙の誠道方も不便と思ふにぞ供に涙を離  
ふせいを態と笑ひに紛らえて(と)ハ、ハ、ハ、つまらねへ事を云た者だ此身が得心てさせるのた  
者を堪忍も糸瓜も入者か其替りに那徳家の事も今云た譯て實に仕方無の薄座の方便たから然  
思つて呉なよ(小)あいな然事か分れば私だつて何と思ひ升者かね結句先刻の様に新様らしいこ  
とを云たのか面目ないよ(わ)何の其な事は何様でも能はせそんならお前愈々承知して呉たの  
たね(小)あ、否ても否と云はれ無者を(わ)夫で兄貴も何なに安堵爲成るか知やあ爲ねへと云  
舞五兵衛は納戸より銚子盃手に持て徐々として立出るに兩側は吃り見返れば(五)コレ何も驚  
く事かさいと云はれて小ひきは面赤め(小)兄さん面白無かお前叱つてお呉じやあ無か(五)  
また叱る物かお主建二個は國にぬた時に云約束を爲た中た者を世か世ならは取言もさせて

今頃は子の一個も出来て居時分た者を互に思ひ合ての事なら兄と何と云者か夫程深中を引別  
て敵の屋敷へ奉公に行事を得心爲か貞節なら動て得心させるのも忠義崩も揃つた心事も  
の餘り兄か許一て祝言の盃をさせるから是を奉もの思ひ出にして奉公に行て呉る幸ひ願わ  
有たなら其心でもつて来たお主か一はじめ願すか能男媒人侍女郎も此身か一人て兼てすれば  
是か眞の水入らすと云者だハ、ハ、と打解たる兄の辭に歡ぶ(小)兄さん何にも申しませんと  
手合せつ、伏拜み頓て盃を取上ればわ七今更否むに由無形計りなる婚姻の盃を取交せば(五)  
ア、其や目出度く併夫婦と云もの今夜一晚此身は今から後家様の所へ行き承知の鎌子を  
返答を爲上師り足に背柳橋へも廻つて座敷を引せる相談をも付て来から小ひきは此所へ拍つ  
て寐物語に悠々と一晚名残を惜むか能と既に其日も暮比二個を致して仕度を調へ勿卒で出行五  
兵衛義に堅心にも流石に情の道も知たる實に絆せる兄成けり

第七十七回

期且語説他 宇喜様お供も氣も浮々心も浮は酒もうく浮たはく、宇喜大盡とそや一立つ、唄女  
事に移る 大勢取巻綴の内例の大星由良之助が三日以來祇園町にて飲續たる酒にも倦今日は  
我に困憊せんとて皆打退つ、往來を喧嘩立て行掛る折も折とて向ふより五六人の武士連何れ  
も一抔機嫌と見るが態と先から大星の乗たる籠へ理不盡に突當つて眼を怒ら(▲)やい此處  
が大道で武士たる者に突當るとは揃も揃つて盲目でも有めへさア此處では濟されねと各柄に  
右手を懸止る者をば突退駈退け唇口々に掲立れば由良之助は眼の腫たるか細目に明て彼人  
の顔を餘に打見廻し(由)何やら我等は酔潰れて二向に子細は知ぬか詰云て損は行ぬ者眞平御  
用捨々々其機嫌から道出て土に顔を摺付れば夫と見るより侍共は肩寄せ一張合抜て大目明



て打英ひ(▲)斯見た處が刀を差ば漫更町人とは思はれぬか犬つくばひに訊る体見掛に寄さい  
大櫻は一體其方は何處の者て名は何と申すのた(由)我等は山科邊に住居を致浪人者名前の  
義は申さすとも御勘辨を下さる辨か(●)やい／＼云斯掛つたわらにやア承給はらねば承知は  
成ゆ夫とも強て悪さつゝやるには何か其方にも心有ての事たらうから卒我々か相手に成て思  
存分の勝負を致さうかと父も各々ひしめければ由良之助は是拒なき体にて態様／＼と我名を  
名乗皆卒忽のお託にハ是から一緒に陸奥野へ行き中直りの盃させんと云に斬々承知して皆共  
に歩行つ、程無煙燭に起は廣々とせし芝の上に乗て準備の毛氈を脱枚となく敷並べ持參の  
小竹筒堤重を所狭き迄取置け其内得物の函をは早速に開きして器に盛ッ、差出を爲花椅の  
懸と事替て又一入の奥有は歌妓共は三味線弾は是に合て前問未者が隔り在て只管に盃を進む  
るにそ彼武士共は引掛つ、頻りに酒肴を呑喰ひて酔に乘せし躰に待過傍若無人の舉動ひに  
ぞ歌妓初問は驚き恐れ各、速く退退て近寄者もあらざれば武士は不興氣に大星の側へ進み  
寄又も亂暴を仕懸れど此方は更に取合す(由)イヤヨウ我等は此程から夜更無に呑だ故に腹に  
眼氣を催した尻なりと足也と御自分達は御勝手な真似を成れておめそび被成拙者は此所で一  
腹入之が則不禮請御免、と言ながらかの武士の居る真中へ會釋もなさて仰向に倒れて急地  
高息き正体もなく見るにぞ諸人呆れて辭も無顔見合せて居たり(●)輩のどに手短くと刀  
の柄に手を懸るを此方の一人押然(●)イヤコレ短氣を成れたら後日に浩方の身分が危ひ幸  
ひな物が有我等に任せて置れよと大星がしだらも無打廣げたる彼より厚紙袋の落懸を四邊見  
廻し奪ひ取り(●)何れもござれと先に立ば成程然だと皆點頭てうこ／＼にして立去を傳妓村  
間は最前の無法に恐て近くは寄す遠く離れて居る故懐中物を奪ひ去りを誰とて見止る者は有

ねど退きたるに安堵して各其所へ寄集りしが大星は酔倒れて陥起せどもたわいの無れば兎角  
する中那奴等が又もや來やふも計られず長居は恐と由良之助を乗物に助け乗跡片付て早々に  
打蓮花街へ歸りしとぞ

第七十八回

入相の鐘は人散て最物淋しき北山陰折りも來揚る以前の武士跡先見廻し立止まり(●)トキニ  
今日は全体甘い都合じやア無つたわ(△)イヤ最實に大出來々々此身達も折角關東から遙々  
の所を來からにやア大星の腹の中をすつたり見抜て歸ら無じやあ役目も立事と云者だから是  
迄種々探つて見たが今日の喧嘩仕懸は實に上出來(×)併し主人の恐みる報ほふと云了簡  
が先刻那奴が觸たのを幸ひ手短に遣うと刀へ手を掛たら止られたから其の儘に見遣したか今  
で思へば残念だ(△)コレサ何様も貴公は兎角荒つぽいから成ねへ那處で大星を首尾よく爲遂  
れの夫や根を伐て葉を枯す機な者たけれ共那奴大望を企る心か酔た振りは爲とも研れる様  
な事は爲まい若又貴殿に殺される程の者なら祈らすとも大事を引出す氣支ひは無せんを腰版  
を研た處が役に立ない斗りてなく後日夫が現れ、は互ひの爲にも成ぬ譯だから其處でお禁  
申したのさ見より何か趾據に成物も有うと鼻紙入をさらつて來たが併懐中物を取れるのも無  
知とは何れ本性とは思れない(×)まア何にしろ中をぬめて見が宜方一見はと云書物か大事  
の密書でも入て有まい者でも無ト各々寄て鼻紙入を開けば果て敷通の書物有故片端から開き  
見に

九は  
一 銀二百二十匁  
一 同七十二匁  
一 子十人揚代  
一 子三人揚代



(X) 何たる是やア揚屋の書付たト次を開けは

餘りとや御まつしに文にて申上る。御歸り後も御宿の御首尾如何おはしませ候や

(△) 馬鹿々々しい是は太夫の文だト是より小々開き見に何れも遊所の書付或は文の類ひにて取方も無物已なりしか其中に大星様弁寺十内と上書をせし手紙一通を見付出し(△) 夫々こそ愛に此様な物が有た是は何か密書で置ても有そうだ(X) 成程此十内と云奴は鹽谷の浪人の内でも京都の留守居役を爲居者で大星とは至極悪心だと云時も聞て居は内密の相談の手紙に違ひは有まいア何にしろ聞てお聞せませへと言に一箇が推開き讀出す其文章には

昨今秋冷相催候へども彌々御壯健御坐被成欣喜斜をらす存たてまつり候然ば今日兼而申合せ候同志の面々拙宅へ會合致し候約束にて最早大半相集り尊大人の御光來を先刻より相待申候

(△) 何様だぬ此文面は(○) 成程兼て申合せ候同志の面々拙宅へ會合爲とは何か狼人供が密討の企ても致すに就て其相談を爲やうと云會合と思はれ升せ(●) 何にしろ跡を讀て見が宜じやア無か然爲と譯が辯る事だからト云に再び讀文言は

尤何れも御存知の初心にて御慰みにも相成申す間敷候得共

(X) をや〜かつか文句だぜ(●) まま推し讀せせへ  
折柄幸ひ大鷹子樂上京の由にて參合せ候へは那者に文臺を相頼み今日は日短わの事に候故歌仙一順にて跡は露酒一獻呈し度別に取設けは御座無候へ共折柄庭前の菊半開致し候間是已の御着に御座候依て先日尙の兼題奉出し置候是又今附にて開卷の心得に候得は何卒早々御入來被下度候は拜顔を期候以上

(○) 何の事だ是やア俳諧の條を讀からば是は書手無識(●) 書を馬鹿にし面白くもね(△) 此身ア何たる御な文句だから此等事とやめ御座候(△) 夫々も始めの書出しが同志の面々何ぞを堅やらかして有たから何か密書の手紙も書ふやアいか(○) 是れ何れは何も無かぬ(△) 跡は揚板入る樂の道入れたらみかや持たり愛敬輸入が有と申を採り見て舌を出し(△) イヤハや呆れた物だ大星と云も聞はれる者の金入に小粒かたつた三つ道入て居た是で大星もすさまじい宜は陰方が無此金が下番者にして夫を骨折買と爲サ(●) チロツいぬへま〜い併是で大星の腹も知たと云物だから先關東ても山安堵の譯だ(△) 詰ねの事で酔か醒たら急に寝く成て来て飲むと咄しが極たら何處ても構はねへから通屋へ飛込む事と爲やうじやアねへか(○) いか様其事々々果は互に苦笑ひして何處もななくは去りけり

什磨此武士は何者ぞ衆て彌東より鐵砲一置く師直の聞者にて由良之助の心底を探らん  
と爲方便と云文林故ても構はねへ大星迷くも其機を察して彼園將に同道を〜と紙  
入を寫はして置々圓の放埒者を果等に充分推量させし御を扱たも探謀遠知人の及ばぬ  
所なるべし

第七十九回

是に人の心程重り難物は有じ外向に正義と見へたるか口を必は表裏にて正かの時に至ては命を惜じも不慮然ば大星は隠居成り許多の人の心証の目一向には見分るまじ始末亦掛に有し  
日より今狼々の身となる迄も變心存す見ゆる者を先義黨と想思ひ乍猶も試して見ん物と心に  
一つの密策を設け然も無体にて居る所へ城日原御右衛門尉寺十内の兩人來り〜かは能き折か  
らと一問へ通して猪抄扱も濟し後原御寺の兩人は言葉を捕て敵討の時日を期に急立れば茲ぞ



と大星打笑ひ(大)なる程始ゆは一旦の怒に於て是非に敵討と思ひまゝたか今と成つて考へれ  
は中々容易に討る敵ではなし若仕頼じた甚時は世の物笑ひに相成て彌々亡君の御名を下すと  
申す物果討にくい敵を討つより同志義を教す事も難合のお家を細くとも再興致のが却て忠節  
かと思はれ升夫に付て熱く考へて見れば敵討の難事を教した人々から神文を受取て居り升  
是は尤慮内々で教し此事を以言ひ乍未だ神文を言ひ神文を言ひ神文を言ひ神文を言ひ神文を言ひ  
云云企の有譯では家系再興杯は難付られぬと言ひ神文を言ひ神文を言ひ神文を言ひ神文を言ひ  
疑念を晴すには一旦敵討の所存を思ひ絶るより他は神文を言ひ神文を言ひ神文を言ひ神文を言ひ  
又も其儘置くと如何様先づ申す所は申す所は申す所は申す所は申す所は申す所は申す所は申す所は  
はれる故御面御年序に任せ討所へ御書に申すべく依て是等の次第を志し敵討に最寄々々  
に御配分を願ひたい物だと云ひ申す所は申す所は申す所は申す所は申す所は申す所は申す所は  
に指出せば流石の兩人も真意顔に呆れて言葉も無りしが郷右衛門は勃起と成て(郷)最前柄  
て承給はる所全く我々の命をば保りたる所とも思はれずと雖やら元老の御心慮些細しく  
思はれ并拙者に於ては難れ神文は認めませぬ命を抛つて亡君の敵を報ふの他に所存は無之  
を今更貴殿が左様の事を仰られては最前の留給に相慮致す夫とも貴殿が今に至りては神文未練を  
御所存ならば元老とて用給は致さぬ郷右衛門の心は思ひ止まられた事か又は我々の心慮を  
頼り見んと云ふ一時の手便か又御返答が承給はり度と拙者の一刀を小脇に引附顔色變て詰密  
れは(由)ハ、イヤコレ御右衛門其様に教せ立れと申す所は申す所は申す所は申す所は申す所は  
只一向に難病とは近光忠臣至極の至夫其拙者申す事各々方め不承知を止し事を得ない故  
と申す所は仇討ても成難御手成成て後等々大星打笑ひ下拙者は又拙者の存念通り致

す故何は鬼も有此神文は御返一申事が教り(郷)イヤ其神文請取ます出来ませぬお家再興夫  
を去立に難病を遠慮し身を通れ傑と致さるは日比の貴殿の御氣質にも似合の情なき御一言  
頼は其有盟約の通り是非共敵討をお進め申す若此上にも御承知が無未練の頑固有に於ては仇  
討の血祭りに貴所の身首を討落し正義の者の魂を堅めさせるは他は無之元老へ對し過言なれ  
と雖も申すはが我等の正質有無の間の御返答を今一應承給はらうと急と睨み一眼中尖く否と  
言はば一討に切て捨可郷右衛門が氣色に十内驚きて(十)コレ一原氏御自分の申される所は  
重々尤も至極だが元老の思召を熱々と考へるに何か深い御所存の有事かとは察はれるから  
出過ぎた様だが大星殿の仰に任せ此神文は先々我等がお預り申て今日はお暇致想ては有まいが  
(郷)夫ではお手前も難病者の(十)イヤ拙者が心慮を知らぬ其時でも御在まいから先づ何事  
も我等にお任せませい願ひ様には取斗らばぬから郷右衛門を御慰め由良之助にも暇を告て  
手を引立ッ、立出れぬ心ならぬと郷右衛門も乍不服歸りける

第八十回

什磨寺十内内膳谷家盛ん處比は意都の御守居を助下かば涙々の身と成ても都の裏にて隠る  
町家に借宅を好る道のへ敵或は佛指杯を人に敵へて世渡りの助けはしたりとぞ十内の妻を  
阿丹と呼び女兒を以與と云フ、も猶年老ひたる母一人有伴孝右衛門は大鷹立吾等と先達て  
東都に下れば金花浴には老母を置に家内四人の暮成が其妻お丹と云る者心様貞烈にして若男  
子にて有らんには四十七七の面々にも難々劣らぬ魂あれと常に柔和を面顯し能く老姑  
三に使へて孝を盡す夫の心に些か悻らぬ女の道を深く守りて家を治むるのみ不成漢に倭の史を  
も學びて和歌の道にも不暗然は十内が敵を討んと東都に下りたる後も折々歌杯送送りて文の



往復敷通有丹は次の巻に委しく綴りく夫婦の間に信有懸きをなん分解へ一冊に或日の事なるが丹は老母を伴ひて寺参に往たる留寄に十内は奥の間にて歌の本杯取開一人詠めて居る所へ扇賣に姿を奪せし是も則ち義士の一人神崎彌五郎訪来り扱而談に及びし後彌五郎は關東にて血氣盛の義士馳か兎角復讐の運々を博し今にも事起すへき容易ならぬ様子あらは取頼め尙やら様子の變りのみが神文迄も返したる過日の様子を告げるに彌五郎思はも膝を進め(彌)成程元老の思召深い意味合の有事と思はれて感心致し升夫を御承知て神文を獲らす預つてお歸り被成とは流石は錦寺氏のお取斗らひ忍入ました最早其様子では敵討も中遠すと見へ升(彌)コレサ貴公も妙な事を言はしやつるお家再興仕様といつて神文を返すのう何故又敵討か近寄つた様に見へる事だ(彌)ハ、ハ、ハ、是は錦寺氏のお言とも思はれませんが愚味な私さへ尙誤と思ひ升事を貴公様程のお方が御承知の無管は御座升が併し私の推量の致し違ひか存不申から先つ愚存の處を申出して見ませう只今元老の思召では迎も再興と云事は出来ぬに非は素より御承知て御在升から此上は警討と御決定はなすつても同志の内に表面は正義の標に見ても内心の心は重り難徒も万有まいにも限りませんから先警討を禁ると云のて神文を奪せば二心有者は能率にして運中を抜て仕舞ふ事も有亦何處迄も亡君のお爲に二命を捨擧と冒了筋の者は丁度扇氏の様立腹をして彌々本心が願れると申す者又神文迄返したと言事か敵方の問者の耳へ這入れば直様關東へ洋進が有て用心の薄く成た敵の油断へ附込んで一時に事を爲て言反問の御計策かと思はれ升が如何な物に御座ませうと言ふに十内横手を打て(彌)イヤ天晴の御明察歎言ふと何様やらお手前を疑つて裏口を引て見た様に聞へて甚だ

赤面致すが實は私も然うでは有まいかと推量したから神文をも獲らす預つて来た(彌)大方お前様が然う言御所存とは存居たが先づ私の愚案をも申出したので御座升(彌)初夫は宜いが爰に少し困るのは彼神文サね私の手から同志の面々へ返す供りて請取ては来たが然うするど其所に何様か節を附た話でも爲ないでは衆人が得心も爲まいと思ふが御迷感でも是はお前から返す話をして被下ては何様だるうねと言はれて少考へ(彌)成程御道理で御在ます夫には能事か御座ます那速水總左衛門と言男は大星殿の腹心と元老の胸中をも荒壇察して居り升故私速水に相談をして返さざる様に致させう併然う至したら定めて同志の面々が動立ませうから其時には又其様には御相談を致させうと總ての事を相談し願て其日は歸りたるが早速速水を以て右の通り取扱はせしに之を機として其儘速外にたるもあれと義氣鐵石の如き輩は何れも大に憤懣して一同十内方へ集り次第に依て大星親子の首打落我々關東に馳下り高の館に敵入し狂ひ死するの外はなく逆各々大星が宅に至義心を現はして詰問へば由良之助は嬉し氣に先に變りなく各々の御心慮承給りて満足せりとして其本心を打明し本意を達せん事最早問も有じ我等が胸中をも疑ひ給ふ事勿と心曇なく耳語き示せば義士の面が勇立天に昇る心地して歡び合るぞ廻り也ける

第八十一回

解は又由良之助は同志の者の心慮を猶訝かしく思ひし故神文に託せて竊に探り見し處案に違はず其内には變心の者有て遠外せしたる輩も有殘るは金鐵同様の二心無者のみなれば大層も早心易しと最願時敷思ひしが夫に付ても此程遙々十騎が關東の様子を告來りし是も又大切成事乍其身は京都を今暫離れ難分有は名代として御右衛門を差下す可に事極り彼を招きて斯々



六十は どの仲の趣をいひ聞かされば郷右衛門は一顧に不及喜んで承知に及び付ては今生の名残として故郷の老母に對面な一夫と言はねど余所下暇乞をば致したければ須臾の程の御猶豫を下さる可やといひ出れば由良之助黙頭て人皆親を思ふ中にも別て老母に孝心深き其元の事なれば寔に道理至極なり古郷に趣かれ心残りの無様に寛々と暇乞を乞はれ其上發足ある可と云は郷右衛門斷びて頼て赤穂の在に至兼て母をば忍ばせ置たる家の邊りに近づけば女房のお衣と云るが今年儘に二才なる房吉と云俵を背負戸口に淫淫して居たりしが夫と見るより歎びて(衣)急々内へ誘へば母も殊の外機嫌よく別れて後の事ともを問つ問れつする中に舍弟の總三郎も出來りて兄への挨拶種々有と事繋ければ此を略す看官宜しく推す可其内お衣は手料理にて夫の歸りを祝さんと思ふ心の花松魚づくぬ鱈も鱈は口膳に盛取添つ、酒温めて差出せば水入らずなる親子夫婦も久し振成面會に頼て酒宴に及ぶ程に母は殊更笑一げ成機嫌を考へ郷右衛門が(郷)借お母機私も暫く京都に参りまきて身の落付を定めませうを諸方へ口を掛く頼み置まえた所此度關東の去諸侯方から召抱へ候と申す方が出來ましたのて急に吾妻へ下りませぬは成申不故實は今日参りましたのも其譯をお咄しも致し又た暇乞をも申上て明朝は發足致心得て御座升才も來春に成升と云迎ひに参り升頼りて御座升故其趣は總三郎を私と思召して御機嫌能お暮し遊ばす様にお願ひ申上り總三郎もお衣も今聞か通り譯だ故從又お母機を大切に思ひ申候に致すが能是は僅の金子乍當分の手置に渡し置は成丈はお母機にお不自由の無傍にして進て呉るよと懐中より金三十兩取出し總三郎に渡に弟も妻も久々にて無事を顔見て嬉しいと思ふ間も無發足とは余り本意無事とは思ふ可非ればお母機の御上は不必氣遣ひ給ふなと言葉を續へて答を爲は母は熱々郷右衛門の顔打眺て容形を改め(母)俵やお前が言ふ

よへ發足此上も無目出度い事と私は幾程にぞ驚く思ふがね同敷はせるなら實正の事を云つて假借をせしめるが能いで(郷)實正の事とは夫は何様申す事で御在升か(母)成程是は迂活には口外の以來無事有が愛に居るのは内輪の者時他人の聞くと云ては無先私の推量に相違候方へ召抱へられると云たは全くの餘り實は大星殿と心を合せ御主人の敵を報ふ爲に御兼へ旅立を致すに違ひあるまいと星を指たる母の言に郷右衛門は驚きて期御推量有上は寧ろ打明ありの儘お物語を致せよと口迄出がいやく、那樣に母上か心強くば仰有と是が此世の御別れと申上なは幾計かお飲さあるは知た事本意を遂し其上にて我切腹を爲たる由を聞せ給ふは是非も無礼と成べく丈と一日も遅くお耳に入れるに不若と心ならずも粗々言葉を飾りて詐れば母も漸々得心して(母)夫程に云ふには何か深い様子か有故推ても聞いたら者春を樂しみに待つて居升から随分道中も氣を付殊更發暑が強い最中朝を早く立て日中を休む様に爲か能い定めて勞も爲たて有ふから今夜はよいから後と寐て翌の朝私か起す迄草臥を休ませいと頼る方無母の慈愛に有難き旨答返して各々臥房に入りしとぞ

第八十一回

七十は 現次の朝は暗きより初は共々起出て手つ柄焼飯を拵へつ、是を盥飯に給へなと心を添へて世話爲にぞ見る事聞く事郷右衛門へ胸の塞かる事のみ成を忠義の爲と思ひ直して面の色にも不願老母を始吾妻弟にも是今生の別れと思は尙念比に暇乞して赤尾の在所を立別七里計も歩み行へば早晝飯の頃に至は其邊の木陰成涼し氣成所に立寄有合石に腰打懸て彼焼飯を取出し七早母人の志を受るも此を限り成と押越さつ、焼飯の四つありを三食して既に腹に滿たれば頼も一つを此儘置は時分納の事なる成味ひの饒る可如何致と見返は我が休みたる木の梢に鳩



の爲懸て在りかは残りたる機織を鳩に遣らんと木の枝の程好所に差置けは仲の鳩は驚き一氣に  
飛下りつ。喰へ行くを如何爲やと見上れば己は驚いて巢の中を子鳩に喰はする体敷に郷右  
衛門は思ふ機織は僅の小鳥成雛子を思ふ道は斯の如く况人間で有乍此度あつまに赴かは耐死  
爲か初腹るか何れ命は無ものを偽り飾りて別れを告げ後に實を聞給は、親は簡程に思者を子は  
天程は思はぬかと恨み歎かせ給ふべし是を速くも心付は打明申上げ可にも流石強氣の郷右衛  
門も愛に至て勇氣も挫一足進進まねば事の事に取て回し子細具に打明し改めて今生の暇を乞  
ふ下出立せんと元來一方へと足を早め其日も既に暮る、頃再び我家に立歸れば母を始めつま  
も弟も打驚きつ、様子を見れば失念物を致せし故歸りし跡に云ひ爲て家内の者安堵合爲扱郷  
右衛門は一間に至母の前に頭を下して有の儘に物降り止つ本心を包みたる不孝の塵を詫げるに  
母は念々機織よく夫でこり我子なれ卒此上は快よく別れの盃を交さんとて再び酒の用意を成  
親子の名残と取交す表に愛ひの色も不見機織よけたる母の体に郷右衛門は安堵して思ひ不懸  
に其夜も又我家の明房に休みしがむだに一日を過し事故次の朝は昨日より猶逸早く起出て急  
口く仕度調へ早出立をなさんと爲に前の朝は我身より先へ起たる母親が今朝は何とホーた  
りけん未目を覺し跡もあらぬを嘆も不告出立の可成事にあらされど能く寂靜まりて在するを  
聞ずも本意に不有とて結く憂るを待程には明たれど實も無余りの事の訝かきに母の臥居  
を覗き見るに無睡や母は紅に染みて自害爲たる有様に郷右衛門は狂氣の如此は如何と驚き隠  
きつまでも弟も斯寄て潮聲限り不有のみ何と言も不有けり其中に郷右衛門はきつと心を取續め  
顔を見れば枕元に通の書置有打開きて讀下たせ  
一筆すのこころ常々孝心深きまは詞にも述せし難く蘇更母の事を思ふて七里行て立

歸る程の心煩ひ我身にありてはいかにわび入候へとも果計入と云はんとき風と  
母の身の上を思出し給ふならは進む勇氣も忽地くじけて頼に内兜を見られ給はんか是  
全くは母の救命あるもえとぞんじ候ま、惜からぬ老の命今夜先立申候此うへは跡に心  
残りなく師直どののは亡君の敵母の敵とぞも詰附入給ものならは尖き手柄を致され候  
はんと安堵致しる、何事も最期をいそぎ早々申遣し候三郎お友へもよしに申傳へ  
待み入り候しと

原郷右衛門どの

郷右衛門は讀終りて聲を不措泣叫死骸に取付て前後不覺に打撃けば同思ひに惣三郎も女  
も共に取亂し涙に綾無りしと斯て可果と必有ねば位々母の死骸を苦惱の寺へ葬りつ、跡念  
に吊ひ杯爲是等のこと日敗運早二七日に及びしかは郷右衛門は母の事を忘る、問は有ね共  
大星に誓ひたる詞も有を何迄か此處にして可有ならぬは未思は果ぬ其後々のと杯つまど弟に  
言合一期の別れを爲つ、も願て赤尾を出立し大星方へ立越て面會の上是等の次第を包み匿さ  
ず物語れは一持氣絶をす迄に感入つ、涙を流し是みな師直殿一人の心からと起り亡君の御  
最期數千人の者の難儀何様と云限り無是迄の難儀を一時に晴すも今始く必年内は過兼は貴  
殿東まへ至りなば彼地の同地の面々へ拙器が所存をお話なされ目出度本意を遂る目を彼處  
に於待給へと勇め勵升大星が詞に誓ひも忘る、計郷右衛門は心勇て一日山科に逗留成急ぎ東  
へ下りいとぞ

九十一  
○爰に又同じ山科の邊りに住む殿井優竹と云者有醫者とは言へど思は不利人見せ間に玄關へ  
藥箱を飾りて置けど或は嫁のはいわたし地面の賣買金の世話又は坐敷の取持など頼まる、を



兼とせし世に云ふ頼問者成か生國は關東にて前の編に著はしたる彼のお蘭の叔父なるのへ  
兼て渠より頼みを受け大星方へ取入て常に様子を窺ひ居しに尙も實否を探り見んと其身の縁  
類のもの娘と一廿五歳に成て其名をお針と呼れつゝ心刺たる女子有しを大星方へ口入して下  
女奉公に住込せ内外の事を聞耳立てて體のあるならは内通せよとて言付ける此お針のよに  
付て又一段の物語りあり次の回を見て知らん

第八十三回

大星は敵方より廻者の有ん事を兼て推せし事なれば下女下男にも心を不許只遊興を嗜らざり  
て彌々放埒の馬鹿者と思する様に振舞は伴力彌も父に齋く近所の娘に處れて又杯贈る事も有  
又は筋 女に懸手切金を賣り取らして世間へ恥を酒事も度々に及びしが或日力彌は唯一個  
其身の部屋にて書物を見てゐる處へ例のお針と云る下女が縁側の障子を明て顔を半分出一乍  
隣を密め(針)貴君アノ山出のお槍を何様かさい升たカエ(力)何の彼な者が何様成ものか  
(針)アレマア人の悪い噂を爲て被爲入よ夫も一寸した事なら能う御在升けれ共私イが何様  
も怪しいと思ひましたから那層を同所にお湯に遣入升た時氣を付て見ましたらお腹も余程大  
きく爲て乳が黒くなりました處では最大方五月近く爲てゐるらしく見へ升が貴公あんな婦を  
被成て何様仕儀と思し召升エ(力)夫は夫とヤア實正に出来たわもウ(針)實正の嘘のと御覽じま  
し余程目立程大きくなり升たアチ(刀)夫は夫は大變だ自己の氣では本の空腹時の不味物無で放  
心手を付が夫は飛事に成た(針)をにしても那程にお腹の大きくなつた物を此方のお宅へ置れ  
升まいが何様被成思し召で御座升エ(力)何様と言つて仕方が無のサ一體そんな事を怖がつ  
て面白い思ひが出来るものか其處で針さん子が出来るか出来まいか(針)ホ、何を被仰

かと思へば私なんぞはそんな相手は御在ません故大丈夫と(力)ナニ子が出来なければ相手は  
なるよと言ひ乍手を捉て引寄せざる其似をすれば(針)否も若旦那様だチエホ、ト笑ひ乍振初  
つて逃出してゆくとして袂何やら反古の端の押丸めたるを落して行し故方彌は手速く拾ひ取  
敵に成を放けて取ればお針の(敵)井よりと上書をせし文の初端怪しみ乍中を讀け

兼て申ふくめ候通り先日より追々御内通御申越しのおもむき一々  
承知いたし候親子とも只不しだら的事のみにて別に怪敵体も御見  
うけなきよ一左隣らへは關東へ

許跡は破れて不有を力彌は熱々讀返し一隅り點頭き居たりけるにお針は大事の文の端を取替  
せしとも心不附其儀勝手へ立出て豫て力彌の情を懸しお槍と云る小女へ種々様々に入智恵し  
て其らゆとを勤心れ共お槍は津氣の賣なれば更に聞入る跡なき折しもエヘント咳拂ひし  
て表の方より山良之助が立歸りたる様子故若聞れしゆと乍怪しお針は故意と左不有跡にて他  
の類に紛らいつゝ空笑ひして居たりしは容易不敵の女と見へたり

第八十四回

大星は千鳥足で如瓢爲乍一間へ通ればお針は迹より附て來り茶を扱て出し乍ら(はり)旦那様  
大相今日はお歸りかお早う御在ましたね(由)歸りは早くつても酒は大増吞だ何様じや酔て居  
ると見るか(はり)ホ、宜いでは御在ませんか酔爲に飲る御酒で御在升者を(由)成程酔爲の  
酒だ病よつても苦うらばと申すのかおぬしは中々若の分つた者な時にお主に折入て頼みある



るか何と聞ては呉いか(はり)へい如何を御用てござりまするか私くしに出来るとなら何なりと  
ば(由)い々早速の承知辱じけなぬ扱他の事でもないが知つての通り我輩の品行に付き東角内の  
十二孫左めが愚世話を爲のて困るのよ然ふかと云つてはまを出相にも渠は親共の時分から使つ  
た譜代の者のゑ今更替もないに追ひ出す陣にも往かず其方に頼みと云ふのは愛の所ろだか先  
つ自己の工夫ては那奴が年は自己に二つ上だけれ共未万更女に用のない事もあるまい其處を  
其方の働きて何様か居膳をして見ては呉れまいか醫にも女の居膳をくはぬ男無とさへ云にわ  
の男ハ能事には酒か好た故一杯飲せてよつた處へ持掛れば否と冠りを振る事では有まい必竟  
は那男か是迄面白い事の味を知ら無病堅い事計言つて居るけれ共其方と内証て出来ても爲て  
見ろ自分が甘い事をするに付ても成程旦那が女に現を扱も無理は無と思ひべりが出来て自然  
究見も云は無様に成に必定然う爲は難と遠慮も無好た大夫を内に入れ世間晴れて樂まれる  
と云者だ此事を其方が首尾能やつて呉れば骨折には金三十兩遣すが何様じや廻てれ呉まいか  
ト思ひ掛無大星の言葉にわはりは呆れ果し何て金に成事と聞ては見逃す事の出来ぬ性付  
ての欲張ゆゑ心の中では喜びながら態と困り願付にせよ(はり)貴公何を被仰もかと存まし故如  
何事ても私に其な事か出来升者か子エホ、(由)ササ是は至極迷惑を被仰は思ふけれ共狂て  
も是を遣て呉無じやめ自己の望も協は無と云ふ者たから何分とうか頼みたい者だ若又熱く行  
つた上は約束の三十兩の外に又別段の爲様も在らう故骨を折て呉るが能いと十分過たはな  
し故あはりは能々乗地にして(釘)其様に迄被仰升から何を爲のも御奉公で御座升故私で出来  
ると何様かまあやつて見せうと口には云へさ腹の中では早三十兩令爲氣故是より上は五兩呉  
るか三兩増しか在たらうかと其事のみ目算をして主人の前を退きし其より日程過て風呂

此も遣入り髪を取揚指より自形を取繕て少許の酒肴を箱に自ら携へつ、孫左衛門の部屋に  
行たる後の物語り如何成ん其は亦次の編に綴を見て知るべし

第八十五回

扱もおはりは由良之助が真顔になりて頼しのみか首尾能行けば三十兩の褒美の金に成心故頼  
り心に歡ひつ、或夜少一の酒肴を用意せしを携て孫左衛門が部屋に至り裡の様子を窺ふに  
折宜獨り壁に火鉢に倚たれて居る体障子を明て内へ遣入り(はり)マヤ未お房臥て無子(孫)  
誰だと思へばおはり殿旦那でも御召さるのか(はり)い、エ旦那様は少御頭病が遊ばすと  
御被て早晩に無宵からお房臥遊ばす一若旦那は晝から未お歸りが無からお奥に居ても御出は  
無餘り退屈だから遊びに来ましたノサ其替りに宜いお土産を持て来ましたよ彼酒肴を差出  
し孫左衛門に強付むから追々酒の廻るを見澄し然も厭らさき容地よて心の丈を掻き口説きは  
ては其身を摺寄せて痴果の限りを盡すにぞ正直一團の孫左衛門忽ち顔の色を變へ物をも云は  
すおはりが襟首ひつ掴よと見へけるが其儘廊下へ突出し(孫)汚敷酒肴持て参れと云ひ乍喰  
散したる皿鉢をも供に廊下へ突遣りつ、障子びつりやり締切ばおはりは突出さる、時廊下で  
しつて尻餅付腰をした、か打一にや家内の者も裏鏡しや此物音を聞つけて出て来る者も非れ  
ば人に知れて外聞悪と痛む腰をば堪へ乍突出されし酒肴を自ら手速く取片付已が部屋へお遊  
歸り一人熟々思ふ様去とは分らぬ親親那奴めが甘手車に乗れば三十兩の其上に未四五  
兩の要り出そうと大骨折て酒を呑まれ揚句の果が此様な痛ひ思ひをさせられて些とも埋る所  
がないと言つて此儘濟めるのも餘り智恵のない漸旦那の前は何處迄も熱仕逐た積りに言ふ  
て褒美の金をせしむる其昨夜の始末を雖在て知つて居る者不在は虚とて且那も思ひもせまい

三十二は



若此事が後に露て哀且那の口から表立云はれぬ筋合されば貫ふた金は猶の事遷せ共言はれ無  
去すれば兎も角三十兩取つておくのが上分別と欲に目のない悪婆の本性速も思案を定めつ  
、頼て枕に就いどぞ

第八十六回

次の日お針は由良之助の側に人なき折を窺ひ側り近く差寄て首尾よく孫左衛門を手に入れた  
様に言ふ一袋の金を催促すれば(由)フン 夫程首尾よ成おほせたのに何故又襟首を掴んで  
突出され廊下で轉んで腰をうたや痛めたのだと問れてお針は肝を潰し(はり)エ貴君どう  
て其事をば御存じのぞと云います(由)ハ、お主も考て見たが能三十兩と言金を出事だ者を  
敷心して居れる物かと言てお針は胸ギツクリ流石に面目無けん顔赤て差仰向須臾言答なき折  
りも次の間よりして孫左衛門がつかく入來然も怖き權幕にておはりか昨夜の不始末を悉  
く陳立れば(由)然六ヶ敷言れては仕方かないからはりに暇を遣としやうよト聞よりおはりは  
物と成(はり)モシ且那樣貴君も餘り事を敬仰ではござりませんか何も私かすき好でこんを  
三に唾ても仕掛度事はございませんけれども貴君のお侍故悪い夢でも見た積りて參たのでム  
い升の何か私に咎あつてお暇を下さるのかさア其陣を被仰ま(由)ヤレ其様に兩方から  
廻屈を言れて困る者は此身一個だアな(孫)モシお許の中てムい升が左うならはりが私の部  
屋に參つて淫な事を致たのは貴君のお差圖てムい升たか(由)斯成は面目次第も無難だが實は  
箇様如此とおはりを頼みし始より渠が許り三十兩の褒美を貰ひ受んとせしと我が又立聞せし  
事迄有つる儘に物語れば孫左衛門彌々怒り悪くおはりが舉動と言せも敢ず此方も亦爰に本  
性を顯して悪口雑言に及ひつ、果は互に立上り掴み懸らん權幕に由良之助驚感せしが言葉を

孫左衛門を縛得させ其座をば立せ遣り跡にてお針は金五兩内々に握らせて(由)お主に  
答の有でもないが孫左衛門か那言出しては逆も此儘にしてはおかれ無から下宿して呉ずば不  
成其内折を見合せて又呼回す事もあらうからと是をも色々着むればおはりは逆も此内に居な  
い積で過言を云ふたるのみか大星を欺して褒美をせしゆんとせし身に誤りも有事故所詮何程  
云ふたれば逆此上金の出るでも不有五兩の金でも所得と胸算用を做つ、も承知の由を答へし  
かは順て暇を出せしとぞ是皆大星が計略なるを左様と知ねば宿を下りて有し様子を斯くと彼  
傭竹に物語れば夫程白痴な大星共知らず心を盡せし愚かさよ其様子では中々に敵討は思ひも  
寄らずと仔細委しく書面に認め關東へ言ひ送りしが奸智に猛し傭竹猶大星が住居の様子に心  
を付て居たりとなん嗚呼難い哉大星の苦計正義を躲して阿房を盡し人に訪られ笑はれて敵の  
間者の耳目を防ぎ又反間の方便を設けて身方の義士の志操を探る唯りの父のみならずして子  
息力彌も親に等く表面に懦弱の色を顯し或は遊里の酒に耽り近所の處女を挑てめられぬ淫  
名は立られても本身放埒やらさるは此程おはりが袂より取落たる反古の端に怪しき文體あら  
はれたるを急ぎ父に見せたりし由良之助も兼ておはりを不審に思ひし故かの方便にて追  
出せし也去は方彌か種々なる女に戯れたる中にて彼お捨といへる者のみ顔貌こそ左斗ならぬ  
賤しき水仕奉公をする者には珍ら敷心柔和生質なるに何時しか懐胎したりし様子を由良之助  
は泄聞けど更に驚く氣色なく是も一時の策略と思へばお捨が腹の膨て人目に立も厭ふ事なく  
世間の悪評高くなる此親里へ内々懸合金子の外に衣類万端残る方無手習して生涯不通の約束  
にてお捨に暇を取らせしに素より彼が親と云は前の編にも記せし如く同國八幡在なる薪村の  
百姓にて佛小平と仇名を取りし正直一國の親なる故廻顧がしき事は更也莫大なる金銀衣物

五十二は



六十二は  
を贈られたるに肝を潰して再三辭めと聞入をければかの品々を受頂き娘を引取り立歸りしが  
主人の胤を妊せしは娘乍も手柄者惣とも恥る事はないと世間の手前を憚らず兎角する中月満  
て男子出生したりしかば小平か歎び大方ならず最大朝に養ひしが其後力彌が譬を辭て切腹な  
せしと聞くよりもお捨は深く嘆き悲み終に尼法師と姿を變て大屋親子の亡跡を明暮吊ひける  
なん扱て又お捨か産し子は折から小平に男子あらねば成長の後跡を嗣き大屋方より恵みか金  
にて許多の田地を買調へ其子孫連綿として今尙那地に有と云

第八十八回

去は又由良之助は京都に有て東關の様子を痛かに窺ふ處最早敵の用心も少しは怠慢たる由な  
るに身方の用意整ひたれば時到處と歡て其身は跡より關東へ下るべきの所存なれば兼て手筈  
を定めしとく悴力彌を先へ下して鎌倉に届込し者に安堵させんと思ふにそ鎌寺十内と侶共に  
伊勢参宮と云ひ拵へて花洛山科を發足使爲爾は又十内方には娘お伊與と呼ばれしかば俄に病に  
成されて終に此程世を去りたるに打續きて老母さへ近比身まかりてうても乾かぬ内なれば鐵  
石心の十内故黨時も猶豫做す可様無妻のお丹に跡の事杯細やかに云ひ遺して力彌と共に出立  
ますにぞ並々の女ならば娘に後れ姑を先立て今又夫か旅立す哀別離苦の悲しきは如何斗有  
つらん更ぬたに死別れより生別れ程悲敷は無と常言にさへ云たるにそ是は一端別れては盲龜  
の浮木に會の日は有共又再會の可成ならねば絶も入るべき事なるを貞烈無類のお丹故涙一滴  
眼に持たず夫の首途を祝つ、共に勇んで出遺りしは又有難き賀女と云可是より下に記せ  
しは十内が香妻下りの道中にての詠歌と關東に逗留の間に妻に贈りし敷通の文の中にも要と  
思はるゝを讀みて抄録せし也此文体を味ひ見ても夫婦の中の實情有を看官宜しく察すべし

十内秀和が香妻下りの配行和歌一巻京都なる妻方へ關東より贈る

元禄十五の年都を立て東路に下る道

あまきわかれ今朝うち渡る加茂川の  
水のけふりはむねにたちそふ

あふ坂を越へて

わかれても又逢ふ坂と頼まねば  
たぐへやせまじ四手の山越へ

志賀の浦にて

古郷にかくてや人の住みぬらん  
ひとり寒けき志賀のうら松

都の空にたいに遠ざかれは

ふるさとは心あてなる大まひの  
山もかくる、跡のしら雲

日々時雨ふりければ

別れ行くあひもの雲のたちそふや  
けふもしくる、東路のそら

七十二は

香妻に至りて尋ねるにふるき友の残れるは少し

まぐらかる由かりの草も枯はて、  
霜に起伏すむさしの、原



斯て兩人は吾妻に着しかば力  
 彌は垣見左内十内は仙北又四  
 十二郎と變名し旅宿を求事ら同  
 志の面々を會合立し仇家の懸  
 子を覗ふ内京都なる妻の許へ  
 入りて女の内を抄出す

一筆申入候そも息才に  
 て暮しやされ候や便もな  
 く心もなふ思ふばかり  
 にて候我等一段無事にて  
 候や先く心易かるべ  
 く候幸右衛門新兵衛久太  
 夫親子勘助もそく才にて  
 候

陸に曰く大高源吾變名和久屋  
 新兵衛と云て本庄に借宅一併  
 借の點者と成仇家を覗ふ幸右  
 衛門十内の養子にて源吾の弟  
 也云は新兵衛は太高氏の事にて久太夫は問新又勘助とは中村の事と知るべし



九十二は

接するに十内は惣髪をりしと聞ゆれば斯いふならんか  
 一我等力弱との、宿へ移りや候今迄の所にてはなれ候郷右衛門とは少々隔る方へ参り候

一我等立て十日ばかりして文も待みて御越候へと申置候けふこの比は文來るかこそその傳  
 手約束の方へたづね申候へどもきの迄は参らず候さため頼てどこぞ届き候半と待  
 兼ね申候へ便り聞度待申に候(中略)  
 一兼ての覺悟も違ひ手もちからもなく驚は紛れ給へと夜の目もいね給はで思ひめぐら  
 申され候よしきこそと思ひやり此かたとても同じ事にも候水はなれと申談り候御申の  
 如く月が立にたがひ愛は増候半事見もやうにて候常しく申どくに人間に榮へ衰へ常  
 なき事道理をよく悟り候は、うきも却くまことの道に入たねに成るゝかやうの事  
 は荒増合點のまへにて候尙又心ある人に出合ひ咄も聞勘ぬも聞て悟り給ふより外の心  
 得も慰みもあるまじく候過しあを思ひ出往くも殘るも其在様を思ひくらして盡る  
 事あるまじく候互に身のさまをも心のうちをも斯くこうとせめて思ひを忘れぬたね命  
 ある内の内のかし共思ふより外はす可かたなく候只いたはしく思ふばかり候(中略)  
 一愛元の有様一日しと暮し申候若き者とも殊更いきりて扱々いさぎよく見へ申候忠左  
 衛門郷右衛門久太夫我等年寄て万事申合候朝日にも芝居面見世しは面見世と云ひしと  
 ぞ時に十一月とて若き者郷右衛門も見物に参ると見へ申候内の者も豊くを自ら何もか  
 もするにて候若き者とも骨折申我等老人にて殊の外かわわがりて朝夕の通ひまでして  
 異申候尙も若き者寄りて賢者にて候とて仙北十庵と付て十庵様くとも申候殊の外馳  
 走申候



先々今日迄達者にて候は、心易かるべく候其元何にも悟り心よく暮しやさるべく候  
いつの日如何なる事を聞んどのと尤にて候今も如何なる事を聞たると思ふ心に在りて  
居可被申候又、文遊は、可く候人なく候ま、此文も幾度にか認申候をろく見可被  
候返事とて此方より言ひ遣りたることを皆片端より返事に及ばず候其元の入用のみ  
御申越なされ候か、

十一月三日

せんはく 又 四郎

右に記せし文の中に猶數箇條有と省きたる條も有中略下略なせしもあり是より下に書し出す  
大納斯の如也紙數冊小冊中に記し難故と知るべし尙具なるを知らまく欲せば吉田小野寺遣  
書歌と表題をせる古寫本あり看官幸ひに求め得ば其委しきを知り玉ふべし予も其書より抄録  
す

第八十八回

正月十二日洛の妻方へ送十内の文也十二日は討入より三日前と知るべし

一軍申入る、此ほど登せ候文届き申候ま、此元の左右今や、と待玉ふらんと其心のう  
ちあし計りらる、此許の事やう、時至りらる、此上いかなる大變あらんは格別かはりな  
るとなれば最早けふより三日は過申まじく候二年のうら我人幾はくの心つく、身を  
くだき申候甲斐ありて此時節いたり候事先々是迄をも本望と悦び勇ましく先にも無心  
あるべければ勝負は互ひの天運次第にて候兼ても申如く公義よりいか様の御咎めにて  
たとへ戸をさらされ候ても少しも恨とも物も、とも思ふ間數候忠義に死したる骸を天  
下の武士に見せて人の心ろも勵まさん事却て本望にて候斯のとくの心さにて候ま、

ゆめく無道ひめさるまじく候心安う思ひ給ふべく候うも、と兼々の合點の程もそんな  
候ゆへたとへ萬一いか様の難儀か、り來り候とて見苦きやうには有まじく候又何  
事もなき世の中にては猶もつていかやうとも渡世ゆさるべし心のはたらもあはし  
すと覺へ候ゆへ中々心易くぞんじ候今更思ひ殘る事もなくて心よく、打立候ま、そ  
おもとにてもせめての本望と思ひ給へか、にて候此度の轉我身ひとりにあらずと  
も簡様に珍らしきはさて成果る者に添ひてうきを見給ふ事いつの世の悪縁かとおも  
ふにかひもなく是非に及ばぬ因果の程たがひに思ひあきらめの外なく候爰元の掃明た  
る事の便より候は、一番に玄溪より

此に曰く玄溪は寺井氏にて京都に住せし鹽谷家の醫師なり附入の以前より關東に下り本町一  
丁目七文字屋隔三右衛門といへる見かたに旅宿と十一月廿六日京都へ歸ると或書に見へた

知らせ可申候世の沙汰も聞つくりひて此程も申入候とてくの心得をよくく、さろへ  
候中略時節も近づきあたりも銘々に仕度のや合せなどて人多く此文も夜明に二階  
へのほりて暫く書候ゆへ何方へも文遊は、不申候慶庵どのはじめ西方寺了賢坊へなほ  
頼申來るか院様なほ、頼申候荷物も一兩日中に下り可申候其には文も成り次  
第にて候詠歌たんざく使可申候見て慰み賜へか、にて候はやく人々はやつき筆を留  
まいらせ候後の事願入る、か、

正月十二日

あのでら

十 内



おたんだの

猶書上書未代まで天下に名を書と、ゆん事具の本望これに過ぐわらずともじ見て  
も嬉しく思ひ賜ふべきとせめて夫をそもじへ名のかたみとも覺へ賜へかりにて候此も  
との左右なきやうさは沙汰せしにて候  
おたんの歌一首左に記す

筆の迹見るに涙の時雨来て

ひかへすへき言の葉もな

僕道文を抄録なり此歌を寫すにさへ貞烈義膽に感じ入りそらに涙の催ふされては筆  
を閉くとあり書を聞くの婦幼等十内夫婦の心の底をよくく汲も分んにはかの樂んていんせ  
す裏てやぶらすといふ理の教に違ふとなき夫婦別ある趣を知らんか爾れは只其文のみうつさ  
は難倦るべきともあるべし下の回には十内が討入の日まで妻にあくり短き文を抄出し例の  
俗語の咄にうつして淫婦お聞が物語の篇遣したる所よりわ七倉橋全助が智勇の傳る綴らんか

第八十九回

帥寺秀和は境谷家の藩主から久しく京都の留守居を勤めて年來那地に在任せしわば堂上方に  
も出入して其名は雲の上迄知られし名譽の隨歌なりしわば妻に贈る文の文体咄しの様に認め  
在る自からに命をらで然も具情の現れたる至り難き事云ふ事無至極の文才也と見へたり

十二月十三日妻へ贈る文 討入の一日

十二月 文玄漢より届可申候夫に申入候通り的事にて最早云ふべきふもなく只そら

もとの事思ひやるばかりにて候狭箱一つ無きふとん上下羽織共外小具道具たぐい込  
みいた、ゆ美濃屋太兵衛へのはせ申候御受取あるべく候短冊も遣し候大屋方彌殿十五  
にてせい五尺七寸よるつ是にて相應の働き扱々珍らしき事故短冊か、せおくり申候手  
も達者に御座候幸右衛門九十郎新兵衛もあな事には心掛候ま、心易かるべく大候へん  
なくば便りも聞かせ申さし候かり

十二月十三日

十 内

おたんだの

逢ふときり語りつくすとおもへども 大屋方彌 良 金

わかれとをれば遣る言の葉

十二月十四日妻方へ贈る文 討入の日

かやうに書申所へ文美濃屋店より受取申打折ふし嬉しく候

一金二兩美濃屋へ御渡し受元にて取れとは申候へども最早入不申候また太兵衛のみ屋を

より返させ候ま、そごもにて太兵衛より取り可被申候心入過分にて候

一歌ども扱々感じ入り涙をうるほし候心の内いたく敷存候殊の外取込み候砌りにて何

事もくばしゆ入れす候思ひあらたぬ賜へかり太兵衛店にては明日受元へ立て京へ登

ると申願てあらはれ可や様存候もはや此度にて心のかよひも是限りにて候受元のと心

安かるべく候以上

十二月十四日

十 凡

おたんだの



辭世の歌

わすれぬる百にあまする年を経て  
つかへり代くの君がなさけを

四十三は

此文の文体にては十三日の文書終り所へ美濃屋より妻の文届き一故書添へて贈り一様と思はる猶考ふべし

大星由良之助良雄浪人の内花落山科に住し十内と懇懇にせしかは關東より暇乞のため秀和の妻方へ大星より送る十二月十日の状

家來左六幸七いとま遣一戻候ま、一筆申入る一けしわらぬ寒毒になりや候いよく御息打のよし折し十内殿の便り承り珍重に存じ候爰元十内どの彌々御無事に拙者相宿にて晝夜御心安く申談一大阪にぞんじ候少しもわづらはしき事御座なく候ま、思氣遣ひ被成まじくひ(中略)十内殿御一家大勢御揃ひ此度忠死の事實にもつて御信切の御心ざし後代まで御外聞と御浦山一候我等一家も大慶扱けともにて我等父子同名にては彌左衛門一人ばかりにて面目もなき事とも候家來孫左衛門事去る三日に立退候元來輕き者の事に候へどもわれら外聞ともぞんじ悦こひ申候所しとく不届に存候  
彌左衛門は譜代の家來にて律義一逼の堅詰と聞へし如何してか變心なしけん尤も奥野將監初佐々木小左衛門進藤源四郎小山源五右衛門等が如正義第一と思これつるも異論を言ひ立違外せ一故大星たも力及はずと言ひける由堀内氏の記筆に見へたり況で陪々臣の孫左衛門故渠等に比すれば論ずる事なし

併高きも賤きも珍しからぬ此一事にて候先申聞しへ候は幸右衛門どの源吾どの其外も御無事に随分と健かか事供にて候儘御氣遣ある間敷候(中略)又は御暇乞のため旁々かく

のどとくに御座候もはや御返事被下候事御無用に存候  
十二月十日

大はしらの助  
おの寺十内殿  
御内義人々

向せつ角御無事に御被成  
成らし十内殿事ハ御氣遣ひ被  
成まじく候晝夜うち寄酒など  
給候てその日を樂しみ却てお  
もしるく存じ候猶左六くわ  
く申る以上  
芳田忠左衛門兼亮關東より秀和  
が妻へおくり一歌  
おもひ捨し夕なれど  
もふる里の  
便りやと聞く  
はつ鷹の聲  
原郷右衛門元辰吾妻下りの道中  
臥て臥せる歌とて秀和が花落の



五十三は



妻へおくる

六十三

ながらへば命ともなれ夢の世に  
越ゆるや名残佐夜の中山

義士の才女数多あれど大星及び原吉田等より書又歌杯贈し者十内が妻の他に聞かじ是のみに  
ても心はへの真烈なるを推て知るべし猶おたんの身の終は姑且後の編に譲りて次の回より物  
語兩頭に分れば宜しく前後を合せ見給へ

第九十回

(蘭)エわ七さんお前心持でも悪のかへ何だか鬱氣で斗お出だチエ併が共も其替サ今迄熟く話  
込で可愛のいとーいのと云ひ合つて居た小雛様を無理無体に高様のお屋敷へ上たのた者を嘸  
分頃は師直様のお手が付し何様だらう斯うだらうと考へたら堪ら無ノサチエ私も最も少一歳  
が若くば那様のお様に思われ様に口惜い物は旅だチエ一寸言ふにも嫉妬敷生厭しきお蘭の言  
語の胸懸けれど爾あらぬ体にて(わ)ハ、又解らないおとを被仰升子(蘭)アイサ私は解ら無  
ノさどうせ那様の様に種々の坐敷を勤めて酢も甘いも知つて居る者とは違お升ヨと反り身に  
成てソレトするも(わ)モンそなんな腹をお立被成事はございません私分が有と申たの  
はまア考へて御覧じまし小雛は主人の娘でござい升者を何様致されませう若又那様と情曲の  
有のなら假令誰が何と言ひませうが違て逃る迄もお屋敷へ上させは致しません夫を私が口を  
利て上る様に爲たのだらう情曲の無事は分りそを物だと思ふのは何やに就て貴女が乙なこ  
とを被仰るから解らないと申たのでござい升(蘭)實正に然らば堪しいけれ共何様も疑がは  
しい事だからソレ愚痴を言つたのだから堪忍してお呉ヨ(わ)貴女のお心さへ解ければ能しい

のまゝ去はせりて内蔵三他に御用が無は一寸相生町迄行て参り度ござい升ト頼めばお蘭は  
不性不性に値の暇を許したれば羽織引掛け裏口よりそくくにして出行く折しも向ふより來  
る八百屋傳八何れた氣の急様子にてわ七と袖を撞違つて通れど必不著体にてお蘭の居住に道入  
りし有様合點不行と思ふ故わ七も其儘小戻りして勝手知りたる庭口より足を爪立て忍び入り  
様先近く身を屈て様子如何にと立聞共内には更に知らざりけん傳八は勝手より奥の一間に  
赴きつ、お蘭の側へ膝摺寄せ扱石町の貸坐敷へ只今赤尾の浪人が潜んで居る由を聞出たれば  
若や其事に付き備竹さんから手紙が來ては居まいかと例の飛脚屋を尋ねた所安の定大急きの  
狀が届いて居ましたれば何でも是れ一大事と宙を飛で届けに來た由息を凝して物語ればお蘭  
は俄に顔色變へ(蘭)共やア大騒動だチエ何にしてもお手紙を速く松原様へ進度者だが今日は  
生憎内中の者が皆な留守だのに達た今わ七まで宿へ遣つて呉ると言て出て行つたから内を明  
て私が行く事にもいかなないから逆者事の御苦勞序で松原様迄行つて行つて届けて進でお呉で  
無かお前は常からお出入ではある一内証の事を頼んだ譯も左様が御存じだから私も同様に  
思し召てお出なされるに違ひ無よ傳へい左様なら私が持てお往てお前三かお留守が無のでお出  
なされる事の出来無事迄申ませうか夫にしてはお内蔵三エ私が是程大汗になつて馳て歩いて石  
町の譯も聞出し此手紙も取て來たのでござい升から何卒骨折丈の事はお前三から松原様へ被  
仰て一元手にも在付様に御願ひ申升何れ共が先立無ては骨も折られませんから(蘭)そりやア  
三言はずと承知だと其手紙を持つて往つたら大方左中様が唯はお飯いなさいは爲まい急度夫相  
應な事はなさらうはチエ言はれて喜ぶ傳八が大事の手紙とかの一封を以前の財布の中へ入れ  
七十 共儘首へ引掛暇を(わ)そくく又裏口より出往くをわ七は始終立聞して借こそ違はぬ一



大事は知れぬと那一通を敵に渡さば味方の手速ひ然りと照頭つ、後追掛て駈行きける

八十三は

第九十一一回

借もつ七の傳八おらんの耳口体を洩開て打響きつ其儘は周章ふためき傳八が後追駈て走行くを夫と知らぬと傳八も心急ぎの被爲儘に足を速めて行掛處も高の長屋下日も早入りて薄暗が折しも四邊に人も不來ば天の宛へと悦ぶわ七頼ひ寄つ、後より掌を堅めて突出す急所の體身に傳八は何かは以堪べきウツト仰探に倒る、を爲すまじ爲と指寄つて傳八が懐なる例の財布を奪取り後をも見ずして逃去りしが薄暗の事なれば幸ひにして人も不咎終に其場を逃延びて相生町に走り行頼て五兵衛に對面を在り様子を物語り上件の書状を取り封を

はがして柄を見るに  
以飛札申演假兼て内々御頼に付鹽谷浪人之様子無油斷穿索致居り候處大星事は此程伊勢參宮より東國へと罷越一其外鹽谷家之浪士共所々に住居致一候面々何國へ立退申候哉京地にて一人も相見不申此上之御心遣存候間不取敢御知せ申上候尙又委敷様子聞出候は、早速後便可申上候何も差急ぎ要用のみ得御意度如此御座候恐々謹言

十二月二日

松原 左舟 様

數井 備竹

讀より二個は打驚きたる中にも五兵衛は吐息を吐(五)イヤ最斯云事が有故油斷も透も不成のだ併貴公の働で此書状が松原とやらの手に渡ら無先に這方に取揚たのは天道我々の忠義を憐み給ふと言ふ者だらう(わ)ホニ然たらうチユ兼て此備竹と云奴は肺直の間者に成て有事無事注進をする云事は元老のお咄でも聞た一又お聞や傳八が其中繼をする云事も薄々勘

付て居た折若やと思て立開を爲のが實に神の助け(五)マア何に爲も此手紙を大星氏に御覽に入て此上御賢慮を伺ふが能うじやないか(わ)夫は素りの事だが又熟々と考へて見と那傳八が大事の手紙を被取た事を左仲が聞たら手紙の無ので事柄は分ら無ても備竹から至急に知らせ越たのは何か仔細の有事に違ひ無と折角少一油斷を爲けた所を元より嚴重に用心をされでもする本意を遠る邪魔に成では有まいか(五)成程そりやア貴公の言ふ通たが今と成て用心をさせない様にする工夫もあるまいじやア無か夫共他に妙計でも有は重疊だか(わ)妙計と言ては無か此手紙を宜お見さい京地には一人も相見へ不申此上之御心遣と存候間と書て有之此の字をば者の字に直し御の字を無の字に書直すと京地には一人も相見不申此上は無心遣と存候間と讀升だらう斯う直した手紙を元の通に封じて傳八に返して遣ると左仲が見是では安心だと思ふ油斷をするは必定其處へ附込て本望を遂首尾能成就爲うかと思れ升(五)寔に是は妙策だが爾此手紙を傳八とやらに返のが餘程六ヶ敷さう九譯だチユ(わ)ナニそりやア爲様があり升から御安心なさい升と云つ、硯箱を引寄て件の二字を書直に神佛忠義を感納ありてか筆法と言墨色迄直せ一文字をば更に見得ず素り書きたる如くなるお急五兵衛を始めわ七さへ我ながら呆れつ、是なら必ず首尾よしと打撃びて其場を立ち足を速めて歸り行浩る可とは毫知らぬお聞は嚮に傳八を以て備竹の書状を送れば翌日は必左中が許より厚き謝禮の來る可今皆は折柄寒さも強し先づ前祝ひに酒買ふてわ七が戻らば例の通り彼を相手に樂まさんと有折へ杯宛待共わ七は戻り來す那程云ふてやつたれば泊つて來様筈はないが夫共何處そに面白く穴でも出來て歸らぬのかと獨り氣を揉居る所へ勝手口より傳八が氣に來りて斯様く斯々に有次第を委しく告げ其身は一時氣絶せしを往來人に助けられ漸々正氣にはなりわ

九十三は